

2021 年度

第8回

アクサ ユネスコ協会

減災教育プログラム

助成校 27 校

2022 年 3 月

実践活動報告書

～ 目 次 ～

1. 根室市立光洋中学校(北海道)【P. 4】
2. 気仙沼市立階上中学校(宮城)【P. 6】
3. 鶴岡市立湯野浜小学校(山形)【P. 8】
4. 山形県立加茂水産高等学校(山形)【P. 11】
5. いわき市立田人中学校(福島)【P. 13】
6. 新座市立石神小学校(埼玉)【P. 15】
7. 埼玉県立日高特別支援学校(埼玉)【P. 17】
8. 板橋区立板橋第三中学校(東京)【P. 21】
9. 町田市立武蔵岡中学校(小中一貫ゆくのき学園)(東京)【P. 24】
10. 帝京中学・高等学校(東京)【P. 29】
11. 神奈川県立座間高等学校(神奈川)【P. 32】
12. 見附市立葛巻小学校(新潟)【P. 34】
13. 新潟市立小針中学校(新潟)【P. 36】
14. 御嵩町立向陽中学校(岐阜)【P. 38】
15. 羽島市立桑原学園(岐阜)【P. 41】
16. 小山町立北郷中学校(静岡)【P. 43】
17. 岡崎市立竜海中学校(愛知)【P. 47】
18. 鳥羽市立鳥羽小学校(三重)【P. 51】
19. 京都府立綾部高等学校東分校定時制(京都)【P. 54】
20. 京都市立京都工学院高等学校(京都)【P. 56】
21. 大阪府立緑風冠高等学校(大阪)【P. 58】
22. 兵庫県立和田山特別支援学校(兵庫)【P. 60】
23. 古賀市立花見小学校(福岡)【P. 66】
24. 大牟田市立倉永小学校(福岡)【P. 68】
25. 大牟田市立宅峰中学校(福岡)【P. 70】
26. 三島村立三島片泊学園(鹿児島)【P. 74】
27. 竹富町立古見小学校(沖縄)【P. 80】

学校名	北海道根室市立光洋中学校
担当教員名	鈴木 健太

活動のテーマ	避難所開設訓練を通じた二次・三次災害減災と防災に対する意識の向上
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間、道徳、特別活動）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1, 2, 3 学年 321人）（複数可）
活動に携わった教員数	33 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	16 人 【保護者・地域住民・その他（市職員、自衛隊、消防）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 4 月 14 日 ～ 西暦 2021 年 11 月 6 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

市役所・学校・地域住民が協力し実際に避難所を設置することで、どのような役割分担が必要なのか、必要資材等の把握に努め、地域連携強化と対応力の強化を目的とする。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- ・4月14日…第1回避難訓練（校内の避難経路・危険個所の確認）
- ・8月25日…第2回避難訓練（実際の避難訓練、水消火器による消火訓練）
- ・9月17日…第1回実行委員会（原案と役割分担の決定）
- ・10月14日…第2回実行委員会（各分担業務の進捗状況の確認、事前学習の確認）
- ・10月29日…教職員対象事前研修（市防災担当講師）
- ・11月2日…光洋中生徒対象の事前学習
- ・11月4日…第3回実行委員会（直前準備、最終確認）、3年生対象の事前学習
- ・11月6日…防災学習実施
- ・1月25日…第4回実行委員会（次年度に向けての反省、検討）

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・9月研修会によって、教職員向けの研修を充実させることができた。それにより、教員の中で防災学習実施へ向けた意識づけや方向性の確認をより強固なものにできた。
- ・研修会と助成金により、生徒向けの事前学習を改善・充実させることができた。市で実際に活用するものと同じ段ボールベッド、パーテーションを用意することで、より実践的な活動にすることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

研修会で学んだ減災教育の基礎と理論から、身に付けさせたい資質・能力を明確にしたうえで今回の防災教室の実践を迎えることができた。それによって、1日限りのイベントという位置づけから、より実生活に基づいた活動にすることができたと考えられる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

避難所開設訓練を通して、実際に避難者が来た際に連携を取るためのコミュニケーション力や、起こりうるアクシデントについて考える思考力を身に付けることができた。また、東日本大震災で被災した方の講話を通して、どのような被害があったのか、また、それに対してどのような備えができるか学ぶことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

実際に災害が起こり、学校が避難所になった際に、教員が関係者機関と連携してどのように動けば良いのかシミュレーションすることができた。さらに、生徒とともに活動に参加することで、非常食の作り方やパーテーションの立て方など実際の技術も習得することができた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

1年生の活動では、非常食体験やDIG、備蓄チェックラリーなどの「自助」に重点を置いている。2, 3年生の活動では、学年をまたいで縦割り班を作り、交流する「共助」を重点に置いている。各学年で役割や活動を変え、毎年同じ活動にならず、系統的に学べるよう工夫している。また、PTA や関係機関にも来ていただいて、より実践的な活動にしている。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

新型コロナウイルス感染防止の観点から、地域住民の参加を制限して行ったが、次年度以降は感染防止対策を取りつつ参加できるよう工夫していきたい。併せて、コミュニティスクール構想の中核となる取り組みなので、今後も参加対象や活動の範囲を広げられるよう工夫していきたい。

学校名	気仙沼市立階上中学校
担当教員名	大野 実紗

活動のテーマ	「私たちは未来の防災戦士」
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（全学年103人）（複数可）
活動に携わった教員数	26人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	120人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年 5月21日 ～ 西暦2022年 1月27日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（地球温暖化による異常気象）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ① 様々な視点で防災と向き合うため探究学習を行い、未曾有の災害から命を守るための方法を追究し、これからの社会を「生き抜く力」を養う。
- ② 地域の現状や自己との関わりを理解し、地域の一人としての自己の役割や望ましい社会を実現するための行動について考える。
- ③ 地域の人材や他者と協力する力を高め、主体的に社会に参画しようとする態度を育てる。
- ④ 防災・減災と向き合うための様々な視点から課題を見いだし、その解決に向けた仮説を立てたり、獲得した情報を基に、批判的、多面的、総合的に考えたりする力を身に付けさせる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	総合的な学習の時間		その他
	体験学習	探究学習	
4月	避難訓練（全学年）		
5月		防災学習ガイダンス	
6月	東日本大震災伝承館TSUNAMIメモリアル訪問（1年） 女川町訪問（2年） 救急救命講習（3年） 避難訓練・規律訓練（全学年）	海×防災 講話 課題設定	
7月		課題設定	防災委員会「カルタ制作」
8月		情報収集	
9月	アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム参加（3年）	情報収集	
10月	小学生への防災啓発活動（3年） 火災対応避難訓練（全学年）	中間発表、実践	
11月	階上地区総合防災訓練（全学年） 小学生への防災啓発活動（3年）	まとめ	防災委員会「避難所初期設営マニュアル見直し」
12月		防災学習発表会	理科2学年「天気とその変化」
1月		防災学習振り返り、講評、レポート作成	理科1学年「動く大地」、理科3学年「環境問題」、理科全学年「レポート作成」 社会「環境問題」

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 9月の研修会の学びで自校の実践に活かしたこと

9月の研修会では、教科横断的に学習を行う「クロスカリキュラム」を学んだ。そこで、総合的な学習の時間のみで行っていた学習を9月以降は教科横断的に実施できるところがないか検討し、実践した。防災学習の1年間のまとめとしてレポートを作成することとしたが、作成方法については理科で学習するため、理科の時数を利用して行った。

② 昨年度までの実践と今年度の実践で変わった点

ア 助成金を利用して、デジタルカメラ、SDカードを購入した。このカメラを伝承施設や被災地訪問時に生徒へ預け、学習内容を記録させた。個人で記録ができたことで、学習内容のまとめや振り返りのときに、画像を用いることができるようになった。

イ 生徒個人が使用できるタブレット(iPad)が昨年度から導入され、活用が始まった。そのタブレットの活用方法を充実させるためにタッチペンを人数分購入した。防災学習全体を通して、タブレットを活用する様子が見られた。

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

理科の時間を使用してレポートを作成することで、時数が足りないという問題を解決する兆しが見えた。また、防災学習が総合的な学習の時間の目標である教科横断的な学習であることを生徒自身も実感している様子が見られ、目標達成に近づいた。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

学習前後のアンケート調査結果で変化が見られた項目

ア 災害についての知識 知っている災害の種類や内容の理解が深まった。

イ 多様な種類の課題の結び付き 地域課題が国際的な課題と結び付いていることへの理解が深まった。

ウ 地域の課題の解決方法 主体的に考え、地域に解決策を提案できると答えた生徒が13%増加した。

エ 粘り強く取り組む姿勢 難しいことがあってもあきらめずに取り組むことができるようになった。

オ 学ぶことの意義の理解 表面的な楽しさではなく、学ぶ意義を感じるようになった。

③ 教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

地域の課題を生徒と共有し、一緒に考えていくことができる。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

① 個人探究の実施 自律的に考えさせるために個人での探究を行った。

② 視野を広げさせること 海洋教育の視点から、グローバルに考えさせるために地球温暖化や海洋についての講話を聞く機会を設定した。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

① 実践から得られた教訓

ア 個人探究にしたことで、課題が自分事になり、主体的に考える生徒が増えた。探究の形式は、個人探究で行う必要があると分かった。

イ 教員が計画した講話などにより、探究課題のなかで、地球温暖化や海洋プラスチックなど国際的な問題について考えているものが増えた。個人での情報収集も大切であるが、生徒に身に付けさせたいことに対する手立てを用意することも重要であると分かった。

② 課題

ア 生徒が地域のことや防災について、どれだけの事前知識を持っているのか分かっておらず、必要な内容を必要な分だけ知識を身に付けさせることができなかった。

イ 個人探究にしたことにより、生徒は、課題を一人で解決しなければならないと考えてしまった様子だった。結果、他者との関わりが減少し、他者と協力する力の育成が十分ではなかった。

ウ 総合的な学習の時間を利用した防災学習となっており、教科との連携が不足している。

エ 感染症拡大の影響により、地域の集まりに参加したり、地域の方を学校の発表会に招待したりすることができなかった。

③ 改善策

ア 生徒の地域や国際的な問題への理解度を事前に把握し、必要な予備知識を持たせる。

イ 他者と協力することの必要性を理解させ、探究の中に、協働的な学習場面を意図的に設定する。

ウ 4月の段階で、どの教科のどの部分が総合的な学習の時間に対応しているのかを一覧にした「ESDカレンダー」を作成する。

エ 地域の方から講話をいただいたり、訓練での助言をいただいたりするなど、地域と連携する機会を増やす。

7) その他(※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ(JPEG)もご提供ください。



学校名	鶴岡市立湯野浜小学校
担当教員名	若生 瑞季 (安全主任) , 八渡 宗一郎 (校長)

活動のテーマ	家庭や地域社会との連携・協働を図った組織的・計画的な防災教育に関わる取組の推進 ～民間施設への避難訓練及び保護者への引き渡し訓練をとおして～
主な教科領域等	教科領域 (特別活動(学校行事, 学級活動), 総合的な学習の時間, 社会, 理科)
アプローチ	※該当するものに○をつけてください (複数可) (○) 地域連携 (○) 避難訓練・避難所運営 (○) 専門家の活用 (○) 体験学習 () 学校間・地域間交流 () 教科連携 () 地域発信 (○) カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	(1～6学年 109人) (複数可)
活動に携わった教員数	15人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	90人 【保護者・地域住民・その他 (市職員, 警察官, コミセン職員, ホテルスタッフ)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦 2021年 4月 1日 ～ 西暦 2022年 1月 31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください (複数可)。 (○) 地震 (○) 津波 () 台風 () 洪水 () 河川氾濫 () 土砂 () その他 ()

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ・地域における日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる児童を育成する。
- ・避難訓練及び引き渡し訓練の内容の見直し、教育活動を通じた防災教育の推進、防災教育の指導方法・内容の工夫および改善、災害発生時に活用できる生活能力の習得等を目的とする。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール (※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい)

- 4月 全校 防災教育の進め方の確認 (職員会議)
- 5月 全校 避難訓練 (地震想定で避難場所の確認とハザード・避難時間を意識化する)
- 7月 全校 鶴岡市津波情報伝達訓練 (防災無線による避難指示、旧ホテル前駐車場で待機、保護者への引き渡し)
- 10月 全校 防災講話 (湯野浜小学校の防災教育について、校長が実施)
- 11月 全校 予告なし避難訓練 (村山先生による地震想定訓練の視察及び職員向け防災研修の実施)
- 4年 村山先生との防災授業 (訓練後のふり返しを含む)、11月 防災教育に係る授業研究会
- 12月 その他 ホテルテトラリゾート鶴岡へ防災資材等の設置

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで (助成金を受ける前) の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・災害経験のない児童に対して、防災を「自分事」するために工夫が必要なことや、児童に「自分の命を守ることができる判断力と実践力」をつける必要があることに気付いた。そのために、避難訓練の在り方を大幅に見直した。
- ・率先避難の考え方 (大地がゆれたらすぐ逃げろ、より遠くへ! より高く!) や避難先での備蓄の必要性 (備蓄は避難先がないと意味がない) を再確認した。
- ・近隣のホテルから緊急時に宴会場を避難所として使用してもよいとご承諾いただいた。併せて避難所スペースの近くに専用の戸棚を置き、水やビスケット、衛生用品等の備蓄資材を入れさせていただけることになった。助成金により、ホテル使用料や備蓄資材の整備をまかなうことができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・避難訓練の見直し (予告なしによる地震避難訓練について、実施方法、児童への意識化、ふり返りの実施等)
- ・防災教育計画の見直し (各学年の発達段階に応じ、新学習指導要領に準拠したカリキュラムマネジメント)
- ・防災学習の位置づけ (4年生の総合的な学習の時間における教科横断的な単元開発)

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・避難訓練の在り方を大幅に見直したところ、災害経験のない児童に対して、少しずつ防災を「自分事」できたことや、児童に「自分の命を守ることができる判断力と実践力」をつける経験を積ませることができた。
- ・専門家による防災授業や実践的な避難訓練と引き渡し訓練、防災教育に係る単元開発等により、少しずつではあるが安全の保持増進に関する実践的な能力や態度の高まりや、望ましい習慣形成ができてきた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・避難訓練の工夫やより現実的な保護者への引き渡し訓練を実施することで、家庭や地域社会との連携を図ることができた。併せて4年生の防災学習では、市職員や警察官、コミセン職員、町内会長といった地域で直接防災を担う方たちとの交流や活動の実践をとおして、地域の防災に対する意識の向上が図られた。
- ・活動の様子を学校だよりや地方新聞で広く家庭や地域全体に知らせ、家庭や地域社会と連携した防災活動の展開に努めることで、少しずつではあるが地域ぐるみの防災教育を推進することができた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・令和元年度より、高台にある民間施設（自動車学校の宿泊所）への避難訓練及び保護者への時引き渡し訓練を実施している。訓練では20分ほどの間に保護者から引き取りをしていただくが、本当に地震が起きた時には長時間屋外の駐車場で待たなくてはならないことや、保護者が徒歩で引き取りにくることが課題となっていた。そこで、新たに避難所となる場所を探していたところ、海拔17mにあるホテルの支配人から緊急時に宴会場を避難所として使用してもよいとご承諾いただくことができた。併せて、避難所スペースの近くに専用の戸棚を置き、水やビスケット、衛生用品等の備蓄資材を入れさせていただけることになった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・今年度の実践を通して、「災害に適切に対応する能力の基礎を培う」という防災教育の基本と、児童と教職員の防災意識が高まったことは成果である。今後は今回の取り組みで得られた知見をもとに、教科や総合的な学習の時間、特別活動など学校の教育活動全体を充実させ、いっそう工夫・改善された防災教育の継続・発展を目指したい。
- ・令和4年度は、7月の鶴岡市津波情報伝達訓練の際に、ホテルの避難所を利用してより実際に即した避難訓練を実施する予定である。具体的には、高台の駐車場への一次避難後、ホテル2階の避難所へと全員で移動し、そこで備蓄された水と食料を受け取り（避難所滞在）、保護者の迎えを待つ（引き渡し）という訓練を行いたい。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

- ・研究の継続と課題になった点を解決するため、2022年度も研究を継続していく予定である。

学校名	山形県立加茂水産高等学校
担当教員名	佐藤 久哉

活動のテーマ	学校・地域の津波防災教育の推進及びあり方
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間・水産・特別活動）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1 学年 28 人、全校生徒 77 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	14 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	5 人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 6 月 8 日 ～ 西暦 2022 年 1 月 21 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

年1回行われている地震・津波防災訓練の見直しと減災の視点を加えた減災教育プログラムの作成
1年生の総合的な学習の時間に、地震・津波に対する防災・減災教育を実施し、生き抜く力を育む
学校裏がすぐ海のため、地域と連携し日本海沖地震・津波の被害をできるだけ少なくする

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 6月 地域学習（地域の歴史・特性）1年生（海洋シラバス） 地区自治振興会職員
- 6月 地域学習（地域の歴史・災害）1年生（海洋シラバス） 地域歴史編纂委員
- 7月 防災訓練（地震・津波）全校生徒・職員・地域住民
- 8月 地震・津波学習（発生メカニズム）1年生（海洋環境）
- 9月 防災・減災教育の必要性（教員研修伝達）1年生（海洋シラバス）
- 12月 地震・津波講習会（市防災安全課職員）1年生・職員・地域代表
ハザードマップを使用した地域防災計画の説明および防災・減災対策
- 12月 津波防災・減災教育に関する講演会（及川幸彦氏）全校生徒・職員・地域住民
東日本大震災の被災状況、SDGs と減災・防災教育、山形・庄内の防災・減災教育

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

1年生の総合的な学習（海洋シラバス）の地域学習で、歴史や特性と今年度から防災・減災教育を追加し、教員研修の資料を基に、9月に防災・減災教育の授業を行った。また、市の防災安全課職員を講師に地区の防災計画（ハザードマップ使用）、防災・減災対策について講習会を新たに実施した。（職員・地域住民代表参加）

また、及川幸彦氏を講師に迎え、全校生徒・職員・地域住民も参加した「津波防災・減災教育に関する講演会」を実施した。東日本大震災の被災状況、持続可能な社会の構築のための防災・減災教育、庄内地方の海岸地形の特性と津波避難、地域・社会と連携して防災・減災教育を育む等、生徒・職員・地域住民にとって現実の問題として感じとってもらえる貴重な講演会となった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

1年生の総合的な学習（海洋シラバス）の中に、防災・減災教育を位置付けることができた。本校は校舎の裏がすぐ海なので、地震・津波災害からは避けては通れない環境にある。今回、防災教育に加えて、減災教育という新しい考え方を導入することができた。及川先生の講演会で、全校生徒・職員・地域住民が災害大国日本における津波防災・減災教育の必要性を認識することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

ハザードマップを使用した講習会では、具体的な津波到達時間や最大津波高さ、減災教育では、自助・共助・公助の大切さなどを学び取ったことがアンケートからうかがえる。また、講演会では、東日本大震災の状況など具体的な映像や被災状況の話があり、防災・減災教育の必要性や日頃の対策について考える機会となった。地震・津波について身近に考え、対策についても再確認し、自然災害の恐ろしさを学ぶことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

講習会や講演会には職員や地域住民にも参加してもらい、減災教育という視点を学ぶことができた。山形県沖は地震の空白域となっており、津波に対する十分な対策が必要である。数年前にハザードマップも改訂され、避難場所の変更もあり、地域と協力した避難体制が必要である。今後も連携を強化し、地域とともに問題を共有し、加茂地域が発展できるように協力していきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

地域の方や専門家による講習会・講演会の開催により、防災・減災教育の必要性を職員・地域住民に理解してもらった。また、1年生の段階で、地域の特性や地震・津波に対する対応策を理解してもらうために、防災・減災教育を実施する。今回、防災・減災教育に関する図書を購入し、教材として活用できる体制をつくった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

市の防災課職員による、ハザードマップを使用した防災計画の説明は、9月に実施予定であったが、すぐには引き受けしてもらえず、12月の実施となってしまった。地区住民も詳細説明を聞いたことがなく、防災・減災教育の遅れを感じた。

来年度は、1年生の前期に地域学習と津波防災・減災教育を実施し、地域理解とともに災害を乗り越え、生き抜く力を育み、持続可能な社会に貢献できる生徒を育成していきたい。

学校名	福島県いわき市立田人中学校
担当教員名	竹元 俊文

活動のテーマ	地域で起こりうる災害を知り、災害への備え、有事の際の命を守る行動について学ぶ。
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1～3学年 19人）（複数可）
活動に携わった教員数	12 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	35 人 【保護者・地域住民・その他】（地域公民館職員・消防隊員・自衛隊員） ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年 4月 1日 ～ 西暦2022年 3月 23日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（森林火災）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ・総合的な学習の時間（学校） 中学1年生
地域での災害について過去の歴史を知り、また、地域で起こりうる災害について学び、防災・減災について具体的な行動を考え、学んだことを全校で発表し合う。
- ・たびとふれあいキャンプ（田人公民館主催） 中学1年生～3年生（小学1年生～6年生）
地域の協力者や保護者、消防隊員、自衛隊員の協力を得て、小学生と中学生が合同で、有事の際の行動、食事、備えるものなどについて学ぶ。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①総合的な学習の時間

- 1 断層見学（2時間）
 - ・地域住民の案内により、10年前の震災でできた井戸沢断層を視察し、当時の様子や地震の仕組みや被害などについて学習。
- 2 災害についての学習（2時間）
 - ・地域の消防隊員（田人分遣所）を講師に招いて、災害の種類、地域で起こりうる災害やそれに伴ってどのようなことが起きるかなど学習。公助、共助、自助について学習。
- 3 災害への備えや災害時の行動についての学習（2時間）
 - ・「シャッフル」や「クロスロード」という防災に関するカードゲーム等を用い、災害への備え、災害時の行動について学習、意見交換。
- 4 身近な災害への対処についての学習（6時間）
 - ・防災士による講演、自助活動体験（火おこし、空き缶炊飯、新聞紙スリッパづくり体験など）。
- 5 発表への準備（4時間）
 - ・学んだことをどのようにして周囲に伝えるか検討。
 - ・地域防災、減災、備災についてどんなことができるか考え、地域配付用のパンフレットを作成。
- 6 発表会（2時間）
 - ・学んだことを保護者や地域住民、市の職員の前で発表。
- 7 振り返り（1時間）
 - ・防災、減災に向けての、より大きな取り組みについて知り、考える。

②たびとふれあいキャンプ

- 1 午 前 消防隊員によるプログラム（心臓マッサージ、ロープワーク、煙体験、水消火器的あてゲーム）
- 2 昼食時 非常食について学習、試食
- 3 午 後 自衛隊によるプログラム（講義、止血法、ライフハック体験、装備品の見学）

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・ 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

①避難訓練の工夫

学校の外でも役に立つ避難訓練の観点から、避難の後に地区ごとに避難場所を子供たちで確認する時間を設けた。災害時に、誰がどこに集まるか確認できた。

②体験学習の変更

まずは身の回りからの視点で、自助活動の体験を追加。

- ・ 昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①児童生徒や職員の防災に関する意識が向上し、必要性を踏まえた訓練や学習が行われるようになった。

②防災に関しての教材の購入、校外での学習費や地域へ発信するパンフレットの製作費への活用など、学習の幅が広がった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・ 地域の現状（地理的な知識やどんな災害が起こるか）を知ること、実際に災害が起こった時に何が必要か知ることの大切さを学ぶことができた。
- ・ 災害はいつでも起こりうるという視点から、学校での避難訓練や防災教育が、学校外でも役に立つものにしなければいけないということを再認識できた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・ 自助にとって役立つ技能や知識を得て、助けられる側から、自分で身を守るという気持ちが高まった。
- ・ 自分だけが助かるだけでなく、近隣や地域で支え合うためにできることも考えることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・ 災害は、いつ、どこでも起こりうるという視点を持ち、有事の際に、大人としてどう行動できるか、また、自助、共助ができる子供たちをどう育てていくか、創意工夫をし、教育活動を進めなければならないということを再認識できた。
- ・ 今回の学習を通して、いざという時に備えて、地域の関係者が常に連携しておくことが大切だということを知ることができたので、今後は備災の視点も意識して活動を発展させていきたい。
- ・ 場合によっては、市町村単位のもっと大きな機関と連携し、持続的な減災（防災）教育、減災（防災）活動を考えていかなければならないということを考えさせられた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・ 学校運営協議委員や地域の語り部、支所職員、地域おこし協力隊、消防隊員や自衛隊員など多くの方々と連携した。
- ・ 東日本大震災の余震で起きた地域の災害を教材として活用した。
- ・ 学習を身近なものにするために、講義だけではなく体験やゲームなど様々なプログラムを用意した。
- ・ 自分たちの学習にとどまらず、学んだことを地域へ発信するパンフレット作りを行い、地域へ配付した。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・ 予測した以上に、生徒たちは真剣に、そしてたくさんのご意見を吸収し、学習を進めることができた。作成したパンフレット作りでも、タブレットを用いて、自分でイラストを描いたり、伝える相手を想像しながら、見やすく分かりやすく、情報を精選するなど、工夫してまとめることができた。
- ・ 地域の方に取り組みを紹介する中で、身近なところにも防災士の方がいたり、体験施設があったりと新たな発見につながった。
- ・ 減災（防災）を学んだ生徒たちが、高齢者が多い家庭や地域にどう貢献していけるか、貢献できる生徒をどう育てるか、学校の教育活動や地域の連携をより深く、より広く考えていく必要がある。
- ・ 災害は、いつ、どこでも起こりうるという視点から、避難訓練の持ち方の工夫や学校外でも役に立つ減災（防災）教育の多様性と継続的な展開を考えていきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

- ・ 今回このような学習の機会をいただきありがとうございました。指導者のみならず、学んだ内容を生徒に還元でき、教育活動を改善することで、より効果的な学習を進めることができました。また、小規模校であるため予算の関係で生徒の活動が制限されてしまうことが多いのですが、助成していただいたことで、専門家の方にご講演いただいたり、体験施設へ訪問できたりと、学習活動に幅を持たせることができ、深い学びにつながりました。重ね重ねありがとうございました。

学校名	新座市立石神小学校
担当教員名	大関 岳広

活動のテーマ	石神小 防災士になろう ～こんなとき、自分なら何ができる～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="checkbox"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 5 学年 95 人）（複数可）
活動に携わった教員数	5 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	0 人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021年 6月 1日 ～ 西暦 2022年 2月 下旬
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ・本校が避難所となったとき、石神小学校の児童として避難所で自分達のできることは何かを調べ、実践する。
- ・地域と連携を図るため、自分たちが学習したことや、実際に体験してわかったこと、感じたこと、自分たちのできることで地域の方にお願したいことを、地域の方々に伝える。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

1 学期・・・ジュニア救命士講習（心肺蘇生・AED の使用についての講習）

2・3 学期・・・「石神小 防災士になろう ～こんなとき、自分なら何ができる～」

○導入

- ・自分たちの住んでいる地域に起こりうる災害の種類や、その際の被害についての説明
- ・石神小学校が避難所となり、地域の方が避難してくると学校はどうなるか。
- ・石神小のことを知っている自分たちはどんなことができるか。

○展開

- ・自分たちのできること、力になれることは何かを考え、課題を決める。
（高齢者・障がいのある方・小さい子・ペット・避難所運営・避難所設営・自作の避難グッズ）
- ・自分の課題について、「できそうなこと」を調べ、必要なもの、あるとよいもの、代用できるものなどを考え、実践する。
- ・実際に作ったり、使ったりして、よいところや困ったところ、改善点を考える。
- ・避難所になった時を想定して、段ボールパーテーションを作り、避難所で起こりうる問題について考える。
- ・課題について自分で感じたことや考えたことなどをまとめる。

○終末

- ・自分たちの調べたことや作成したもの、実践したことをまとめ、発表をする。
- ・地域の方（町会長や学校運営委員など）を招き、「避難所で、自分たちのできること」を発表し、地域の方と「学校・児童・地域で、それぞれどのようなことをしていけばよいか」「学校にはどんなことをしてもらいたいのか」といった助言をいただく。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・研修会での、小学校の取組や気仙沼市が作成した防災学習シートを活用し、導入の際に災害や避難所の実態を子供達に具体的に話すことができた。
- ・減災教育というと、避難訓練だったが、今年度の研修を受け、段ボールパーテーションや AED 練習キットを使った講習を行った。学校が避難所になるということについて、教職員はあまり当事者意識を持っていなかったが、今回の研修を通して、自分たちも避難所運営の一員として、高齢者・障がいのある方、小さい子に何ができるか、また避難所運営や設

営について、校内の案内やパーティションの組立、炊き出しの配膳なら、自分たちでできるであろう等の考えがもてるようになった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・総合的な学習の時間の年間指導計画を見直し、子供に課題をもたせ、その課題について自分たちができること、やってみたいことは何かを調べ、「避難してきた様々な人への対応や、学校にあるもので自作できるもの、学校の施設や備品等、どこに何があるかを伝える」等、自分が避難所で生活する際にできることを主体的に学習できるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- ・子供たちは、「防災＝避難訓練」といったイメージで、学習前は、「自分はどう避難するか。自分の命をどう守るか」といった考えが多かった。しかし、学習を進めていく中で、「石神小の児童としてできることは何か」「自分たちにしかできないことは何か」と考えるようになった。具体的に、学校のどこに何があるかを伝える地図を作ったり、高齢者と一緒にできる運動をしたり、簡単に手に入るもので小さい子をあやすためのおもちゃを作って一緒に遊んだりすることなら、自分たちもできそうだといった話し合いが深まり、「こうしてもらえたら助かる」といった相手の立場になってやるべきことを考え、実践することができるようになった。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

- ・児童だけでなく、教職員の防災・減災に対する意識に少しずつ変化が見られ、児童の安全を守るだけでなく、学校が避難所になった際に、「市や町内会に任せる」のではなく、本校職員として、何をすべきか、何ができるか、といった当事者意識をもつ職員が徐々に増え、減災教育への関心が高まった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・石神小の体育館が避難所となったときに、「自分たちでできることは何か」という考えを常にもたせた。実際に段ボールパーティションを組み立て、その組み立て方を友達に教えることで、災害避難時のサブリーダーとして、自分だけでなく、ほかの児童に指示を出すことができることを意識させた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・教職員の防災・減災の意識を高めることや、今年度の学習を下級生に広げることを行いたい。また、地域との連携を深めていきたい。
- ・実際に児童と減災教育について考えた教員とそうでない教員で減災に対する意識に差がある。そこで、今年度の児童の学習内容を校内に広めたり、防災学習シートを活用し、各学年の発達段階に応じた減災教育を行っていきたい。

学校名	埼玉県立日高特別支援学校
担当教員名	齋藤朝子

活動のテーマ	離れていても学べる・繋がる ～コロナ禍における肢体不自由校の防災教育への挑戦～
主な教科領域等	教科領域（特別活動・総合的な学習（探究）の時間・自立活動）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（全校児童生徒 135人）（複数可）
活動に携わった教員数	全職員113人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	75人 【保護者・地域住民・その他】（防災士・マッシュ&ルーム・社協・他校の特別支援学校関係者他） ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年 4月 1日 ～ 西暦2022年 3月31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（新型コロナウイルス感染症）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

・基礎疾患を有する本校の児童生徒の実態から、コロナ禍の影響を大きく受けている。これまでのような外部支援者と直接関わるような防災学習や体験学習を中心にした一斉指導が難しくなった。感染対策を考慮しながら障害の重い児童生徒向けにオンラインを活用した防災学習に取り組み、新たなプログラムを作成する。

・防災に関心を持ってもらうため、地域や他の特別支援学校、防災の専門家、行政と繋がって行う「防災体験プログラム」はコロナ禍のため今年度もオンラインで実施する。分身ロボット OriHime を使って外出が困難なコロナ禍でも防災について学ぶ機会を積極的に作っていく。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

4月～：防災学習の動画を作成し、各自の iPad を使って視聴、防災学習を実施

6月：防災委員会で高分子ポリマーを使った「センサーバック」作成

7月：分身ロボット OriHime を使って埼玉県防災学習センターでの防災体験
OriHime を使って他校職員や保護者・児童生徒が本校の防災関係見学
：第8回防災体験プログラムをオンラインで実施

8月：日高市社会福祉協議会主催のボランティア体験プログラムでセンサーバックづくりのワークショップ開催

9月：マッシュ&ルームとの共同制作で iPad を使った「かわせみ防災クエスト」制作開始

10月：防災委員会による「かわせみ防災クエスト」画像撮影・ポスター制作・告知等準備期間

11月：「かわせみ防災クエスト」公開
防災委員会 災害用トイレ制作
（中・高）かわせみ防災タイム対面授業実施
小学部教職員を対象に地震体験マット（YURETA）の体験

12月：災害用トイレ校内設置

1月：防災委員会 年間活動報告動画撮影（学校評議委員会や全校集会で上映）

2月：防災委員会 デコヘル（デコレーションヘルメット）作製

※毎月11日は「(命を守る)ゾウの日」として防災委員会の啓発活動を行なっている。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

N 助という言葉がとても印象に残った。偶然その頃に ICT を使った活動をする団体と防災の新しい取り組みを始めることになり、9月の研修で学校以外の場所とつながる必要性、という学びを得たことが影響していると思われる。これまで外部団体から特別支援教育への理解がされず残念な経験をしてきたため、本校の実態がわかるのは自分達だ、と教職員を中心に組みこんできた。今回は児童生徒の実態や学習のねらい・配慮すべきことを整理し、得意な団体に依頼する、という形をとることができた。助成金はその団体への依頼費として使用した。

11月には以前教職員研修を依頼したNPO法人減災教育普及協会から地震の体験マット「YURETA」のモニター依頼があり、本校の教職員防災研修や防災学習で使用した。外部団体の教材を活用できた事例である。

他にも助成金を活用しオンラインイベントの講師依頼や分身ロボット OriHime をレンタルすることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・重度重複障害の児童生徒向けの防災学習プログラムを作る、という課題があったが「かわせみ防災クエスト」によって障害の重い児童生徒も教職員と一緒に防災学習ができるようになった。これまでは防災担当がテーマを決めて一斉指導していたが、一斉故にそれぞれのペースで学習出来ないという課題があった。しかしクエストの10個のミッションは児童生徒に学んでほしいことを課題別に組み立ててあり、どこから始めても大丈夫で、それぞれのペースで学習することができる。何より一斉指導で受け身になりやすかった教職員も楽しいゲーム風の画面に引き込まれ、率先してクエストに挑戦しようと誘うようになった。

・以前防災委員会の活動で災害用トイレについて取り組んだことがあったが、その必要性について説明が十分に出来ず、深い学びにつながらなかったという反省がある。今年度はその仕組みについて実体験をもとに学んでもらうために高分子ポリマーが水分を吸収する仕組みを使ってセンサーバックという感触を楽しむおもちゃ作りをした。白い粉に水を含ませるとみるみる膨らむ様子に興味深く見る児童生徒がいる中、出来上がったおもちゃを頬に当て「これは冷たいから保冷剤の代わりになるね」と発言した生徒がいた。教員が説明する前に気づけたのは体験をしたからである。一方的な指導ではすぐに忘れてしまうかもしれないが、実体験を伴うことで記憶に残る、新しい発見ができたのだと思う。このプログラムは社会福祉協議会のボランティアプログラムでも同様に言い、地元の中学生在が体験した。日高市はこの半月前に雷雨による大規模停電を体験したということもあり、防災講座も行なった。停電時に困ったことを挙げてもらい、停電になるとマンションなどでは断水になる可能性もあることからトイレの備えの話や保冷剤の話につなげた。中学生の感想には「学校では防災について教えてもらったことがなかったのでとても勉強になった」等が挙げられていた。本校の取り組みが地域での防災学習に有効であることが分かったのでコロナが落ち着いたら本校の防災イベントや地域の福祉まつりなどでも実践していきたいと思う。

・今年度の防災委員会の活動で校内のトイレ環境を整備することにした。高分子ポリマーを使って仕組みを学んだ後は災害時用のトイレ(高分子ポリマーの粉、ビニール袋(トイレにかぶせるもの・処分用の2種類)、を作成した。それらを数個ずつ箱に入れるのだが、箱の表に委員会の児童生徒の描いた作品を入れて絵を飾る額縁のようにした。校内の全てのトイレに設置し、トイレを明るく楽しい雰囲気にするとともに、いつもの生活の中にもしもの備えを併せ持つようにした。委員会の活動が多岐に渡り、災害用トイレを多く作成することが難しかったので配布する量が減ってしまったが、毎年の活動に繋げていけると考えている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

・教職員と共にさまざまな防災のミッションに挑戦することで楽しみながら学ぶことができた。「クエストしよう」という声掛けで、休み時間や学年活動を利用して、友達と一緒に取り組むことができた。これまでは一斉指導の中で受け身になることもあったが、一人ずつ自分のiPadを使うことで主体的に関わるようになることができた。クリアするとレベルが上がるので励みになった児童生徒もいた。何より余暇の過ごし方の一つに「クエストしたい」と選択し、一緒に行く友達や途中でミッションをしている友達や教員に質問したり、話しかけたりすることでコミュニケーション能力が向上することができた。

校内を探検し、「〇〇に行く」という目標に向かうことで車椅子の操作性の向上やプローンボード(立位台)を使って様々な姿勢をとるという自立活動の課題に取り組んだりすることができた。また、各自の好きなペースで防災学習を行うことができた。友達がいくつクリアしたか、旅を終えることができたか、などの取り組み状況がクエストのホーム画面から見るので「もっとやりたい」という意欲に繋がり、継続して取り組むことができた。早々にクリアした児童生徒もいたため、制作者と相談し、1回で終了するという設定から「もう1回トライ!クエスト」として学習の定着のため2回目の挑戦ができた。気に入った画面をもう一度見るために挑戦したり、間違えた問題に再び挑戦したりするなどそれぞれが学びを深めることができた。クエスト修了者には修了証を防災委員会から手渡す予定だったが、コロナウイルスによる学級閉鎖のため教員が後日渡す形になった。コロナ禍のため仕方ないことではあったが、自分の取り組んだことについて達成感を味わうことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

・これまで本校で積み重ねてきた学習内容だが、教職員の異動によってうまく引き継がれていないことが課題になっていた。
・特別支援教育を必要とする児童生徒にとって、自ら課題を見つけ、取り組んでいくことは難しい。特に重度重複障害のある場合は教員と一緒に繰り返し学んでいくことで少しずつ身につけていくことを目標としている。これまでの本校の防災学習は学部ごと(小学部は低学年・高学年)に集まり、友達や教員と一緒に災害から命を守る方法について何年もかけて取り組んでいた。コロナ禍及び今年度の防災学習によって、指導グループでも実施できるきっかけとなった。どんな障害があっても学んでほしい項目を整理し、今回のかわせみ防災クエストのミッションとして取り入れた。

- ・避難訓練のアンケートに「かわせみ防災クエストで学んだことが活かされた」が挙げられており、楽しく学んだことを覚えていて行動を取ることができたことを担任が評価している。
- ・本校の教職員が作成した動画も指導には有効だという意見が多かったが、一部では児童生徒の実態に合わないという意見もあった。クエストのアンケートは実施中のためまだ取れていないが「こんなに楽しいものをどうやって作ったのか」「児童生徒と早く一緒にやりたい」「これはすごい」「児童生徒が楽しんでやっている」など高評価である。
- ・保護者からも「連絡帳で楽しそうな様子が書かれている」「ホームページに様子が掲載されているのでわかりやすい」などの意見も聞くことができた。
- ・外部からは特別支援学校で ICT を活用した防災学習が高く評価され、兵庫県・毎日新聞主催の「1.17 防災未来賞ぼうさい甲子園」の特別支援学校・団体の部の大賞を受賞することができた。他にも日本教育新聞社や学研の特別支援関係の教育雑誌などで特集を組んでもらって掲載されている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・GIGA スクール構想で各自 1 台ずつ iPad が配布されたので、コロナ禍の中、活用できたらと思っていた。最初に取り組んだ防災動画についてもそれぞれの見やすい方法で視聴でき、テレビに接続すれば授業の中でも使用できると考えていた。これまで一斉指導で行っていた内容をパワーポイントの動画にし、誰が見てもわかりやすいようにした。また、本校の防災倉庫の様子や晒を使った安全な移動方法など繰り返してみられるようにしたことで職員研修としても活用しやすくなった。
- ・かわせみ防災クエストは RPG 風になっていてゲームに親しんでいる教員たちや児童生徒にも興味を持つ様になっている。防災学習において主体的に関わっていけるような工夫が必要だと思っていたので、この形式で「早くやりたい」という気持ちを引き出したことが大きい。ミッションの内容も短時間でできるのでそれぞれの負担感は少なく、自分で解決できる場合はそれが可能な内容、難しい場合は教員にヒントを聞きながら、または一緒に取り組めば解決できる様になっている。実態差が大きいのでそれも考慮し、ミッションの難易度も変えているため飽きずに挑戦できる。間違えてしまっても「宿屋」へ行けばクリアするまで何度も挑戦できるので、達成感も大きくなる。
- ・クエストを製作したマッシュ&ルームとはオンラインの打ち合わせを行い、途中経過をこまめに報告することでイメージの共有を図ることができた。また、防災委員会の児童生徒が自分の iPad を使ってミッションの素材を撮影したので、それがみたくてクエストに挑戦する、ということもあった。
- ・かわせみ防災クエストの予告ややり方の説明についてのショートムービーを作成し、校内のポスターやチラシに QR コードを貼り付けた。コードの読み込む練習も兼ねたのだが、これによってクエストへの期待感が上がった。また、障害の状況によってはすぐに取り組めないケースもあるためインスタ風のフォトフレームを作成し、イベントに参加している雰囲気から参加してほしいと考えた。今年度も学校行事が全て中止になっているので、校内での様子の写真撮影スポットとして活用してもらうことができた。そうすると次は実際にミッションに取り組む様子も撮影しておきたい、という心理が働き、参加してもらえるケースが増えている。他にも感染症対策で家庭学習を余儀なくされているケースも多いので校内のミッションを一冊にまとめ、学習課題も添付したものを配布している。1 月からは特に身体の小さい小学部の児童を中心にミッションへの参加が難しいケースにも配布し、参加を促していきたい。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・自ら「やってみたい」「次はなんだろう」と思ってもらうことが主体的に防災学習に関わる際には重要であり、特別支援教育の中でも実施可能だということがわかった。本校の防災学習は実際に体験できるような内容を工夫してきたが、クエストでも頭を守るヘルメットを探して被る、日高市で地震が起こる想定時間をタイマーなしに数える、など体験しながら実感できるものを各自で実施することができた。これまでの防災学習で蓄積してきた内容をクエストという形で提示し、異動により半分以上入れ替わった教員にも本校の防災を示すことができた。
- ・今回のクエストはこれまで本校で大切にしてきた『災害セルフケアパッケージ 肢体不自由児用（共立女子大）』にある、学んでほしい 9 つの項目に、本校で取り組んできたことを振り分けてミッションにしてきた。学習項目の整理はできたが、他の特別支援学校でも使用できるよう、他校と一緒にミッションを作る、そのやりとりをオンラインで行う、などの発展できる可能性がある。この実践に興味を持つ人が多く、問い合わせもあるため、次年度は発展できる形を模索していきたい。また、クエスト制作に協力してくれた「マッシュ&ルーム」という団体とは取り組みを今後デジタル防災絵本などに展開できないか、と相談中である。ICT を使った防災教材の開発に今後広がる可能性がある。
- ・また分身ロボット OriHime で家庭や学校などから離れた場所で防災学習をする、という実践をすることができた。が、次年度以降、OriHime を防災学習センターに設置し、本校の取り組みを展示しておいて興味を持った人が質問したり感想を伝える、OriHime を操作している本校の児童生徒がその対応をしたり、取り組みの説明をする、という形もできるのではないかと考えている。また、OriHime や zoom を活用することで自宅や学校から地域の防災訓練や支援学習（自宅のある地域の小・中学校）の防災学習に参加し、それぞれの立場で気付いたことを話し合う機会も作ることもできるのではないかと。

7) その他 (※特にあれば記述)

新聞掲載資料



日本教育新聞社 12月5日掲載



毎日新聞 12月10日掲載



毎日新聞2月16日掲載

学校名	東京都板橋区立板橋第三中学校
担当教員名	輪湖 みちよ

活動のテーマ	with コロナで取り組む 板橋の減災に被災地の体験をどう生かすか？
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ・ 国語 ・ 社会 ・ 理科 ）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 第一学年 144人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	8 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	約50 人 【保護者・地域住民・その他（NPO 法人、大学生等）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 5 月 日 ～ 西暦 2022 年 1 月 14 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

被災地から得た教訓を基に、首都直下型地震や集中豪雨などの災害に対する減災・防災対策を考える。考えたことを学校内外、特に地域住民へ伝えることで自分の命を守り、他者の命を助ける行動ができるようになる。それにより、地域との関係が希薄になりがちな都市部において自助・共助を機能させ「誰も取り残さない」減災対策を目指す。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

5～7月命の大切さ・多様性		9～12月災害の脅威と減災の知識・技能、地域との関わり			
5.31	【理解】 絵本@meet	9.6	【知識】 水害・地震	11.20	【体験】 地域防災訓練
6.5	【体験】 国@体育館	9.13	【体験】 妊婦・高齢者	11.22	【対話】 共助・協働
6.15	【理解】 絵本@教室	9.27	【講話】 永田氏	11.25	【講話】 荻生氏
6.19	【体験】 点字@meet	10.4	【対話】 自助・共助	11.29	【対話】 テーマ
6.21	【体験】 命@体育館	10.11	【体験】 防災キャラバン	12.2	【表現】 13歳の主張
6.28	【興味】 新聞@form	→forms テーマ入力・グループ分け		12.6	スピーチ原稿作成
7.5	【体験】 視覚@体	11.1	【探究】 グループ 地域防災訓練に向けて (国：情報を伝える) リーフレット作成等	12.9	学級内発表→代表者
7.12	【体験】 盲導犬@体	11.4		12.13	(国：構成)
7.19	【理解】 新聞@教室	11.8		12.16	【表現】 学年発表
		11.11		12.20	振り返り

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①地域や関係機関との連携・協働を強化し、減災対策を考える際に地域住民の方にインタビューを行うことや減災対策を地域住民の方に伝える活動を取り入れたこと。

②災害弱者（障害者・高齢者・幼児・妊婦等）への配慮を教化するため、肢体不自由、視覚障がい、聴覚障がいのある方や高齢者、妊婦や乳幼児がいる保護者にインタビューを行うことや減災対策を伝える活動を取り入れたこと。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

これまで、地域の方主導で行われていた年一回の地域防災訓練において、生徒が発案した活動を取り入れたり、生徒が調べ、考えた減災対策を伝える活動を組み込んだこと。また、計画的・継続的な減災学習を行うことで、体験から考え、調べ、学びを深めることができたこと。特に、阪神淡路大震災を体験した方や東日本大震災の復興支援に携わった方々の話を聞いたあとに、気付いたり考えたりしたことを話し合いながら、身近な地域の減災対策に活かすにはどうしたらよいかを考えるなど、被災地の体験を教育活動に活かすことができたこと。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

今回の減災学習では、本校の教育活動に基づき以下のような能力・態度を育むことを目指した。

「学ぶ」知識・技能

a 命の大切さ b 多様性 c 災害の脅威 d 減災の知識・技能

「鍛える」思考力・判断力・表現力

a 自分が伝えたいと考える対象に向けて必要な情報を収集、選択し減災対策を伝える。

b 地域の方々との対話を通して社会との関わりを考える

「思いやる」学びに向かう人間性

災害時に「社会的弱者」とみなされる人々が安心安全に避難したり、避難所で生活したりするために行動する態度を身につける。

事後に行った自己評価により、すべての能力・態度において8割以上の生徒が肯定的な回答をした。自身の変容としては「障がいのある方や高齢者など、地域に住んでいる方のことを考えるようになった」「減災対策の大切さに気付き、自然と家の中の備えを見直すようになった」等の記述がみられた。また、活動全体を通してグループ活動時に積極的に働きかけたり、減災対策を伝える際に伝わる工夫を行ったりと主体的に考え、行動する姿がみられた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教育活動を振り返り、教師間で「なぜ減災学習を行うのか」と減災学習の意義を考えるようになった。その中で、都市部における地域との関わりや大切さや生徒が地域等、学校外の方々と関わって学ぶことの大切さに気付いたという声があがった。生徒のインタビューに応じていただき、まとめた減災対策を聞いてくださった地域の方々からは、中学生が減災について考えること自体がありがたいとの声が多かった。特に、妊婦や乳幼児がいる保護者の方からは避難所での生活が不安だったが、中学生が遊び相手になってくれると聞き安心した。さらに、インタビューをきっかけに家の減災対策を見直したとの声があがった。関係機関の方々からは、弱者に目を向けることやこれまでの被災地の学びを活かし、身近な地域の減災に目を向けることに素直な中学生の姿に学んだとの声をいただいた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒が「自分ごと」として減災学習に取り組めるように学習活動の流れや内容、方法を工夫した。特に、主に3校の小学校から進学してきた中学一年生という年代から「命の大切さ」や「人の多様性」について体験的に学ぶ機会に時間をかけた。その学びを減災学習につなげたことで、減災学習を行う意義を感じた生徒が多かった。それもあってか、減災対策を伝える相手として、身近な年代よりも高齢者や乳幼児に目を向ける生徒、障がいのある方に目をむける生徒の数が多かった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

総合的な学習の時間を中心として、各教科の学習内容を教科横断的に学ぶカリキュラムマネジメントの重要性、地域住民を中心とした外部関係者の方々と学習活動の目的を共有し、協働して活動することの重要性を教訓として得た

実施時期の変更や内容の精選を行うことで、より教科の学習内容を活かした探究活動が行えるように工夫していく。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

（写真・資料の元データは、1月末に提出した実践共有資料でご提供いただいたデータと同じであれば再提出の必要はありません。）

「いのち」

「ふくし（視覚障害・アイマスク体験、点字学習）」



「ふくし（高齢者・高齢者体験）」



「げんさい（地震のメカニズム）」 探究・テーマ設定



探究・対象者インタビュー（外国の方・視覚障がい・聴覚障がい）



板橋区図書館・区役所での展示発表



学校名	東京都町田市立武蔵岡中学校
担当教員名	返田 富美

活動のテーマ	武蔵岡 地域防災レンジャー計画 ～理科の授業で得た正しい知識を味方につけて、地域を守る生徒の育成のために～
主な教科領域等	教科領域（ 理科 ）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 中学校 全学年 74 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	2人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	74 + 210人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 9月 1日 ～ 西暦 2021 年 3 月 25日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

武蔵岡中学校は、東京都の西側にあり境川を挟んで相模原市と隣接する、自然豊かな山並みに囲まれた地域に位置する学校である。学校の裏山は、土砂災害危険区域に指定されている地域にあり、台風や大雨の際に地域の避難所となる体育館裏が最も危険な場所である。また近くの境川では、台風などにより河川の氾濫が起き過去に被害があった地域でもある。身近に災害の危険が多い地域であるとともに、全校で74名と小規模校であり地域住民も高齢化で人口も増えない地域であることから、地域として防災に力を入れることが難しい。そのため生徒一人一人が地域の担い手としての自覚をもち、地域の大人と一緒に頑張って生徒が防災・減災を理科の時間を通して主体的に学び、持続的に取り組むことで「あたりまえの活動」として定着し、生徒一人一人が地域の担い手となるような意識をもたせることをねらいとする。

また、武蔵岡中学校は大戸小学校と同じ校舎で活動する小中一貫校としての特色もある。小学1年生から中学3年生まで各学年1クラスで過ごす生徒達にとっては、9年間同じ仲間と生活を共にしていく、いわば家族のような関係となっている。相手に自分の意思や意見をはっきり伝えることや、小さい子たちを守る気持ちなど、他人に優しく接することは、地域を支えていくために必要な「生きる力」として大切になっている。そのため、地域にとって必要な防災・減災を取り上げることで、その力を育成につなげたい。この計画には、正しい知識が必要と考え、理科の授業で行う「災害はどうして起こるのか」という原理を学び、知識を身に付けた後で「自分にできることは何だろう」と生徒に投げかけ、自らの自発的な活動につなげる目的がある。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

※新型コロナウイルスの影響により接触を避けるため、当初の計画していた各学年を混ぜたレンジャー編成を変更し、各学年単位の活動に変えることとした。実践内容は以下に示す。

①理科の授業で、教科書にある災害について学習する。【全学年】

②学習した災害が、自分の住む地域で起こらないか検証する。（市のハザードマップ等）【全学年】

③（他教科間の連携） 美術とコラボ：減災・防災を呼びかけるデザインの取り組み 【全学年】

※中学全生徒の作品を、作品展（2月5日）で小・中の児童 生徒に投票してもらい、キホダールかシールにして配布する。（予算：ユネスコ協会 助成金活用）

④（小中校種間連携） 小学3年生「防災マップ作り」とコラボ：9年生から3年生が作った防災マップにアドバイスをする【9年】 12月3日3時間目（他に3時間）実施

⑤（企業連携） プラスチック協会とのコラボ：防災に役立つプラスチックのお話 【7・8年】
10月25日5・6時間目に実施

- ⑥ (企業連携) 関東電気保安協会とのコラボ：災害時に役立つ電気のお話 【8・9年】
1月13日3時間目～6時間目に実施
- ⑦ (地域連携) ドローンチームとのコラボ：ドローンで地域調査 災害時に役立つドローンの体験 【7年】
1月17日2時間目 体育館裏の状況を上空から空撮をみて、現状を知る 操作体験
- ⑧ (地域連携) 災害時の食事体験：コロナ禍で炊き出しができないため、消防団等の話をして、町田市役所から協賛していただいた非常食(梅がゆ・乾パン)を小学校・中学校全員に配り、ご家庭で
3月11日を意識しながら非常食を体験していただく活動 3月8日(火)実施予定【全学年】
- ⑨ (地域連携) 地域の消防団・市役所 環境課とのコラボ：災害時に地域の避難所となることから、
地域の消防団に興味をもってもらうため、普段の活動の紹介と放水体験 市役所環境課の方にマンホールトイレの設置をして頂き、見学する体験 【全学年】
3月14日3～4時間目 実施予定
- ⑩ (企業間連携) 公益財団法人 ニッセイ緑の財団「学校の木のしおり・樹木名プレート」：学級委員会を中心に、ボランティアを募りながら行っていく。11月30日12月2日(雨の予備日 3日)に木の調査⇒8種類の木の冊子作りを行い、校内の環境を知る活動 【全学年】

※この他に、減災プログラム参加校とのウェブでの交流などを行いたいと考えている。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

今回は理科の授業内で行っていく企画を考えていたため、自分のできる範囲で展開していこうと考えていたが、9月の研修会に参加し多くの方が、同じ思いで活動する輪を広げていく大変さを語っていた。なかなか初めから大きな活動につながるのには大変なので、自分ができる理科の授業でのみ活動を行ったが、できれば学校として多くの先生に活動に関わっていただき、多くのアイデアを頂いていくことが、より充実した活動になっていくと感じた。そのためボランティアコーディネーターや他教科や他校種の教員と話し合いを行い、できる範囲で広げてみた。また、助成金の活用で防災・減災を広く呼びかけることができそうである。(キーホルダーやシール)

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今年度はまず「防災・減災を意識させる活動」として、理科の授業の中で活動していくことを決めた。生徒たちの体験した様子から、自分の地域でも知らないことが多くあることを、生徒自身が感じてくれた。また、多くの連携をとったことで、教科としては毎年の取り組みよりも、さらに多くの体験を含んだ展開を考え、実践できた。ただ、やっていけばいくほど、1教科の中では時間が足らず、十分な活動とはならなかった気がする。

今回の経験を基に「防災・減災を意識させる活動」として今後も継続的にやりたい。また、理科という教科からの発信で、今後学校としての防災活動につなげていけたらよいと思う。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

まずは防災・減災を意識し始めたところなので、今後自分たちの活動として、自主的に「こんなことがしたい!」という発想ができて、行動に移せたら嬉しい。(将来、消防団に入るとか)

③ 教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

防災・減災をきっかけに教師・保護者・地域の関係者が生徒たちについて、考える良い機会となればよい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

コロナ禍のため、当初考えていた他学年交流や生徒が考えるテーマでの活動が行えず、構想とは違った形となったが、他教科や他校種の連携などの違う展開で生徒の面白い反応が見ることができた。学年ごとのように動きの規模は小さくても、共有できる感覚の近さからなのか、思った以上に反応があったと思う。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

前記にも述べたが、1教科のみでの活動では、できる範囲に限界があることを痛感した。来年度以降も教科では継続しようと考えているが、できれば学校全体としての活動に広げられないかと考えている。もう少しだけでよいので、同じ思いの教員を増やしたい…

7) その他 (※特にあれば記述)

コロナ禍でなければ、参加している学校の皆さんと直接会って、お話しかったです。自分自身にとっても良い機会となりました。有難うございました!

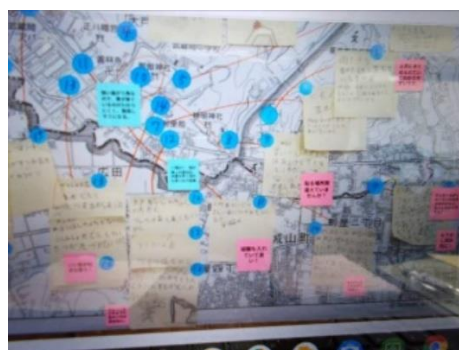
③美術とコラボ：防災・減災を呼びかけるデザイン募集⇒全校で美術・理科の時間にキーホルダーやシールにして全校に配る予定。
2月5日作品展にて、ゆくのき学園の小学生・中学生による投票で決定する。(作品の一部)



(裏)

(表)

④ (小中校種間連携) 小学3年生「防災マップ作り」とコラボ：小学3年生が作った防災マップにアドバイスを
する。グーグルマップやジャムボードを活用した。



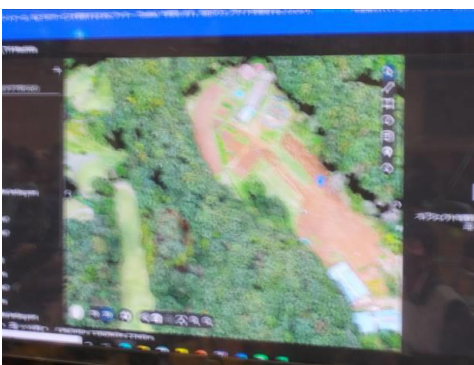
⑤ (企業連携) プラスチック協会とのコラボ：災害時に役立つプラスチックの役割を理科の授業に沿って行った。



⑥ (企業連携) 関東電気保安協会とのコラボ：災害時に役立つ電機の話理科の授業に沿って行った。



⑦ (地域連携) ドローンチームとのコラボ：学校の校庭で活動している地域のドローンチームに災害に役立つドローンのお話と実際にドローン进行操作することや学校を上空から見るとどんな場所にあるかの体験を行った。



⑧災害時の食事（非常食）体験…児童・生徒一人に梅がゆ3食クラッカー3食を配布し、ご家庭での体験を行った。
SDGsの観点から、町田市の備蓄倉庫から廃棄される予定のものを頂いた。



⑨地域の消防団・市役所 環境課とのコラボ…消防団の方に地域を守る「やりがい」や放水訓練の体験を教えて頂いた。
市役所の防災課の方に避難所での中学生に「期待すること」やマンホールトイレの設置と体験を教えて頂いた。



⑩（企業間連携）公益財団法人 ニッセイ緑の財団「学校の木のしおり・樹木名プレート」：校庭にある木の調査を行い、自分の学校がどんなところかを知る活動を行った。



学校名	帝京中学高等学校
担当教員名	鈴木斎彦

活動のテーマ	STOP! 「忘」 災!! ～私学の地域社会における社会的責任～
主な教科領域等	教科領域 (総合的な探究の時間・地理 B)
アプローチ	※該当するものに○をつけてください (複数可) <input type="radio"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	(高校2学年 242人) (複数可)
活動に携わった教員数	10人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	20人 【保護者・地域住民・その他 (大学教員)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦 2021 年 6 月 1 日 ～ 西暦 2022 年 3 月 22 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください (複数可)。 <input checked="" type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他 ()

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

昨年より先行実施されている「総合的な探究の時間」において「震災」をテーマとし、生徒の興味・関心・進路に関連付けて個人・グループ学習を行い、地域社会と協働して、その成果を内外に公表する。また、地域の危険性を「継承する」存在として、比較的人事異動の少ない私立学校教員に注目し、「持続可能な減災教育」の礎を築く。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール (※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい)

- 夏休み 夏期講座「STOP! 忘災」の開講 (放射線教育含む)。生徒自身による、地元のハザードマップ調べ。
- 2学期 生徒を居住地域毎に分類し、グループ学習。「地理B」で「探究方法」「日本の災害」を授業、中間試験にて出題。帝京大学・帝京科学大学教授による対面・Zoom・メールによる指導。避難所となっている区立学校の見学。
- 3学期 「防災・災害ボランティア啓発イベント」にて研究発表@板橋区立中央図書館 図書館ホール
生徒作成スライドのデジタル展示@板橋区役所1階 区民イベントスクエア
鈴木担当の東京農業大学教職課程科目「地誌」の講義内にて、本校生徒が研究発表し、大学生が助言。
個人レポート提出「震災と○○」(○○には、自分の進路の系統を入れる。800字以上)
グループレポート(6,000字)提出 校内プレゼンテーション大会(2/14 1グループ15分以内)
全ての活動を得点化し、3/21にグループごとの表彰式。
「地理B」の学年末考査にて、ハザードマップの読み解き問題を出题。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- 「いたばし総合ボランティアセンター」の協力を得る事が出来たため、生徒の成果を校外へ発信できた。
- 学校の決裁を待たず自由に使用できる助成金を得た事により、機動的に活動する事が出来た。特に、インターネットを利用した調べ学習や、オンラインによる大学教授陣からの講義に必要なWi-fiの整備、大学教授陣への謝礼金は非常に有益であった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

令和3年度の高校2年生は、東日本大震災発災時に小学1年生。辛うじて当時の混乱の記憶が残っているだろう世代であり、彼らに対して「震災」をテーマにした減災教育活動を施す意義は、後世への継承の意味においても重要な意味があった。特に現在の高校生にとって身近な災害は、新型コロナウイルスおよび洪水である。現在も東日本大震災の余震は続いているものの規模が小さいため、生徒は「地震慣れ」しており、「地震が災害をもたらす」という発想そのものが欠落していた。減災教育とは基礎の繰り返しであり、教員の粘り強さの重要性を改めて確認できた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- 「震災」＝「地震＋諸災害」のため、様々な想定・ハザードを生徒が「自分事」として捉えるようになった。
- 大学教授による指導により、経済・観光・心理学など、様々な視点で震災を捉える事が出来た。
- 個人レポートを作成することにより、自分の希望する学問類型（経済学など）の学びを深める事が出来た。
- 地域毎に分類したグループによる協働作業により、各生徒の居住地域の危険性も理解する事が出来た。
- 一般市民が聞いている場所で生徒が発表する事により、言語活動の重要性を理解する事が出来た。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- 良質な発表を生徒が行った事により、防災担当以外の教員にも防災意識を広める事が出来た。
- 板橋区の施設で学習成果を公表した事により、本校が地域社会に対して社会的責任を果たしている事を示した。
- 「地理B」で日本地誌を扱う事は皆無であったが、本事業との連携により、「地理総合」へ繋ぐ事が出来た。
- 教員を志す大学生の前で発表させる事により、次世代の教員にも減災教育の重要性を理解させる事が出来た。また、高校生に指導するためには教員自身が深い学びをしていなければならない事を、理解させる事が出来た。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本事業参加校同士の連携を行った。板橋区立板橋第三中学校（以下「三中」）は本校より徒歩圏内であり、担当教員と連絡を取りあい共同作業が出来ないか模索した。「三中」は区の避難所に指定されている事から、担当教員により本校生徒を案内していただくとともに、「三中」生徒の減災教育活動を行っている様子の見学をさせていただき、高校生に刺激を与える事が出来た。板橋区施設での発表についても、「三中」と共同出展している。2月実施の本校校内研究発表においては、「三中」担当教員にもGoogle Meetでご参加いただいた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

全教員が、地域の土地をお借りし、教育活動をさせていただいているという謙虚な気持ちを持つべきである。私学教員こそ、地域社会へ貢献する事が肝要であり、その1つが減災教育であるという認識を、共有させていきたい。

昨年度もほぼ同じ流れで探究活動を行ったが、グループ分けを昨年度は「進路」別にしたが、今年度は「地域」別にした。生徒に実施したアンケートを元に対比・分析したところ、今年度はグループ内の温度差が大きかった事が判明した。どのようなグルーピングが減災教育に効果的か、今後も検証していきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

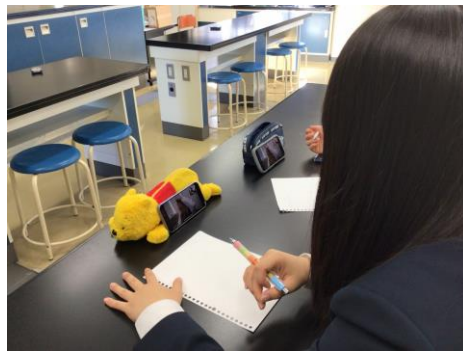
本プログラム終了1週間前の令和4（2022）年3月16日夜に、福島県沖を震源とするM7.4の地震が発生した。それに伴い、交通網の寸断や初めて「電力需給逼迫警報」が出されるなど、「ミニ東日本大震災」とも言える事態が生じた。大人にとっては「久々の経験」であっても、東日本大震災の記憶が薄い高校2年生にとっては「初めての経験」であった。ここで初めて危機感を持った生徒もいたようで、この経験こそが何よりも教育であった。1年間自分なりに精一杯努力してきたつもりであるが、地球の大きさ・人間の小ささを改めて痛感した次第である。

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

（写真・資料の元データは、1月末に提出した実践共有資料でご提供いただいたデータと同じであれば再提出の必要はありません。）

★基本的には過日提出した写真です。しかし実践共有資料の画質が荒かったこと、およびHPに掲載可能な当たり障りのない写真のみ、改めてJPEGで提出致します。





いたばし総合ボランティアセ...
@itabashi2019

本日の災害ボランティア・スイッチin中央図書館（報告）レポート④帝京高等学校による減災防災教育プログラム報告会
生徒の皆さんから直接、来場者の皆さんにスクリーンを使って報告していただきました。説明とつてもわかりやすかった！

午後6:30 - 2022年1月20日 Twitter for iPhone

4件のいいね

学校名	神奈川県立座間高等学校
担当教員名	馬場政尚

活動のテーマ	カラダもココロも、みんなで守る。 ～座間高防災ルネサンス みんなのWell-beingを目指した防災文化の創出～
主な教科領域等	教科領域（特別活動，総合的な探究の時間）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	(1・2・3 学年 826 人) (複数可)
活動に携わった教員数	60 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	10 人 【保護者・地域住民・その他（近隣学校）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 4 月 7 日 ～ 西暦 2022 年 3 月 25 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（火災）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

本校では、「いかに生き残るか」という視点から、生徒の自助力の養成を図っているが、生徒の主体的な取り組みが低調で持続発展性に欠ける、という課題を抱えている。そこで、生徒が主体的に取り組む自走型の防災教育を本校の新たな文化として定着させるべく、実践的防災訓練の企画・運営等の活動を通じて、主体的、創造的、協働的に課題発見・解決に取り組む態度や資質・能力を養う。

また、本校のこれまでの取組では、「生き残った後、どうするか」という視点を欠いていた。災害は高ストレス事象であり、適切な対応を行わなければ、震災後長期にわたり、人の心に被害を与え続ける災害となる。速やかな学校教育再開と、避難住民のより良い生活のためには、こうした心の災害の減災は重要である。心の減災を含む災害後の Well-being についての教育を図ることは、災害時に地域住民を受け入れる本校では欠くことの出来ない重要な課題である。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

昨年度発足した防災委員会を中心として、次の2本立てで実施。

①実践的な防災訓練…生徒による実践的防災訓練の企画・運営

課題の抽出，訓練内容の検討，訓練準備を通じて，主体的，創造的に課題発見・課題解決に取り組む態度や資質・能力を養う。訓練に合わせて，共助に関する地域住民参加型のワークショップを実施し，地域交流を図り，地域と協働して課題の解決を図る態度を培う。

4月：課題抽出のための防災訓練 ⇒ 5～10月：訓練目標・訓練手法の決定 ⇒

10～11月：訓練準備・事前教育 ⇒ 12月：防災訓練 ⇒ 1月：課題抽出 ⇒

2～3月：次年度活動計画、防災行動に関する動画の配信準備（市内小中学校宛）

②こころの防災…地域を含めた心理的応急処置（PFA）研修とその成果の展開

生徒・地域の関心が高い取り組みを通じて，地域防災力の向上に資する。

6～8月：災害時の心の問題についての勉強会 ⇒ 9～12月：心の減災に関する勉強会 ⇒

1月：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター（以下、NCNP）による研修会 ⇒

2月：振り返りと成果のまとめ ⇒ 3月：成果共有

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会を通じて、単に地域“連携”を行うだけでなく、むしろ学校から積極的に地域“貢献”を行うことで地域防災力の強化につながりうるという視点を得た。そのため、積極的な地域貢献を果たすべく、本校防災訓練のために防災員会が作成した地震・火災時の望ましい防災行動についての動画を市内の全小中学校に配布することとしたが、助成金が無ければ実現しなかった事業である。地域連携の観点で、他校の実践例を参考に、より地域の役に立つワークショップを開催できるよう内容の見直しを行った。また、活動成果を地域に還元できるよう、作成した教育用動画を地域の小中学校に配布する。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災委員会が中心となり実践的防災訓練の企画・運営を行ったことで、防災委員のみならず、一般生徒の防災意識が大きく向上したのは成果である。また、中心となった防災委員は、防災委員の生徒活動を通して防災意識の向上だけでなく、自分たちで目標を設定し、目標に則した活動を企画・運営することを経験したことで、達成感や自身の成長を実感したり、課題の発見に繋がった。さらに、訓練後2か月程度して実施した地理Aの防災に関する単元の学習で実施した防災知識や災害時の行動を問うテストにおいて、防災委員の得点は他の生徒に比べて高くなった。一般生徒についても昨年度と比べ、得点が高くなっており、防災教育によって、教科学習に良い影響を及ぼした可能性があることも成果といえる。このように、防災教育の実施により、単に防災に関する能力のみならず、教科学習等に良い影響を及ぼす成果があった。これまで、防災教育における教科連携とは、各教科学習の中で防災を扱うというイメージが強く、「各教科→防災」というベクトルが意識されていたように思われる。しかし、今回の実践の成果に基づくと、むしろ「防災→各教科」というベクトルも成立し得ることが発見できたのは一つの成果といえる。

また、Well-beingの視点から防災を取り扱うことで、福祉や看護に興味のある生徒など多様な生徒が自身の将来的な進路と防災をつなぎ合わせて考える態度が持てたことも成果であった。災害と未来の自分を結び付け、そのうえで、現在の自分の進路や行くべきことを考えるなど、生徒の進路発達にも影響があったと考えている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

主体的、創造的、協働的に課題発見・解決に取り組む態度や資質・能力が向上した。さらに、防災にとどまらず、困難の多いプロジェクトをやり抜くことで、自己効力感の高まりがみられた。生徒の一部には、プログラムへの関りを機に、進路を決定・変更するものもあり、キャリア発達にも影響を及ぼした。

また、防災という現象を、心理を含む多角的な視点からとらえることができた。生徒は来年度も活動を継続する意思を見せており、生徒の主体的防災活動という新たな文化が芽吹きつつある。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

地域・教員からは、「従来、防災といえばもっぱら避難について検討してきたが、避難後について検討する機会となった。」「立場や所属の違いを超えて意見交換することで、自分を振り返る機会となった」「高校生の頑張りに触発され、防災意識が高まった」などの意見が寄せられ、地域連携の強化、防災意識の向上に成果があった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

生徒の主体的な訓練の計画・運営、及びNCNPの協力を得たところの減災活動が特徴である。

防災訓練などのイベントの機会だけでなく、訓練の企画・計画段階から生徒に主体的に活動を行わせることで、年間を通じて継続的に防災教育を行い、防災力を高めるよう工夫した。また、組織的な運営を図るため、防災委員会は5つの部署制とし、組織的な運営を図った。また、活動の成果を学校外に発信することで、生徒が評価される機会を設け、かつ成果を地域社会に還元できるよう心掛けた。

プログラムの結果、本校の実践内容が県議会で取り上げられ、また読売新聞社によって記事にされるなど社会的にも有益な実践であると評価されている。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

研修の機会を活用して教員が成長し、助成金により環境が整い、果敢に挑戦すれば、生徒は着実に成長することが明らかとなった。次年度以降は、本年度芽吹いた新たな防災文化を根付かせるべく、引き続き活動を継続していきたい。特に、地域との連携については、コロナ禍のため、十分に活動が行えなかった部分もある。次年度は、高まった防災意識を具体的な行動に結びつけられるよう、一層地域との連携を深化させていきたい。そのための具体的な方策を、これから生徒と共に検討していく。

学校名	新潟県見附市立葛巻小学校
担当教員名	徳富 大吾

活動のテーマ	川・いのち・つなぐ～守る自然 つなぐまちの未来～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="checkbox"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="checkbox"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 4 学年 66 人）（複数可）
活動に携わった教員数	3 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	およそ 40 人 【保護者・地域住民・その他（外部講師）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021年 4月 1日 ～ 西暦 2022年 3月 18日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="checkbox"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

刈谷田川は近くにある川であり、生活に深くかかわっている自然でありながら、子どもたちにとっては身近な存在とは言えない。そこで、繰り返し刈谷田川とかかわることを通して、そこに棲む生き物や自然、川とかかわってきた人や生活について関心を広げていく。観察・見学・体験活動を重視し、そこから気付くことを学びの出発点「課題」とする。防災・減災の必要性に気づき、課題を自分の生活とかかわらせながら考え、刈谷田川の恵みを学び、さらに川の恐ろしさへと追究していく。防災・減災の観点から自分・家族の身を守るために何ができるかという観点で考えをまとめ、自分の生活の中に積極的に取り入れていこうとする姿を目指す。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

① ふるさとの川と自然の素晴らしさでつなぐ（4月～7月、8月）

- 刈谷田川を楽しみ、川の流れ、岩、周囲の自然観察、刈谷田川ダムの役割を学ぶ。
- 刈谷田川に住む生き物、植物を調べる。
- 魚釣り体験、魚をさばき焼いて食べる体験

② ふるさととの川といのちをつなぐ（9月～11月）

- 2004年の7.13水害（新潟福島豪雨災害）について調べる。
・防災施設の見学・水害体験を聞く ○ 刈谷田川での水難訓練、Eポート体験
- 2004年の新潟県中越地震について調べる。
・長岡震災アーカイブセンターの見学・震災体験を聞く
- 水害、地震等の災害から命を守る防災・減災のための防災スクール「くずまきサバイバル ウイズコロナ～めざせ！未来のBOUSAI マスター～」を行う。
・水害、地震体験者の話をただ聞くだけでなく、事前に調べたことを基に質問をしたり、小グループで対話したりしながら学ぶような場を設定した。また、ここでは、たくさんの人とかわりながらの避難所生活体験や防災ワークショップでの探究的学びを大切にする。

③ まちの未来と意思をつなぐ（12月～3月）

- 調べたこと、体験したことを「防災かべ新聞」としてまとめ、様々な人に見てもらい、防災・減災への知識を伝え、意識を高める。
- 「こども防災未来会議」「イザ！カエルキャラバン！」を実施し、これまでの学びを様々な人に伝え合う。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・水中の生き物を撮影できる GoPro を活用し、より川の命をリアルに実感し、命を守る川と命を危ぶむ川とのギャップをより強く感じさせることができた。
- ・防災スクール「くずまきサバイバル ウイズコロナ～めざせ！未来の BOUSAI マスター～」での避難所生活に必要なパーテーション用の段ボールを購入し、より災害時に実際に活用できる技能を培うことができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・自分から動く、自分の役割を自覚し、それを果たす、できることを見付け主体的に取り組むなど、「よりよい避難生活」に必要なことを経験を通して考え、災害時は「助け合う、譲り合う、話し合う」ことの必要性を実感することができた。
- ・「こども防災未来会議」では、他校とオンラインでそれぞれの学びを伝え合い、防災・減災を含めたよりよい未来のまちづくりを考えていくことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- ・「楽しむ」「体験する」ことを大切にしながら、「魚をさばく」「魚を焼いて食べる」体験を通して、命をいただくこと、命の大切さを学ぶことができた。
- ・防災・減災に関する思いや経験を伝える「防災かべ新聞」の制作を通して、写真、絵、グラフ等と文字でどのように伝えるとわかりやすい新聞、主張の明確な新聞になるかなどの表現技能を身につけた。2021年度防災かべ新聞コンクールに応募した。グランプリ、準グランプリ、審査員賞等に入賞し、達成感を得ることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

- ・ふるさと未来創造堂主催の「防災みらい会議」に参加し他校の友達と同じ防災・減災というテーマで話し合ったり、地域の人や保護者ボランティアと防災スクールで共に学ぶ中で未来につながる防災・減災への意識を高めることができた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・防災・減災を「避難」という視点だけでなく、身近な川へ愛着をもたせる活動を加えることによって、より地域の川やそれにかかわる防災・減災をジブンゴトと捉え、「よりよい未来の社会」を地域の人と共に主体的につくる子どもたちを育てるための授業を追求した。
- ・発表の形をICTを活用することで、子どもたち一人一人の思いと主張が十分に伝えることができるようにした。写真、動画等、伝えたい内容によって効果的な選択ができるようにした。
- ・イザ!カエルキャラバン!」は、「防災訓練になかなか参加者が増えない」「防災訓練は面倒だ」というイメージを変えること大切にした。たくさんの方が参加してもらえる防災訓練を目指し、子どもたちができることを考え、アイデアを出し合い、「親子で学べる楽しい防災訓練」「参加してよかったと思える防災訓練」を目指した。子どもたちだから出せるアイデア、子どもたちだからこそできることを大切にした。
- ・次の方々から関わっていただき、支援いただいた。
・刈谷田川ダム職員 ・見附市防災アーカイブの職員 ・見附市消防署職員 ・見附市市役所防災担当職員 ・(特非)ふるさと未来創造堂職員 ・長岡震災アーカイブセンターきおくみらい職員 ・にいがたNGOネットワーク国際教育研究会RING会員 ・長岡技術科学大学 ・保護者 ・地域のふるさとセンター職員 ・くずまきまちづくり協議会役員等

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・「未災者」である子どもや教師が防災・減災を学び、伝えていくためには、その災害のことを机に座って勉強したりテレビのニュースを見たりするだけではなく、実際に被災地に行き、リアルな被災地の様子を肌で感じたり、被災者の声を面と向かって聞くことが非常に重要なことだと考える。新型コロナウイルス感染の不安が落ち着いたら、修学旅行等でそういった機会をつくりたい。

学校名	新潟市立小針中学校
担当教員名	吉野 雅典

活動のテーマ	生徒が主体的に課題解決に向けて探究し、地域の一員として提案、実践する防災・減災教育
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間 ）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（全学年 821人）（複数可）
活動に携わった教員数	56人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	14人 【保護者・地域住民・その他（地域の防災士、区役所総務課、社会福祉協議会）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年4月7日～西暦2022年3月18日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他 <input type="checkbox"/>

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

防災・減災についての認識を深めて自分事とし、自ら課題を設定してその解決に向けた探究活動を進め、地域社会に貢献する実践力を育む。さらに、防災・減災の学習や防災士を中心とした地域の方々と連携した活動を通して、自助・共助・公助の視点からバリアフリー、グローバル化への対応、性的マイノリティなど現代社会が抱える課題に目を向け、積極的に関わり解決していこうとする生徒を育てる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	校区内防災フィールドワーク		防災体験学習		家族防災会議	体験のまとめ	合同避難訓練の参加 探究学習の基本を学ぶ			2年生の防災学習の発表会への参加、振り返り		
2年	校区外フィールドワーク（新潟探訪）		防災現地調査学習 事前事後学習			修学旅行事前事後防災学習※いわき市・双葉町・浪江町 合同避難訓練の参加			修学旅行事前防災学習のまとめと発表			
3年	防災現地調査学習 事前事後学習			さすけなぶる探究活動、まとめ		課題解決の探究活動、合同避難訓練の準備、企画運営、発表会			学習の振り返り、卒業に向けて			

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

<変更・改善点>

- ・カリキュラムの作成と見直しに着手し、当校でも学習指導で重視する7つの能力・態度を総合的な学習での各学年の防災に関わる学習活動に位置づける検討を開始した。
- ・防災学習シートを参考に、各学習活動の学習シートを作成・修正してファイリングをした。また、防災学習シートを全職員が閲覧できよう準備を進めているところである。
- ・各学年で防災・減災に関する体験活動を行い、その学びをまとめて発表する形に偏りがちだったものを、生徒の問いを生かして課題を設定し、自ら探究していくプロセスを学習活動の中に入れていく計画づくりに着手できるようになった。

<助成金>

- ・生徒主体（3年生による防災運営委員会）で企画運営した合同避難訓練で、防災運営委員の生徒たちは、避難経路の各所に立哨して購入した小型のハンドマイクで指示伝達し、スムーズな避難になるよう有効活用した。さらに、防災運営委員の生徒が互いに避難訓練時の誘導や委員どうしで連絡を取り合うためのトランシーバーの台数が整い、今後、より円滑な生徒主体の活動が可能になった。
- ・感染症予防のための消毒用アルコールを補充し、実際に合同避難訓練で実際に想定して使用した。

- ・各学年の防災学習の際のファシリテーション、学習のまとめや発表用に購入した模造紙を惜しみなく使用した。また、生徒数が多い中学校のため学習活動では多くの模造紙を必要とし、全校生徒の防災学習や活動のまとめ、発表のための模造紙の補充ができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

当校では、総合的な学習の柱をキャリアから防災に変更して4年目(令和3年度現在)になった。防災を核にし、3年間を通じた学習を終え、防災カリキュラムの見直しと取組の再検討に着手するスタートを切った。その際、9月の研修会で紹介された作成の経緯、身につけたい能力や態度、地域に貢献できる姿のイメージを参考にして再検討をすすめ、令和4年度から運用する予定である。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

及川先生の講義であったESDで構築する自助・共助・公助の視点を活動の目的やねらいに加えて修正した。そして、3年生の防災に関わる最後の課題解決学習のまとめの際にその3つの視点を伝え、防災に関わるバリアフリー、グローバル化への対応、性的マイノリティなど現代社会が抱える課題まで踏み込む生徒が複数いたことは、成果があった。N助の視点の導入についても今後検討する予定である。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

- ・教師側では、特に各学年の総合担当の職員と研修後に総合部会を開き、生徒が身につけたい7つの能力・態度を活動の中で位置づけるような修正を共通理解し、運用する準備を行った。
- ・地域の自治会や防災士、行政の総務課など関係機関のスタッフに、防災学習のどの場面でどんな支援を必要とするか見直した。コロナ禍のため、合同避難訓練では防災士を10名以下に限定して参加してもらい、防災運営委員の生徒の指示や避難する生徒の観察と評価を専門的な視点で当日と事後にアドバイスして頂いた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・防災学習のまとめでは、学習用タブレット端末と紙ベースとを併用して、映像やデータ、文字や絵など工夫してわかりやすく発表する生徒が多かった。学びのある発表やアウトプットの手段をさらに研修していきたい。
- ・3年生の発表会では、コロナ禍のため発表場所を分散させた上、全校生徒と学習に関わった地域の防災士も参加し、学びの共有をした。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・9月の研修会に向けて頂いた防災学習シートの冊子のような自校オリジナルの学習シートを作成して蓄積する。
- ・今後も持続可能な防災学習のカリキュラムに修正・運用していく。
- ・ESDやSDGsの視点を防災教育や総合的な学習全体に関連させて実践し、各教科との横断化を図る。
- ・生徒に身につけさせたい能力や態度、姿を学習活動の中で明確にし、生徒の変容を見取って評価する体制づくり。
- ・生徒が主体的に課題解決できる、指導と働きかけ、教材の開発や校内研修体制の整備を行う。

学校名	岐阜県可児郡御嵩町立向陽中学校
担当教員名	大前雅紀

活動のテーマ	学校防災教育と地域と連携した減災・防災
主な教科領域等	教科領域（理科 特別活動）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 3 学年 231 人）（複数可）
活動に携わった教員数	21 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	76 人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021年 4月 1日 ～ 西暦 2022年 3月 31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

岐阜県では、平成30年7月豪雨、令和元年台風第19号、令和2年の7月豪雨など近年自然災害が毎年のように起こっている。学校がある可茂地区でも10年ほど前の平成の7.15豪雨では、3人の死者、行方不明者が出ており、この地域でもいつ災害が起こってもおかしくない状況である。また、東南海地震の起こる可能性も年ごとに高まっており、災害への備えは待ったなしの状況である。生徒と話をすると近くで災害が起こったことであっても他人事と捉えてしまったり、東日本大震災の実態についても、よく分かっていなかったりする生徒も多い。自然災害が起こり、命を落としたり、けがをしましてからでは遅い。まず、中学生として、自分の命は自分で守る。そして、他人の命も守れるようになってほしいと考えている。また、教師側でも減災・防災に対する意識にも差があり、防災に対する知識、理解を得て、生徒に指導をしていく必要があると考える。

一旦災害が起きると学校だけで立て直すことはできない。地域の方と協力して復興していくことが必要である。日常から地域と連携をとり顔の見える関係づくり、地域全体で災害へ備えることが大切であると考えている。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	予定した活動の実施状況	内容	取り組んだ具体的な活動
1 学期		命を守る訓練	4/19 地震を想定した避難訓練
		地域のハザードマップの掲示	地震、洪水を想定した被害状況を廊下に掲示
		災害状況の掲示	起こった自然災害の様子を伝える掲示
2 学期		防災用品の紹介と展示	準備しておきたい防災用品を廊下に展示し、いつでも見たり触れたりできる展示
	▲コロナ感染症対応で延期	御嵩公民館防災講座	防災講話「地域で一緒に防災を考えよう！」 →地域住民のみで実施
3 学期 1 月		防災講話と防災授業 2年生	11/30 防災講話 防災講師による講話 2年生2学級 12/14 防災授業 講話を聴き、実践したことを交流
	▲コロナ感染症対策で延期	理科気象防災授業	1/14 気象予報士による気象と防災授業 2年生2学級
	▲コロナ感染症対応で延期	御嵩公民館防災講座	1/23 防災講話「地域で一緒に防災を考えよう！」
3 学期 2 月～ 3 月	▲コロナ感染症対応で延期	全校防災講話	1/24 東日本大震災の被災者から学ぶ 命、教訓、備え、行動
		全校防災講話	2/21 東日本大震災の被災者から学ぶ 命、教訓、備え、行動
		理科気象防災授業	2/25 気象予報士による気象と防災授業 2年生
		御嵩公民館防災講話	3/13 防災講話「地域で一緒に防災を考えよう！」
		理科防災授業	3月理科防災授業「自然災害と防災 ～命を守るために～」1, 3年生

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9月の研修会での講話や交流など大変充実したプログラムであった。気仙沼のこれまでの教育現場の復興の足取りや今の小中高の学校の取り組みの状況、ESD、SDGsを軸にしたカリキュラムマネジメント、新学習指導要領へ減災教育をどう位置付けていったらよいか、また、地域とどのように連携し、巻き込んで取り組んでいったらよいか、以上の視点で現在の取り組みを見つめることができた。その視点から活動を再度見直した。

研修を終えて、感じたこと、学んだことをまずは生徒たちに伝えた。

起こる災害を想定し、自分事としてどのように捉えさせられることができるか、地域や周りの人といかに連携を取り、取り組んでいけるかという視点を重点化して計画の修正を図った。

助成金により、防災用品を常に目に触れさせたり、実際に触ったりすることで防災を生徒に意識させることができた。講師の方の謝礼、交通費を出すことができ、講師を招いた講話を行うことができる。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・減災・防災の視点を取り入れた活動をまずは位置づけ、生徒の意識づけにつなげることができた。
- ・理科の授業内容が、日常生活でどのように関わりがあるのか、つなげて考えられるようになった。
- ・防災ボランティアとして、公民館の講座に参加することにより地域との連携をつくり、顔の見える関係づくりにつなげられる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・地震による災害の危険性を理解し、自分の部屋や自宅でどのような危険性があるか考え、行動しようとする意識を身につけることができた。家具の固定がされているか点検し、家族で話し合う機会をもつことができた。
- ・自分の部屋や自宅の危険性を考え、行動したことを仲間に伝え、聞き合うことで、より「安全」について深く考えることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・講師の講話を聴いた教師は、減災・防災への意識が高まり、生徒への減災、防災指導の必要性を感じた。
- ・生徒が学校で学んだ「地震対策 屋内危険性チェック」を家庭で実践し、保護者にとっても地震対策を考えるきっかけとなった。
- ・地域の公民館で、防災講話を実施し参加することで、災害の危険を理解したり、対策を立てたりすることを意識したりすることができた。
- ・役場の防災課と「家具固定」について連携して進めることで、地域で考え実践する方向につなげることができた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・公民館での防災講座を企画し、地域の方と一緒に減災、防災について考える機会を設けた。
- ・講師による防災授業で、保護者、家庭を巻き込み、減災、防災、特に地震対策における屋内の危険性について考えることができた。家庭での実践を交流することで、さらに生徒の意識が高まった。
- ・東日本大震災で被災された方からの講話を位置付けて、道徳的な視点からも減災、防災について考える機会を設けた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・自分事として捉えさせるためには、自分の身近なところから具体的に考えさせることが大切である。
- ・どのように学校や地域のシステムとして位置づけ、学びを継続していかせるようにしていくか。
- ・今年度、実践したことを土台に、学年の発達段階や実態に合わせてカリキュラム（システム）として、いつどのように位置付けていくか。来年度も地域の公民館での講座を位置づけ、中学生をボランティアとして参加するように継続したい。また、保護者や地域の方の認知度も高め、より多くの方が参加できるようにしていきたい。ICTを活用するなどコロナ禍でも、できるような活動を位置付けていく。

7) その他 (※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ (JPEG) もご提供ください。



避難訓練



防災講師による講話



理科防災授業



防災講師による講話



理科防災授業



理科防災授業

学校名	羽島市立桑原学園
担当教員名	中田 直哉

活動のテーマ	学校・家庭・地域の三者で学び合い、気づき、考え、実行する防災学習
主な教科領域等	教科領域（学級活動、総合的な学習の時間、社会）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全学年 174人）（複数可）
活動に携わった教員数	30 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	13 人 【保護者・地域住民・ <u>その他</u> 羽島市防災研究会（13人）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021年 11 月 1 日 ～ 西暦 2022年 3 月 22 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

・災害は必ず起こり得るものとの認識に立ち、前期課程（1～6年）では、KYT（危険予測訓練）により、普段の生活に潜む危険に気づき、災害時の行動を理解すること、また、後期課程（7～9年）では、感染症への対策を踏まえた避難所運営を学び、全学年が減災への具体的な備えを体験することで家庭での実践化にも繋げる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	前期課程（1～6年）	後期課程（7～9年）
1, 2限	1～4年：「みんなでたすカルテット」カードゲーム 5～6年：「減災アクション！カードゲーム」	通常授業
3, 4限	1～6年は縦割りチームで、羽島市防災研究会と共に校舎内KYT、その後交流会	羽島市防災研究会の方を講師として、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた避難所の開設訓練
昼食	後期課程生徒が防災食を準備、パックに付け分け、各学級に配る。	
5, 6限	・7～9年が縦割りのグループとなり、前期課程1～6年の教室に分かれて、廊下側のガラス扉に飛散防止フィルムを貼る体験活動を行う。6会場（教室）には、羽島市防災研究会の方に付いてもらう。	

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・学校での防災の学びが、地域防災と繋がることを願い、「防災・減災を学ぶ日」と位置付け、羽島市防災研究会と協働することで、羽島市役所危機管理課の理解を得て、喫緊の課題を踏まえた活動を進めることができた。
- ・1～9年までの義務教育学校ではあるが、学年の発達段階に応じて段階的に学ぶことが大切であると考え、前期課程（1～6年）、後期課程（7～9年）に分け、内容を変えた点、特に後期課程においては、地域防災人の育成の視点で、感染症対策を踏まえた避難所運営について、羽島市防災研究会の方と共に学んだ。助成金を活用したことで、日頃からの備えの体験活動が可能となった。防災食の準備や前期課程教室の窓ガラスへの飛散防止フィルム貼り等、実践的・体験的活動の取り入れにより、日頃からの備えとは具体的にどうすることなのかという視点が可能となり、家庭での実践化に繋ぎやすくなった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・前年度踏襲で校内で終始することの多かった、これまでの「命を守る訓練」からの脱却を図ったこと。義務教育を終えれば地域の一人となる子どもたち、過去の教訓を未来に繋ぐためには、いかにして、学校での学びを、家庭や地域に繋ぐかを考え、特に地域防災の要である羽島市防災研究会の方と協働して取り組めたこと。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・「学校にはいろいろな危険があることが分かったから、家でもどんな危険があるのかを家族と考えたい」という、学校生活における「地震時の危険」の視点を家庭生活でも繋ぐことができ、どこにいてもKYTの視点で見る力が付いてきた。
- ・非常食を食べる活動や校内に防災・減災コーナーの展示スペースを作り見学を位置付けたこと、飛散防止フィルム貼り等、備えることの具体を実践的に体験できたことで、家でも備えたいとの思いにまで高めることができた。
- ・桑原町の人口が2500人、倉庫には1000食程度しか備蓄されていないこと、また感染症対策を踏まえると2000人程度しか避難できないこと等、現実感をもって捉えることができ、避難所運営の難しさや、避難所に行きさえすれば助けてもらえるという受け身ではなく、自らが日頃から備えることの重要性を強く実感できたこと。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・防災・減災の学びは、単に命を守る訓練を実施することではなく、社会科や理科の教科の学習、学級活動（2）ウ、特別活動、総合的な学習の時間、学校行事（3）健康安全・体育的行事等と絡ませて仕組むことで、新たな視点を加えて展開できることを学ぶことができ、教師自身が防災・減災について自分ごととして捉えられるようになった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・一人一台iPadを活用し、過去の災害について調べ、普段の学校生活との繋がりが実感できるように写真データを保存し、校舎内KYTで下級生に示すことで、災害を想起しやすくした。
- ・羽島市防災研究会との協働により、感染症対策を踏まえた避難所運営について市の最新の動向を踏まえた学びができたこと。体育館フロアに貼られたマーキングを目印にテープを貼ることなど実践的に学ぶことができた。
- ・自分が生活している町内の人口、避難所となる体育館の収容人数、備蓄倉庫にある食料品の数量等を具体的に見聞きすることで、全員が避難できないこと、全員に十分な食事が行き渡るわけではないことが実感でき、普段から、自ら備える自助の必要性を強く認識できたこと。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・子どもたちは、皆、未来の地域防災人である。子どもたちからの発信により家庭や地域にも、減災に繋がる動きを確かなものにしていけるよう、前年度の実践をなぞるのではなく、少しずつ変化を加えながら、1年から9年生までの義務教育学校であることを活かした、異学年間での教え合いや学び合いを盛り込んだ実践を次年度以降も、計画的に展開していきたい。
- ・現地に行かなくても被災地の現状を学ぶことはできる。今回、気仙沼市立階上中学校の防災委員会のメンバーと、Zoomで繋ぎ交流を図ることができた。初回ということもあり、自己紹介や学校での防災・減災に関わる学びを交流した。これを契機として、防災・減災にかかわる課題解決学習の在り方についても研究を深めていきたい。
- ・ICT機器の有効な活用により、過去の災害からの学び等、当事者意識をもって学べるように一手間をかける。

学校名	小山町立北郷中学校
担当教員名	渡邊 はるか

活動のテーマ	地域を知り、地域を考え、地域の力になるための学習
主な教科領域等	教科領域（ 総合的な学習の時間、道徳 ）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全学年 144 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	19 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	7 人 【保護者・地域住民・ <u>その他</u> （ 地域防災士 ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2022 年 3 月 31 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ・防災教育を通して地域を知り、地域に貢献する意識を高めることで、学校重点目標「地域で存在感を発揮できる生徒」を育てることを目指す。
- ・自助はもちろん、共助の意識・実践力を高める。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

〈総合的な学習の時間〉

☆ジュニア防災士認定に向けた諸活動（1年）

- ①タブレット端末の地図アプリ等を活用した、地域の危険を知る活動
- ②防災学習テーマ追究（調べ学習、まとめ、発表）
- ③北中防災の日（講話、避難所運営ゲーム、簡易トイレ等の設営、非常食の喫食）
- ④防災ラリーの実施
- ⑤地域防災訓練への参加、レポート作成

〈その他〉

○防災道徳（全学年）

…防災や災害時等における（正解の不明確な）葛藤場面で自分ならどうするかを考え、仲間と議論する中で考えを深めていく。場面設定に合わせて考える中で、道徳的価値に気づき、判断力や行動力を高める。

- ・防災道徳→ジレンマくだき（教材設定上のジレンマに対し、現実にはどう対処できるか考える時間）

※校内研修

○避難訓練

- ①避難訓練の工夫。予告なし、想定外の事態をふまえた訓練。
- ②具体的な場面における対処方法の検討（例：毎月の北中防災の日における活動等）

○北中防災の日

- ・6月11日：1年…避難所運営等の活動 2年…心肺蘇生法、東日本大震災学習 3年…心肺蘇生法、止血法
- ・毎月更新の掲示物、担任からの話

・3月11日の日には、「防災学習シート」の「校舎内の避難場所を知ろう」ワークシートを参考に、北郷中学校の校舎内の写真をみて、危険が予測される場所を付箋で書き出す作業を行った。各クラスで出し合った後、他クラスの付箋を合わせて掲示し、生徒はクラス内では出なかった意見にも触れることができた。また、階上中学校の答辞の文章を読み、災害の恐ろしさを改めて感じたり、被災された方々へ思いを馳せたりする時間にする事ができた。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・防災意識高揚を目的として行ってきた毎月の防災掲示は、災害時の正しい行動や役立つ知識を伝える役割を担っていたが、教員からの一方的な発信にとどまっていた。⇒「当事者意識を育てることが大切」という、研修から得た学びから、知識を伝えるだけの内容ではなく、最善を考える問いかけ、場面の提示をし、あえて答えをすぐ出さないで、考えることを促す掲示にすることも意識した。

- ・生徒への予告なし、学級活動中の避難訓練。⇒研修を通して、「想定外への対応」の重要性を感じ、今年度の2回目の避難訓練は、予告なし、かつ生徒が各自で行動している昼休みの時間に行った。また、教職員に向けては、生徒が1人逃げ遅れたことを想定した訓練を予告なく行った。
- ・助成金で災害時に活用できるパーティションや、減災教育ほか保健などで使える心肺蘇生訓練用人形と AED トレーナーを購入。定期的に心肺蘇生に触れる機会を作ることができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・感染症対策のため、活動が限定された中、できる限り災害を他人事として捉えるのではなく、「自分事」として学べるよう、地域や体験活動を重視した活動やカリキュラム、地域への発信の仕方を工夫して活動を行った。朝の時間など、短い時間を活用して、試験的に防災ミニ学習を行うことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- ・自分の身の回りで起こりうる災害や、災害による被害を、調べたり考えたりする活動を通して、自分の地区の危険を具体的に知った。
- ・避難所運営に必要な知識を身につけ、経験を積むことができた。また、共助への意識が高まったことで、守られるだけではなく、自分たちが地域で力を発揮する存在であるという自覚が芽生えた。
- ・学校評価において、「わたしは、防災に対する意識が高まっている」と答えた生徒が全校で 91.9%。目標としていた 90% を上回り、ほとんどの生徒が自身の減災意識の高まりを感じる事ができた。
- ・在校生全員がジュニア防災士の認定を受けた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

- ・避難訓練では、設定の工夫で、生徒たちが想定外の対応をただだけでなく、教職員もどう対応し、子どもの命を守るかを考える機会を作り、危機管理体制を見直すことができた。
- ・地域への発信(静岡県の地域防災訓練時に、生徒が居住地区ごとに調べた成果を地域に向けて発表する予定だったが、今年度は紙面発表となった。成果物を公民館に掲示することで、多くの地域住民が常に見ることができ、減災意識を高めるうえで、地域に貢献できた。)

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・総合的な学習の時間では、学校でインターネット上の地図アプリや紙の地図を活用し、危険箇所を調べたうえで、現地を歩いたり地域の人に話を聞いたりして調べる活動を取り入れ、実際に行ってみなければ分からない地域のことについて知る機会となった。
- ・1つの領域だけでなく、教科横断的にさまざまな場面で減災教育を取り入れた。(例：理科の「大地の変化」、社会の「自然災害と防災への取り組み」、防災道德など)

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・地域に根差した減災学習を行ったことで、災害への捉えがより具体的かつ「自分事」となっていた。今後も減災活動を通して地域を知り、地域で活躍できる力が身に付く学習活動を模索する。
- ・教師主体の発信から脱却するため、次年度では委員会活動を利用して、掲示物づくりを担うなど、生徒が主体となって減災意識を高める取り組みに参加できる活動を企画する。
- ・減災に関する活動が未だイベントのような位置づけにあるため、毎月の北中防災の日を活用し、短学活等の時間に心肺蘇生法などの体験活動を行ったり、防災ミニ学習を行ったりするなど、減災教育を平時の活動から取り入れる方策を検討中。

学校名	愛知県岡崎市立竜海中学校
担当教員名	武井 翔

活動のテーマ	コロナ禍の防災・減災教育の推進
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習、特別活動、道徳、技術・家庭科（家庭分野）、美術科、英語科）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="checkbox"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="checkbox"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（第1学年324人）（複数可）
活動に携わった教員数	17人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	750人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年4月8日 ～ 西暦2022年3月24日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="checkbox"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ①総合的な学習の時間の単元「BEST な新型コロナ×防災対策会議～『防災戦略』の追究～」での探究的・協働的な学習を通じ、コロナ禍での防災・減災対策について「自助」と「共助」の視点から探究課題を自分事として捉え、具体的な行動につなげることができるようにする。「個人追究課題」（「防災アイデアグッズ」の考案）の整理・分析を行った上で「学級追究課題」を設定し、自分たちのアイデアを役立たせたい相手を自ら選択・決定し、行動化をめざす。
- ②ESD の視点に立ち、総合的な学習に特別活動や技術・家庭科（家庭分野）・美術科の学習と関連付けて「防災アイデアグッズ」を製作して寄贈する準備を進めることで、探究的な学びの充実を図る。
- ③防災関連の道徳資料『塩むすび』を活用し、探究的な学びとつながりのある道徳的価値を理解し、実践力を高める。
- ④東日本大震災の被災地・福島県郡山市の中学生と、オンラインで各校の総合的な学習の追究成果を発表し合うことで、大震災の事実や教訓を学ぶとともに、主体的な防災・減災対策の取組を価値づける。
- ⑤防災・減災の取組に関する探究的な学習の成果を発信する機会の充実に向け、「外国人市民に防災のアイデアを紹介する」という英語科単元を構想し、「Think Globally, Act Locally」の考え方を行動化する力をつける。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

- | | |
|------|---|
| 4月 | ① 避難訓練と「東日本大震災」に関する学習
② 岡崎市防災講座第1回「地震災害編」・第2回「風水害編」・第3回「各種災害・共通編」の視聴と意見交流 |
| 5月 | ③ 家庭の防災対策の点検（「防災バッグ」と家具の固定）
④ 「防災戦略オンライン研修会」（Zoom利用）の実施【講師】岡崎市防災課
⑤ 「マイ・タイムライン」（風水害への備え）の作成（岡崎市防災課提供の様式を利用し、学校で作成方法を学習した後、家庭で相談しながら進める課題を指示） |
| 6～7月 | ⑥ 「持出品・備蓄品リスト」の作成と「防災バッグ（非常用）」「防災ポーチ（常用）」の検討 |
| 7～8月 | ⑦ 1学期の学習内容を生かした個人追究課題（「防災アイデアグッズ」と「防災アイデア食」の考案） |
| 9月 | ⑧ 個人追究活動の成果交流（オンラインコラボレーションツールの活用）
⑨ 学級追究課題の検討・決定
⑩ 【技術・家庭科（家庭分野）】研修会に向けた、個人追究課題「防災アイデア食」の振り返り
⑪ 総合学習実行委員会の立ち上げ（各学級代表＋有志の生徒で構成） |
| 10月 | ⑫ 「防災戦略オフライン研修会」の実施【講師】岡崎市防災課（3名）・岡崎市栄養教諭（3名）・NPO法人あいち防災リーダー育成支援ネット（3名）計9名
⑬ 【技術・家庭科（家庭分野）】「防災ポーチ」のポーチ製作
⑭ 【美術科】届ける相手への願いを込めた「文様」を添えた「ギフトカード」の制作
⑮ 学級別製作費（1万円）の配付（担任による支援の下、総合学習実行委員が予算執行） |

- 1 1～1 2月 ⑯ **【総合的な学習及び特別活動】**学級追究活動の展開（総合学習実行委員の計画に基づく、生徒主体の防災アイデアグッズ製作）
- ⑰ ゲストティーチャーによる特別授業の実施
- 1 2月 ⑱ 福島県郡山市立緑ヶ丘中学校（1年生）とのオンライン交流授業の実施
- ⑲ **【道徳】**防災関連の資料を利用した道徳授業の実施（資料名：『塩むすび』）
- ⑳ 「岡崎市地域（六名学区）総合防災訓練」への参加と「防災アイデアグッズ」の寄贈
- ㉑ 各学級のアイデアを役立たせたい相手先に「防災アイデアグッズ」の寄贈
- ㉒ 総合学習実行委員会主催の「防災追究成果オンライン学年発表会」（Teams 利用）の開催
- ㉓ エフエムE G A O「ようこそ！E G A Oスタジオ」に出演し、防災追究の取組の紹介
- 1 月 ㉔ **【技術・家庭科（家庭分野）】**「My 防災ポーチ」の実用化に向けた準備
- ㉕ 「My 防災ポーチ」の共有と改善点の把握
- 1～2月 ㉖ **【英語科】**外国人市民のための「防災アイデアグッズ」を取り上げた「防災啓発ポスター」の作成
- 3 月 ㉗ **【英語科】**「りぶら国際交流センター」での外国人市民向けの「防災啓発ポスター」の展示と配布

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・気仙沼市立階上中学校の実践を参考にして、「探究的な活動」と「体験的な活動」を充実させるとともに、「学習の発信」の機会を増やすよう努めた。
- ・9月研修会のグループセッションで上田和孝先生に教えていただいた社会貢献教育「Learning by Giving プロジェクト」を参考にして、「防災のアイデアを役立たせたい相手を各学級で決めて実際に防災アイデアグッズを届ける」という過程を充実させたことで、生徒の追究への意欲は格段に高まった。助成金を学級別「製作費」として学年9学級に各1万円を配当し、生徒自身も物品購入や会計報告に携わった。各学級で創意工夫を凝らしたグッズを考案し、実用化できた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・1学期の防災・減災学習（体験的な学習）では、2学期の学級追究活動（探究的な学習）に利活用が期待される内容を網羅し、事実に知識を概念的知識へと高めることができるよう、くり返し取り扱い、自分の考えを深めることができるようにした。その際、岡崎市防災課に生徒が身に付けておくべき防災・減災に関する知識・技能の捉えから相談させていただいた。研修会は5月（オンライン開催）を皮切りに、10月（オフライン開催・各教室）、12月（オンライン開催）の3回にわたって開催し、生徒が防災課講師から直接、御指導・御助言を受けることができるようにした。5月の研修会では、本校学区の災害リスクの理解やコロナ禍での感染症対策の取組等、行政の立場からの具体的な情報が提供され、防災・減災対策への切実感と必要性の実感を高める一助となった。10月の研修会では、避難所での“住”空間について考えるため、教室内で避難スペースを再現して体験する中で、避難所で配慮すべき相手や事項について市防災課講師による司会・進行で意見交換を行った。12月には各学級で考案・製作した「防災アイデアグッズ」の特徴を、学年生徒と防災課講師に向けてオンラインで発表し、発表後には防災課講師から御指導・御助言をいただいた。
- ・生徒が自分たちの防災のアイデアを役立たせたいと考えた「相手」は、地域の高齢者や障がい者、幼稚園児、保育園児、小学校・盲学校の児童・生徒と様々で、地域社会の多様性を見つめ直すとともに、自分自身でその「相手」を決定する機会ができたことは、中学生として地域のためにできることを行動化することを価値づける上で有意義であった。
- ・防災・減災対策は、どのような社会状況にあっても、各個人が主体的に取り組むべき社会課題であり、今年度の感染症対策との複眼的な視点での防災・減災教育活動は、実社会や実生活に生きる学びとして価値あるものとなった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

総合的な学習の単元計画としては、次のように観点別の評価規準を作成し、生徒の学びの変容を見とるようにした。

- ①コロナ禍の防災・減災対策の創造的な取組の実現に向けて、身の回りの情報を整理し、目的や状況に応じて使いこなすことで、自分のアイデアを行動化して、持続可能な社会の実現に貢献できることに気付いている。【知識・技能】
⇒個人追究課題を学級追究課題へ応用・発展させ、学級としての願いを込めて「防災アイデアグッズ」を考案・製作し、相手に届けることに喜びや学びがいを実感する姿が数多く見られた。
- ②コロナ禍の防災・減災対策の創造的な取組の実現に向けて、自分自身で課題を設定して、追究に見通しを立てた上で、目的に合わせて情報を分類したり、表現・発信の方法を検討したりして、自分の考えをまとめ、適切な方法で表現している。【思考・判断・表現】
⇒共通のテーマに基づく個人追究の成果を比較・検証し、学級としての課題を設定して解決を図るという過程を経たことで、個人追究と学級追究のそれぞれの段階において、自分の考えを形成して再構築し、相手や状況に応じて、適切に表現することができるようになった。

③課題解決に向けて、追究の見通しを立てて粘り強く取り組み、自分自身の活動を振り返りながら、次時に生かそうとしたり、今後の学びや生活の在り方を積極的に考えようとしたりする。【主体的に学習に取り組む態度】

⇒総合学習実行委員会を立ち上げて、生徒主体で追究活動を進めていくようにしたことで、生徒自身が追究の見通しを立てて仲間と協働して取り組む姿が見られた。また、毎時間の進捗状況を把握し、取組姿勢を振り返ることで、見通しの修正を図る姿も日常的に見られるようになった。防災ライトの活用法を考える際、理科で学習した「光の性質」に言及する等、教科等で身に付けた知識・技能を生徒自身が活用して自分の考えを述べる場面も見られた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ESD の視点から、防災・減災を探究課題とした総合的な学習を特別活動にも関連づけて、技術・家庭科（家庭分野）、美術科、英語科等、教科との連携を図ったりしたことで、教師集団の防災・減災への意識は高まった。
- 生徒が家庭の防災対策の取組を見直す学習活動を仕組むことで、保護者も学校の防災・減災学習に関わることができるようにするとともに、学級通信や学年通信を活用して探究的な学びの様子を随時紹介することで、防災教育への関心を高めていただけるよう工夫した。その際、活動の様子を写真を多用したり研修内容の要点を掲載したりして、保護者も具体的なイメージを共有しやすいよう紹介方法を工夫した。
- 岡崎市防災課やNPO法人あいち防災リーダー育成支援ネット、岡崎市栄養教諭、ゲストティーチャー（六名学区総代会長長坂様）等、本単元を進める上では、多数の外部講師の方をお招きして御指導・御助言をいただいた。
- 地域の新聞社（東海愛知新聞）の方に「防災戦略オフライン研修会」及び「岡崎市地域（六名学区）総合防災訓練」の様子を新聞記事にさせていただいたり、地域のラジオ局（エフエムEGAO）の御厚意で代表生徒が生放送に出演して、学級追究成果を紹介することができたりする等、防災学習の成果を地域に向けて発信することもできた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- 総合的な学習としては、第1学年は年間50時間のうち、40時間を防災学習に配当した。時間数の確保に向けて綿密に年間計画を立案し、生徒の意識が途切れないよう、授業と授業をつなぐ課題の出し方を工夫した。
- 1学期には、防災・減災の知識を習得した上で「防災アイデアグッズ」と「防災アイデア食」を個人で考案する課題を夏休みに取り組み、それを整理・分析することで、2学期からの学級追究活動の課題設定に生かすようにした。
- 2学期の学級追究活動は、教師主導ではなく生徒主体とするため、学年全体で総合学習実行委員を募り、「防災アイデアグッズ」の製作と贈呈の準備の過程を生徒に委ねた。特に助成金を学級別「製作費」（各学級1万円程度）とし、生徒が物品購入や会計報告も経験できるようにし、実社会や実生活につながる学びをめざした。
- ESDの視点に立ち、家庭科での「防災ポーチ」の製作や美術科で考案した「文様」を添えた「ギフトカード」の制作にも取り組み、学びの連続性を生み出すよう工夫した。
- ゲストティーチャーとして岡崎市総代会連絡協議会会長（六名学区総代会長）の長坂秀志様をお迎えして特別授業を実施した。「防災アイデアグッズ」の試作を進める中で「高齢者」の目線で御意見を伺い、改善を図るようにした。2回目の特別授業では、改善を図って完成させた「防災アイデアグッズ」を寄贈した（写真・上）。
- 福島県郡山市立緑ヶ丘中学校（1年生）とのオンライン交流授業の実施により、被災地で生活する同い年の仲間から、東日本大震災の事実や教訓を学ぶことで、大震災をより深く印象付けることができたようにした。
- ゲストティーチャーの御厚意で、「岡崎市地域（六名学区）総合防災訓練」に参加し、訓練に参加された各町総代様に「防災アイデアグッズ」を寄贈できた（写真・中）。
- 防災訓練に参加する前後週の道徳授業（2時間完了）では、東日本大震災時の避難所生活に関する資料『塩むすび』を活用した。防災訓練と道徳的価値をつなげて考えることで、学びがよりいっそう深まるようにした。
- 地域のラジオ局（エフエムEGAO）での生放送の出演時には「防災アイデアグッズ」を持参して、パーソナリティの方にグッズの特徴や使い方等を説明した。パーソナリティの方から質問を受けた際に、ゲストティーチャーからの御助言を踏まえて改良を重ねた点について答える等、追究の成果が十分発揮できていた（写真・下）。探究的な学びを振り返り、価値づける上で大変意義深い機会となった。
- 英語科では、教科書（東京書籍）の“Think Globally, Act Locally”の単元と関連させて災害時要配慮者の外国人市民に向けて、英語とやさしい日本語を使用して「防災啓発ポスター」を作成し、ALTに紹介する言語活動を設定して学習を展開した。生徒が作成した「防災啓発ポスター」は、岡崎市「りぶら国際交流センター」で展示・配布していただき、実際に外国人市民に役立ててもらえるようにした。



6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・総合的な学習の時間の単元名を「BEST な新型コロナ×防災対策会議～『防災戦略』の追究～」と設定したのも、防災・減災の取組を自分事と捉えて、問題解決に向けた「戦略」（追究の道筋）を自ら立てて、行動化する力をつけてほしいという願いからであった。単元を展開していく中で、身近な誰かを幸せにできるアイデアを生み出して、実用化していくことに楽しさを見だし、生徒が自ら探究をくり返す姿を数多く見ることができた。
- ・今後の実践の展望としては、仲間と協働して、多面的・多角的に捉えてきた防災・減災の創造的な取組を、個の興味・関心に戻して新たな課題を設定し、多様な立場の人々の思いに触れながら学びを深めていく探究をめざしたい。その際、生徒自身が希望する当事者や、参考となる取組に尽力している人材から学ぶ機会を保障する等、より豊かな学びの実現に向けて新たな構想を練っていきたい。

7) その他

- 「岡崎市地域（六名学区）総合防災訓練」での「防災アイデアグッズ」の寄贈に関する新聞記事

愛知新聞 2021年(令和3年)12月21日(火曜日)

アイデア光る

岡崎市 竜海中 生徒考案の防災グッズ寄贈



岡崎市竜海中学校の生徒が十九日、同市六名小学校で行われた「地域総合防災訓練」の中で、自分たちが考案した防災アイデアグッズ「3WAYライト」を六名学区の町内会に寄贈した。

ライトは、小型の懐中電灯にバンドを取り付けたもので、三つの用途がある。ヘッドライト、ハンドライトのほか、立てたライトの上に水が入ったペットボトルを載せれば簡易のランタンにもなる。

同校の一年生は、総合学習の一環で二学期から防災アイデアグッズを考案。九組では、同学区の長坂秀志総代会長を招いてアドバイ

スを受けるなどしながらライトの改良を進めてきた。

この日は、同組の生徒二十五人が訓練に参加。学区内二十四町の総代らにライト二十六个（約五千二百円相当）を手渡した。また、生徒が「防災戦

生徒が考案した「3WAYライト」

林咲希さんは「防災について考える機会がない人にも（ライトを通じて）防災意識を高めてほしい」と笑顔を見せていた。（犬塚誠）

安産 特別 祈祷
徳川家康公の 六所神社
氏神である
名鉄東岡崎駅より南東へ約100m

学校名	三重県鳥羽市立鳥羽小学校
担当教員名	山本 将也

活動のテーマ	「つながりのある学校防災・減災体制の構築」 ～命をつなぐ子 鳥羽をつなぐ子の育成～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間・社会科・特別活動・学校行事）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（4・5・6学年 86人）（複数可）
活動に携わった教員数	10人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	80人 【保護者・地域住民・その他（市役所職員・地域サークル）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021年 4月 5日 ～ 西暦 2022年 3月 16日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ・災害時における校内連携・地域連携体制を構築する。
- ・児童および教職員が実践的災害対応能力を身につける
- ・外部団体との連携により、幅広い視点で防災減災を捉え、未来の鳥羽を創造できるようになる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

☆命をつなぐ☆

- 校内避難訓練（全学年・年8回 市役所防災危機管理室・地域サークル・中学校による視察あり）
（4/5転入職員防災研修・5/11・6/9・7/6・10/8・11/5・1/17・3/11）
- 小中合同避難訓練（全校児童 169名）
新型コロナウイルス感染症の影響により中止
- 防災キャンプ（5・6年59名 10/21）
地域と連携した海岸のごみ拾い 自分たちで火をおこして非常食作り
市役所防災危機管理室より非常食の提供
- 鳥羽市防災危機管理室による出前授業（4年 27名 12/1）
鳥羽市の過去における災害について・ハザードマップの解説・避難所の運営について
- 鳥羽市内の子育て応援サークルによる防災教室（4年 27名 年3回）
第1回 11/9 段ボールを使用した避難所体験 段ボールベッド等の作成
第2回 11/30 かんたん非常食調理実習 ペットボトルピザ チキンライス オムレツ作り
第3回 3/11 災害時の簡易トイレ作成実習
- 伊勢市防災センター見学（3・4年 56名 11/24）
伊勢市防災倉庫の見学・煙避難体験・NTTによる171体験
- 防災特別講演会1（4・5・6年 86名 12/22）
南極地域観測隊（越冬隊）に参加された方に地球全体のつながりについてお話を聞く。
- 防災特別講演会2（4・5・6年 86名 3/16オンライン）
阪神淡路大震災・東日本大震災を経験された方よりお話を聞く。

☆鳥羽をつなぐ☆

- マイ・ホームタウン 子ども会合（6年 26名 12/3）
日本 インド バングラデシュ フィリピン ミャンマーの学校を結んでの交流（SEEDs Asia）
- 海洋ごみに関するオンライン交流会（5年 33名 10/26）
岐阜県の長良西小学校とオンラインで学習交流会を行い、海の環境や環境ごみについて互いが学習してきた内容を発表し合い、川と海のつながりを学んだ。

☆4年生防災減災学習（総合的な学習の時間 通年）

●MBM（マイ防災マップ作り）

タブレット端末を活用し地域の防災マップを作成する。

●ピクトグラム作成

命を守るをテーマにピクトグラムを作成し、ステッカーにして啓発する。

☆職員防災減災研修☆

市主催の防災講演会 参加4名

市教委主催の防災減災講演会（講師 及川幸彦先生） 参加6名

県災害時学校支援チーム隊員育成研修 参加1名

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・N助の視点から、他団体や外部講師とのつながりを構築し、幅広い視点をもち災害時に実践できるスキルを児童に身につけさせられるような活動を取り入れた。
- ・9月の研修会を契機とし、校内の防災・減災教育の見直しを行い、複数教員で防災減災教育に関わっていくことを確認した。
- ・カリキュラムを見直し、すべての教育活動にE S Dを取り入れ、持続可能な防災減災学習のカリキュラムの作成に取りかかった。

4) 実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・自校だけで取り組むのではなく、地域・保護者・各種団体とのつながりをもつことができ、結果として質の高い防災減災教育が実現できている。
- ・お互いの避難訓練について、まずは職員間の交流を行うことができ、今後、小中連携が進む道筋を作ることができた。
- ・自校の防災減災教育にP D C Aサイクルを取り入れ、より地域の災害（地震津波）に合わせた活動ができるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・児童が自らの課題を見つけ探求していく活動に外部団体や外部講師とのつながりを組み入れたことで、より自分の活動の見通しをもち、SDG sなどの世界的視野に立った見方ができるようになった。
- ・学習活動自体に対するモチベーションが高まり、活動自体の持続性が大幅に向上した。根気強く学習に取り組む児童が多くなり、結果として他の教科領域でもやり抜く力が育ってきている。
- ・地域に特化した学習（防災・水産業・歴史）を進める中で、地域に対する愛着が高まっている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・未災地域にありながら、積極的に防災・減災教育に取り組む学校があることを知り、事前防災の必要性を改めて感じている。
- ・防災・減災教育を1つの柱として、他の教科や領域そして児童につけたい力を明確にすることで、総合的に児童の資質・能力を高めることができると確信しつつある。
- ・教員自身が地域を好きになり、児童とともに学びを深めようとするようになった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・協力者を市内の中学校や高等専門学校、市役所、サークルにとどめることなく、SEEDs Asia とのつながりを活用したことで、児童の学習活動がよりダイナミックなものとなった。

e x) 外国の小学生に自分の地域を英語で伝える。

南極観測隊のお話を聞くことで、自分の活動は地球全体に影響を与えると気づく。

はるかかのひまわりについて知り、地域を越えたつながりに関心をもつようになる。

- ・単学年の実践ではなく、学校全体としてカリキュラムを構築したことで、児童の学びに連続性・持続性・発展性が加わった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・防災・減災教育は、学校のみで進めるのではなく、児童主体・学校主体を基本としつつ、外部とのつながりを構築することでより深みと幅のある教育にすることができる。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響で計画通り進めることができなかつた部分が多くあつたが、新たなつながりを構築するきっかけにもなった。
- ・学校とつながりができたステイクホルダーと今後どのように関わりを保ち続けることができるのか。

・児童間の交流（異学年交流も含む）を学校全体でマネジメントし、より質の高い教育活動にしていくことが必要になる。また、基礎学力との相関をはかり、学力向上につなげるための手法を開発していきたい。

7) その他（※特にあれば記述）

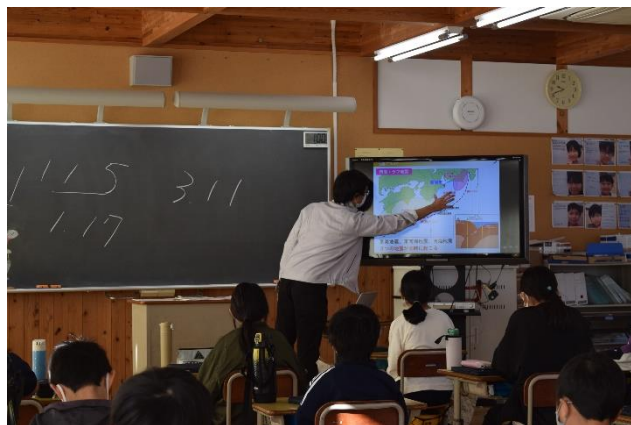
※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



ピクトグラム作成



避難所体験



市防災危機管理室による防災出前授業



避難訓練

学校名	京都府立綾部高等学校東分校定時制
担当教員名	田中 良興

活動のテーマ	災害時の「状況判断」・「適切な対応」・「危険回避」する力を育む防災教育
主な教科領域等	教科領域（ 理科、特別活動 ）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="checkbox"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 1 学年～4 学年 24 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	8 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	10 人 【保護者・ <u>地域住民</u> ・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 9 月 24 日 ～ 西暦 2022 年 1 月 24 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ 地震後の出火により学校内、地域の電源がダウンし、ブラックアウトを想定 ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

ブラックアウトしたことを想定した避難経路の確認、投光器による避難経路の確保等しながらの「避難訓練」を実施し、防災意識を高める。また指定避難所に当たっている本校体育館・グラウンドにおいて、地域の避難者に対する新型コロナウイルス感染症対策、飲料水、食料、救急用品・医薬品、ヘルメット・防災頭巾、毛布・寝袋等提供体験、対人スキルトレーニングによる災害時のコミュニケーション能力を高めることを目的とした。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

9月24日(金) 地震、火災避難訓練を実施

特に、学校・地域がブラックアウトした時を想定して、生徒避難経路にランタンを設置し、懐中電灯を持った担当教員による避難誘導、煙中体験を実施した。

11月15日(月)と12月6日(月)と1月24日(予定)の3回 避難所設置を想定した対人スキルトレーニングを実施

災害時、学校が避難場所となった時を想定して、地域住民の方々と意思疎通ができるように、複数回にわたって、地域の方々との触れあいや意見交換をする場を設定した。テーマは、「SDGs(特に地球温暖化について)」とした。

12月 指定避難所の開設、避難所運営訓練は、新型コロナウイルス感染症対策のため実施しなかった。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

「自助・共助・公助 + N助(ネットワークヘルプ)」を9月研修会で学び、昨年までは火災避難訓練だけだったが、定時制高校の特性、由良川沿いにある校舎の立地等、実際に起こりうる多数の災害を想定し、また地域住民を巻き込んだ減災教育の実施ができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

従来の避難訓練実施での防災教育で終わるのでなく、持続可能な社会の実現を目指すSDGsと減災教育を結びつける取組を実施した。特に生徒一人ひとりが気候変動による災害に対する適応策を身につけるため、地域の温暖化防止活動推進員の方々から、地域の気候変動、気候災害を学びつつ、同じ顔ぶれの方々と複数回の接触をすることにより、地域の方々と顔見知りとなり、交流を深めておくことができた。これは、本校で指定避難場所の開設が必要となったときに、生徒と地域の方々と力を合わせて、「避難所運営をする基礎作り」となった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

SDGs(特に地球温暖化)の学びから、様々な災害が想定できることを知り、その適応策と減災教育を結びつける取組を実施した。生徒たちは、現在の地球環境を知識として知り、災害を想定する力を身につけることができた。また、「自助・共助・公助 + N助(ネットワークヘルプ)」の精神を大事にし、地域の方々と力を合わせて、減災に向かえることを理解した。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

地域の地球温暖化防止活動推進員から話を聞くまで知らなかった地域の気候災害について、改めて危機感を覚えた。また、これまでに経験したことがないようないろいろな被災を想定することができるようになった。また、不意のブラックアウトを想定して、夜間定時制教員は移動時に懐中電灯を持参するようになった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校の取組をできるだけ広報するようにした。広報により、本校の防災意識や被災時の対応が綾部市民に広く浸透し、地域住民が被災したとき、また避難所生活に対する安心感が生まれた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

当初計画していた避難所の開設訓練は、コロナ禍において断念せざるを得なかった。また、避難所での必要物品の整備は十分とはいえない状況にあるので、次年度についても地域の方々と「共につくる避難所作り」に取り組んでいく必要があると考える。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



9月24日(金) ブラックアウトを想定した避難訓練を実施(ランタン、懐中電灯で生徒誘導)



9月24日(金) ブラックアウトを想定した
避難訓練を実施
(煙中体験は、ブラックアウトを想定したもの)



11月15日(月) 避難所運営がスムーズにできるように、地域の方々とコミュニケーショントレーニングを実施した。

学校名	京都市立京都工学院高等学校
担当教員名	松井 享司

活動のテーマ	防災工学 —セルフサポート・コミュニティサポート・パブリックサポート—
主な教科領域等	教科領域（工業科（まちづくり分野都市デザイン領域））
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 3 学年 28人）（複数可）
活動に携わった教員数	4 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	10 人 【保護者・地域住民・その他（京都府、建設会社）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 6 月 4 日 ～ 西暦 2022 年 3 月 12 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

京都市では阪神・淡路大震災の教訓として、大規模災害時に市民、事業所、地域、行政機関がそれぞれの役割をセルフサポート（自助）、コミュニティサポート（共助）、パブリックサポート（公助）を明らかにし、相互の信頼関係に基づく協働による取組みを推進するべく「京都市地域防災計画」が策定されている。これを受け、本校でも自然災害についての基礎的な知識を習得するとともに、工学的な視点を踏まえた防災技術の習得する学習を進めることが求められる。そこで、本学習では本校が地域の避難所であることから、地域の環境や人々、そして訪れる国内外の観光客が安全に避難できるマップや避難標識等、安全で愛されるまちづくりを提案することをねらいとする。そのために自然災害の知見を広め、学術的な視点での交流も合わせて実施し、地域を核に社会で貢献・活躍できる高校生を育成したい。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

フェーズ①【知る・調べる】6/4～7/16まで計5回の授業（1回2時間）で実施

・自然災害のメカニズムについて学ぶために、チームで実験装置などエキスパート活動を行う。

→「街中で起こりうる自然災害のメカニズムを調査せよ」をテーマに2名以上6名以内でチームを組み、下記の項目から選択しメカニズムを実験装置とポスターを使って10分程度で発表を行った。

（1）地震[津波][液状化]（2）水害[バヒング]（3）風災害（4）土砂災害（5）火山災害、計6チーム

フェーズ②【計画する】9/3～9/24まで計3回の授業（1回2時間）で実施 ※休校期間あり

・DIGを用いて、地域の特性を地形などから学ぶ。

→各種ハザードマップ（地震編、活断層、土砂災害地区等）や地理的条件（山の尾根谷、河川等）から学校周辺地域の災害特性を把握し、危険リスクと安全ゾーンを地図上で表記した。4名程度7チームに分かれ、ワールドカフェ方式で地域の方（自主防災会会長）と情報交流を行った。

フェーズ③【参加する】10/1～12/17まで計9回の授業（1回2時間）で実施 ※休校期間あり

・地域連携として「深草学区」地域のフィールド調査→課題抽出→分類分析→具体的解決案→具現化する。

→「深草学区地域に役立つ防災提案集の作成」をテーマに、まず個人で提案したい防災グッズ等を企画書に書いて提出する。次に、そこに書かれた項目を避難用器具、避難所グッズ、避難経路の3つに分類し、計5チームに振り分けた。チームのアプローチテーマを決定し、地域の方の前で10分程度の発表を行った。

（1）避難用器具（2）防災マップ（3）かまどベンチ（4）浄水器具（5）簡易テーブル

フェーズ④【評価する】1/14～1/21まで計2回の授業（1回2時間）で実施

・発表や自己評価を通じて、チームの提案の評価を振り返る。また、提案集にまとめる。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9月の研修ではたくさんの学びがあった。その中でコーディネーターの及川先生から「防災に関する学習は学習者が主体的でなければならない。災害時には自己決定の連続であって行動志向がとても重要である。」というお話はとても印象に残っている。授業にそのための仕掛けづくりにいくつか挑戦させていただいた。ポスター発表や成果物のプレゼン等、また地域の方をお招きして交流する機会など積極的に作った。また、成果物に関しては地元の行政と建設会社に協力を得て「かまどベンチ制作」の技術指導を行っていただき、図面の見方や作業準備、積算業務など助成金のおかげで材料費が賄え大変助かった。ただ、コロナ禍の影響で行動が制限され交流を取止めたことも多く、次年度へ引き継ぐ予定でいる。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の観点から

今回の活動では地域連携を軸に様々なイベントが用意できた。一番は「深草学区総合防災訓練」への参加である。避難所運営訓練だけでなく、生徒からの防災提案をすることで地域との結びつきを作り、他人事から自分事へ意識を促し主体的に活動できることがねらいであった。また、大学や行政、企業の方とも連携を図り地域の災害について一体となって考えられることは備災につながることも考えた。しかし、コロナウイルス拡大による影響で延期・中止となりその対応で大きく学習内容を変更した。イベント型から教科型へ、身につけたい力へ学習内容をシフトチェンジが必要と強く感じた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

身につけさせたい力一覧 (獲得知と普通知)	フェーズ①アンケート集計				フェーズ③アンケート集計				増減表(フェーズ①と③)			
	とてもいい	ある程度いい	あまりいい	全くいい	とてもいい	ある程度いい	あまりいい	全くいい	とてもいい	ある程度いい	あまりいい	全くいい
イメージする力	17	10	1	0	16	11	1	0	-1	1	0	0
思考力	16	10	2	0	15	11	2	0	-1	1	0	0
コミュニケーション力	14	9	5	0	13	13	2	0	-1	4	-3	0
自己決定力	11	14	3	0	20	7	1	0	9	-7	-2	0
計画力	8	16	4	0	15	11	2	0	7	-5	-2	0
計画力	8	15	5	0	15	11	2	0	7	-4	-3	0
実行力	14	11	3	0	14	12	2	0	0	1	-1	0
情報スキル	15	9	4	0	12	11	5	0	-3	2	1	0
情報を見極める力	17	10	1	0	12	14	2	0	-5	4	1	0
表現力	14	8	6	0	18	8	2	0	4	0	-4	0
表現力	7	19	2	0	13	15	0	0	6	-4	-2	0
プレゼンテーション力	12	13	3	0	14	14	0	0	2	1	-3	0
状況判断力	14	14	0	0	16	11	1	0	2	-3	1	0
他者から学ぶ力	16	11	1	0	17	11	0	0	1	0	-1	0
自己評価												

フェーズ①と③の学習はエキスパート活動としてチームで取組んだ。右表はその活動終了後のアンケート結果を比較したデータである。いずれも活動前と後では多くの力を身につけられたと実感している様子である。また、①と③の比較では③の方が計画力や表現力が身についたと答えている。それは、地域との交流を行ったことや自ら企画書を提出させテーマを決められているので自主的な活動ができたものと考えられる。ただし、「情報の取捨選択力」においてはフェーズ①の方が高く、模造紙の作成等が伝えたいことを要約することで思考を深められたと考察する。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の観点から

地域の方については、地元自主防災会会長をはじめ快く交流いただけた。生徒の発表にも大変興味を持っていただき、来年度に向けて様々な交流が期待できる。一方で、学校に対し過度の期待も時折あったため、生徒発信の提案に協力いただくよう心掛けた。また、関係機関として京都府職員、地元建設会社からも提案作成にお手伝いいただき、双方が良い緊張感を保ちながら学習を進められた。教員連携については、事前打ち合わせができぬまま学習に取り組む場面もあり、生徒の活動を把握しきれない点がいくつかあったため次年度以降は整理していきたい。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

一番工夫したことは、学習が学校内だけに留まらず地域や交流した方々の外を意識して進められたことである。まだまだ粗削りな点は多いが、誰かにプレゼントする気持ちで学習したことで主体性を意識させることができたことは従来から大きく発展できたのではないかと考える。特に、フェーズ③では自分たちの案(計画)がチームと話し合いビルドアップし制作(実行)を進め、限られた時間でトライ&エラーを繰り返し(評価)PDCAサイクルがどのチームでも行えたことはとても良かったと感じている。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

学習環境としては、連携する方々、生徒たちはとても協力的で想像以上の取り組み成果が得られたように感じている。本校の特色である工学としての実学を学びながら、貢献するという視点で活動できたことは大きい。ただし、コロナウイルスの影響で様々な行事が中止や延期になったことが残念である。特に、11/21に行われる「深草学区総合防災訓練」で避難所運営訓練(情報広報や物資づくり等)に参加し、さらに本校の防災提案のブース発表や立命館大学と連携した防災マップ制作も進めていたが一旦延期となり、今年に入り3/12の実施となったが最終中止する決定がなされた。さらに、地元の小学校内に地域から「かまどベンチ」2台ほど制作の依頼を受けているが、現在打合せ段階である。このように、イベント企画ありきの学習を軸に置いたことでその対応に追われた。今後は、他教科との横のつながりを意識して育てたい力を軸に柔軟に活動を進められることが必要と感じた。次年度のカリキュラム開発に繋げていきたい。

学校名	大阪府立 緑風冠高等学校
担当教員名	榎原 佳江

活動のテーマ	自分たちの地域を考える 過去から未来を学ぶ防災
主な教科領域等	教科領域 (地理B)
アプローチ	※該当するものに○をつけてください (複数可) <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 () 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="radio"/> 学校間・地域間交流 () 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 () カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	(2 学年 127 人) (複数可)
活動に携わった教員数	3 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	5 人 【保護者・地域住民・その他 (学校事務室の方)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	西暦 2021 年 4 月 末 日 ~ 西暦 2022 年 3 月 末 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください (複数可)。 <input type="radio"/> 地震 () 津波 () 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 () その他 ()

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

災害が起きた時に、先生や大人の指示を待つのではなく、生徒自身が自ら考え行動するための知識や経験知を高め、日頃からその解決策を見出せるように、防災・減災に対する意識を向上させたい

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール (※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい)

- ・ 1 学期 (5~6 月) 講義
災害の歴史、地震や津波のメカニズム、東日本大震災からの復興について
- ・ 9 月下旬 校内フィールドワーク・見て歩き
チームで校内を探索し、防災に関わる設備や危険箇所を見つけ、みんなでシェア
- ・ 10 月中旬 校外学習 大阪市立阿倍野防災センター「あべのタスカル」見学
体験型防災学習施設で震度 7 体験など
- ・ 10 月下旬 校外フィールドワーク・見て歩き
チームごとに徒歩か自転車で防災に関わる標識や設備を訪れ、みんなに発表
- ・ 11 月初旬 校内の防災備蓄庫を点検・非常食を試食
学校備蓄品のアレルギー対応やハラル食対応について言及
- ・ 12 月 各自が非常持ち出し袋を作成し、中身や重さを検証
持出袋の中身と避難時の服装を写真に撮ってきて、みんなでシェア
- ・ 1~2 月 防災ワークショップ
もしもを想定して行動を考えてみる、避難所での選択肢など
- ・ 2 月初旬 防災コラボ授業【感染拡大のため中止】
- ・ 3 月中旬 防災イベント企画【感染拡大のため中止】

学習してきたことを外部に向けて発表する予定であったが、年明け以降は感染拡大・休校が相次ぎ中止となったため、次年度に先送り予定

3) 9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで (助成金を受ける前) の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・ 体験型を重視し、当事者性を持てるように活動内容を変更
講義や動画だけでなく、実際に足を運んだり、自分たちで撮影してきた写真を用いて発表したりした
- ・ 助成金のおかげで、できる幅が広がった点
防災ワークショップの実施や、本物の防災グッズを提示できたり、実際に試食できたりした

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

当初、実践したいと計画していた、気仙沼現地の学校とのオンライン交流や、本プログラムに参加している他校との授業交流が一切できなかった。また、実際に現地を視察できていないため、私がどれほど言葉に思いをのせて話せたのか不安である。本プログラムの醍醐味である、教員自身の私が先ず学び、それを生徒へ還元するという部分が不十分であった。

一方なるべく生徒自身が体験して学べるようなプログラム構成にした。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

普段の生活から、防災設備が身に入るようになったり、災害時における意識の改革は進んだように感じる。直接、そう私に伝えてくれる生徒もいたり、考査の感想にも書いてくれる生徒が少なくなかった。また、地理を選択していない生徒や自分の家族などにも、習ったことを広めてくれている。予測不能な事態に備えることも大事だが、日頃からの意識を向上していく力が身についた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

校内を点検する際に、他の授業に生徒が入り込んで交流したり、職員室や事務室、保健室などで先生方から「何をしているの?」と質問され、一生懸命応えようとする生徒は、まさに教員に対して教えるという構図になり新鮮で良かった。

校外フィールドワークでは地域の方から学ぶ機会を持ってもらえたことで、地域で防災という学びになった。1年の学びの総まとめとして行う予定だったコラボ授業や防災イベントが中止となり、地域の方をうまく巻き込めなかったのが残念だった。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・体験型を重視し、当事者性を持てるように工夫した
- ・教員から教わるという一方方向ではなく、こういう時はどうするか?というワークショップをたくさん重ね、クラスメイトと意見交流する中で、様々な選択肢があることを理解できるように意識した
- ・地理Bという性質上、国際理解や多文化共生という観点でも防災について学習した

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

感染拡大で、急遽の学校閉鎖や休校になってしまい、計画が大きく崩れることもあった。

今年取り組みを学校全体で共有し、来年度以降も継続して取り組んでいきたい。

さらに次年度以降はもっと授業を公開したり、ゲストを招くなど、オープンにやっていきたい。

学校名	兵庫県立和田山特別支援学校
担当教員名	柳本 真一

活動のテーマ	コロナ禍における減災教育や学校防災体制の充実
主な教科領域等	教科領域（特別活動・生活単元学習・作業学習・自立活動・家庭科・道徳等）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（小学部 14 人 中学部 13 人 高等部 24 人 ）（複数可）
活動に携わった教員数	43 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	18 人 【保護者・地域住民・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021 年 4 月 1 日 ～ 西暦 2022 年 3 月 23 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（新型コロナウイルス感染症・火災）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ア 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を行いながら、児童生徒が各教科や体験活動等をとおして、防災・減災の意識高揚を図るとともに、災害から自らの命を守るため主体的に行動する力を育成する。
- イ 教科等横断的な防災教育を行い、障害のある児童生徒が卒業後の自立と社会参加に向けて、課題を見出し解決しようとする態度を身に着けさせたり、自己有用感を感じ取らせたりするなど自己有用感を感じ取らせたりするなど、児童生徒の自立心を育む。
- ウ PTA 活動やコミュニティ・スクールにかかる活動をとおして、家庭・地域等との連携・協働体制の充実を図り児童生徒が人や社会と関わる力を育成する。
- エ コロナ禍であることを踏まえ、心のケアに関する指導の充実を図る。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい。）

○令和 3 年度の本校防災教育の柱

ア 実践的・体験的な行事を中心とした防災教育

（ア）防災学習（6 月）

- ・「教室の危険を考えよう」避難訓練を前に、教室や避難経路等の危険を児童生徒が事前に考える。
- ・「避難訓練」 コロナ禍のため緊急地震速報による退避行動のみで終了
※本校は児童生徒・職員の点呼のみ。校長講話など実施しない。
- ・非常食体験 備蓄している食料などを食べる
パックご飯、佃煮、ウインナー、レトルト根菜汁、バナナ

（イ）緊急地震速報ショート訓練（5・9・11・3 月）

北但馬地震、防災の日、津波防災の日、東日本大震災 緊急地震速報を聞いて退避行動

（ウ）高等部修学旅行（11 月）

高等部 3 年生 「野島断層保存 北淡震災記念公園」の見学

（エ）防災体験プログラム（1 月）

※昨年度は実施できなかった。仮に緊急事態宣言が出ても実施できるよう計画

①第一部 防災体験プログラム

- ・ 11 の体験コーナーと 3 つの展示コーナー
煙体験、VR コーナー、天井板、ジャッキアップ、心のケア、心肺蘇生、水消火器
アウトドア防災、福祉避難所、トイレ、廃油キャンドル、QR コードによる防災クイズ
スタンプラリー

②第二部 炊き出し体験

- ・高等部生徒が考案したメニュー。材料の一部を保護者が収穫
ごはん、具だくさんシチュー、切り干し大根とツナのサラダ

③第三部 防災講演会 ※対象 職員、保護者、オンライン申込者

- ・「新制度から考える福祉的避難」～特別支援学校と地域が協働する福祉防災～
講師 (一社) 福祉防災コミュニティ協会 上級コーチ、防災士 湯井恵美子 氏

<ウイズコロナを踏まえ、行った工夫>

従 来	今 年 度
体育館を中心に密になって実施	会場を特別教室等に分散して実施
同じ時間に一斉に実施	小中高と3つの学部に分け、時間を分散して実施
ブースの設置者はNPO、企業、団体など保護者は手伝い程度	ブースは保護者と教員が協働・保護者が主体的に運営 ※保護者も2週間前から健康観察・職員は毎日
地域にも開放し、300名程度が来校	物品等を借用し、関係を切らない。地域開放は断念。
午後の研修を地域(住民、行政、団体、学校、福祉関係者など)に開放し、50名程度が参加	講演会とし、講演会を地域(行政、社協、福祉施設、学校)や全国に参加を呼びかけYoutubeで配信。 校内外から参加者オンライン310名 会場17名

(オ) 阪神淡路大震災にかかる黙祷(1月17日)

児童生徒の実態に応じた講話と黙祷など

イ 教科等横断的な防災教育・・・持続可能な防災教育のモデルづくり・人材育成

(ア) 家庭科 (9月～3月)

①卒業後の自立生活に向けた調理についての学習

- ・五大栄養素について
- ・献立の作り方

②管理栄養士・防災士今泉マユ子氏による出前授業(11月)

- ・「今から始めよう!災害時の備え」
- ・パッキングの実演と実習
- ・さくらFM(兵庫県西宮市)の「防災番組 いつもおそばに」で紹介
- ・(2022)『栄養と料理3月号』女子栄養大学出版部に掲載

③防災体験プログラムの当日に出す炊き出しメニューの考案(12月)

(イ) 赤ちゃん先生(道徳・性教育)(12月)

- ・命の大切さ、命の奇跡、家族、自己肯定感や自己有用感を高める
※2020年の防災体験プログラムへの参加をきっかけに実現

ウ コミュニティ・スクールを活用した防災教育(生活単元学習・道徳)

(ア) コミュニティ・スクール

①はるかのかのひまわりの栽培 ※阪神淡路大震災由来のひまわり

- ・埼玉県立日高特別支援学校より分けていただく。(5月)
- ・種まき ※作業学習等 (6月)

・PTAのベルマーク集めと連動

※配布するだけでなく袋にベルマークを入れていただき回収することで双方向性

②袋詰作業・回収BOXの地域への設置

- ・収穫・乾燥・仕分け(10月)
- ・地域に配布 (11月)

(イ) PTA活動 ※保護者と連携

①ベルマーク集め (6月～)

- ・コロナ禍でも取り組みやすいことから本年度から開始

②全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会全国大会で発表

- ・大分で全国大会が行われた(コロナ禍のためオンライン開催)。本校の防災の取組を発表

③こころの健康講座 (10月)

- ・コロナで児童生徒、保護者、職員もストレスがあるためPTA事業として実施
- ・兵庫県教育委員会も災害時だけでなくコロナを踏まえ心のケアを推進
- ・音楽療法士・ラフターヨガインバサダー 梅谷浩子氏を招聘
午前 児童生徒に音楽療法と笑いヨガ 午後 保護者および職員に笑いヨガと心のケア演習

④ねぎ交流 (1月)

- ・特別支援学校においては卒業後の生活を見据えると保護者どうしのつながりは重要である。コロナにより保護者のつながりをつくるための交流会を持ちにくかったため、外でできる PTA 事業を計画。特産品の岩津ねぎを収穫し、防災体験プログラムの炊き出しの材料として活用

⑤防災体験プログラム (1月)

- ・従来より保護者も参画してきたが、PTA 役員を中心に当日の各ブースの運営の主体を担う。保護者ボランティアも実施日 2 週間前より健康観察を入念に行った。
- ・災害時の避難や福祉避難所の状況を湯井氏による講演で確認し、課題意識を持った。

⑥避難所についての行政への陳情 (2月)

- ・災害時要援護者の福祉避難所が一次避難所として開設されるしくみが整えられていない。令和3年の法改正で行政の努力義務化されたことを踏まえ、福祉避難所の一次避難所としての開設や通常の避難所に障害者の福祉避難スペースの設置と個別避難計画の作成を陳情。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで (助成金を受ける前) の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

本校に在籍する子どもたちの全員が生涯にわたって「災害時要援護者」として生きていく。本校を卒業後の自立生活も含めて生涯にわたって生きていく「生きぬく力」の基礎を学校で身につけていく必要がある。研修の中で、「育成すべき子どもたちの資質・能力と減災教育で育む資質・能力は整合性がある」という言葉に大いに勇気づけられた。減災教育を切り口に考えたことや身につけた力は、他の場面でも有用であることが多く、「深い学び」にも繋がるように感じた。自分の頭で考え、自分の力で実践できたり、他のことに転用できるように感じたからである。本校では「子どもたちが様々な自然災害から自らの命を守るため、正しい知識や技能を身につけ、主体的に行動する力を判断し、力を育成する」ということを大切にしている。災害を「生きぬく」ために必要な力を考えたときに、その力は生涯にわたって「生きぬく力」と何ら矛盾しない。生きていく中で直面する様々な困難や課題を自分で解決したり、他者の支援を得て解決するという点では、障害のある子どもも、ない子どもも同様である。障害の有無に関わらず、教育により、卒業後に向けて、当事者である子どもたちに力をつけていくのは当然のことである。しかし、障害のある子どもたちには支援が必要である。

一方で、彼らを支える社会の脆弱性にも目を向け、十分ではない現状を変えていく必要があると考えた。2014年に我が国は国際条約である「障害者権利条約」を批准した。これまでは「障害」は本人に起因するもので「心身の構造や機能に何らかの不自由があること」を「障害」と捉えていた。(医学モデル) この定義が変わり、「障害」は社会がつくり出すもので、社会が作り出した障壁によって、この人の活動が制限され、社会参加が制約を受けているという状況が「障害」とされた。(社会モデル) 適切な支援があれば「障害」はなくなるということになる。

障害のある子どもたちが、この変化の激しい社会を「生きぬく力」を考えると、子どもたちの力を高めると同時に、社会モデルにおける「障害」、つまり「社会の脆弱性」を緩和していく取組も必要であると考えた。教育は「まちづくり」でもあり、子どもたちが暮らしやすい世の中にしていくのは、大人の責任であると考えた。人に寛容な地域にし、生涯にわたって安心して暮らせる「まち」にしていくために、地域に障害の理解啓発をしたり、子どもたちの前に立ちはだかる課題や社会の脆弱性について発信するなど、学校としてできることを積極的に行いたいと考えた。

コロナ禍になり、政府によるギガスクール構想が進展を見せ、本校においても ICT 機器の活用が進んだ。子どもたちの ICT への関心は高く、助成金を頂いたことで、最新の VR 機器による災害の体験をさせることができた。災害の経験がなく、災害の映像等見たことのない子どもが多いため、水害や地震、火災の VR 映像を見ることで災害のイメージを持つことができ、防災体験プログラムの他のブースでもイメージを持ちやすくなった。

また、防災体験プログラムの炊き出しについても、教科等横断的な視点で行った家庭科の授業の延長線上に置き、高等部生徒が考えたメニューを提供することに役立った。子どもたちが皆に食べてもらうということを楽しみに大きな励みになった。また、PTA の活動ともコラボレーションすることができ、保護者の交流やボランティア活動も創出することができた。

防災体験プログラムでは、福祉防災上級コーチの湯井氏を招聘することで、子どもたちや保護者に福祉避難所での課題などを伝えることができた。さらには講演会では当日参加した保護者はリアルで参加し、特別支援学校や保護者や地域が取り組むべき課題について学ぶことができた。また、オンラインを活用することで地域は元より、行政、社協、団体、医療、福

社、特別支援学校、大学、防災士など幅広い方々へ、最新の福祉防災に関する知見を発信できたことは大変意義深い。
また、コロナ禍においてどのように地域とつながるかが大きな課題であったところに、兵庫県教育委員会よりコミュニティスクールに取り組むミッションが課せられた。助成金を頂いたことで、防災とコミュニティ・スクールをリンクさせた取組ができ、大変取り組みやすくなった。次年度への足掛かりとなった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の観点から

本校では、地域と連携した減災教育の実践を展開し続けてきたが、昨年度、新型コロナウイルス感染症のため、全てが停滞してしまっただけでなく、基礎疾患を有する子どもたちにとっては大きな驚異で、「ゼロコロナ」を目指す必要があったからである。昨年度は、ゼロコロナを目指すため本校独自のガイドラインを作成し、感染症予防体制の構築に明け暮れていたため、本校の減災教育や地域との繋がりが停滞してしまっただけでなく、このときに得た知見や課題をもとに、本年度のテーマでもある「コロナ禍における減災教育や学校防災体制の充実」をどのように推進するかを考えた。

体験的活動は本校のように幅広い発達段階に対応することから、本校の防災体験プログラムを見直し、コロナ禍でも実施できる工夫をした。時間と場所の分散、保護者の活用である。子どもたちのために何かしたいと考えている保護者が思った以上に多く、コロナ禍により同様に停滞していたPTA活動にも活気を取り戻させた。

また、コロナ禍においては「集まる」ということが否定されるため、学校行事のようなイベント型の減災教育は困難を極める。全国で避難訓練等が見送られたのがその象徴である。本校において、昨年度「防災体験プログラム」が実施できなかったのもそのためである。行事に頼らない減災教育ができるよう、教科等横断的に学ぶことができるモデルケースをつくることを考えた。また、課題であった人材育成にも繋がるため、担当者の転勤などに左右されない持続可能な減災教育ができるようにしていくのに有効であると考えたからである。

②子どもたちにとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- ・6月の防災学習では避難訓練の前に、教室や避難経路の危険をナマズのカードを貼って、その危険からどのように自分の命を守ればよいか、自分の頭で考え、具体的な対策を考えた。その後の避難訓練では改善できるところを改善し、主体的な退避行動を実践することができた。
- ・緊急地震速報ショート訓練は短時間で集まらなくてもできるため、コロナ禍においても有用であった。様々な時間帯に行うため、多様な状況があり、安全はいつも同じではなく、その場に応じた行動が必要であることが分かった。また、繰り返し行うことで、緊急地震速報は「怖い音」ではなく、「生命を守ってくれる音」であることに気がついた子どもがいた。
- ・教科等横断的な減災教育を高等部の家庭科で行った。卒業後の自立生活を考えたときに、自分で栄養バランスの良い食事が作れるようになることは大切なことである。家庭科教諭による授業と管理栄養士今泉マユ子氏の出前授業が効果的に結びつき、調理が簡単で楽しいものであることを体感して理解し、それまで全く家庭で調理しなかった生徒が意欲を示したり、家庭で調理をしたり、家族に作り方を教えるという行動変容につながった。また、簡単に作れるもの、家にあるものでも災害時でも調理ができ、「いつも」が「もしも」と隣合わせであることに気づいた。給食や防災体験プログラムで自分たちが考案した献立が再現され、先生や保護者、友達などに食べてもらい、大変好評であったことから自信をつけるとともに自己有用感にもつながることができた。コロナの状況を見ながら、実際に調理がしたいという意欲も示している。

修学旅行で北淡震災記念公園を訪れることで、災害への理解も深まり、災害が他人事ではないということも理解することができた。

- ・「はるかひまわり」を栽培し、地域へ配るという取組では道徳の学習等をおして、その由来を知るとともに、なぜ地域にその種を配るのかを知り、「そんなに大切なひまわりなら、全力で協力したい」と、とても意欲的に取り組む児童生徒がいた。
- ・「赤ちゃん先生」では「命の大切さ、命の奇跡、家族、自己肯定感や自己有用感」を学んだ。「命の大切さがわかりました」と多くの子どもが話す中、「命を大切にしようと思いました」と一歩進んだ感想を述べる生徒がいた。
- ・防災体験プログラムでは、様々なテーマのブースで楽しみながら防災について学ぶことができた。ブース担当者が体験させるだけでなく、「もし〇〇になったらどうする?」「こういったときはどんな行動をする?」と言った声かけをして子どもたちに主体的に考えることを大切にされた。体験にまさる学びはないと言われるように、子どもたちは各ブースで具体的な体験をおして、自分の頭でどうすれば自分の安全を守ることができるか、本当にその行動ができるか、自分では難し

いから誰かに支援を求めたほうがいいのかなどを考えることができた。子どもは大人の言うとおりに、大人がするように「する」。大人に正しいと言われたことは正しいと思いこんでしまう。自分の頭でどうするのが良いか考え、判断していくことの大切さが学べたと考える。

- ・音楽療法士梅谷浩子氏による音楽療法では、音楽の活動をとおして、リラックスする方法を学んだり、笑いヨガのエッセンスから「笑うこと」「笑顔でいること」の大切さを学んだ。このことは心のケアにつながり、セルフケアが自分でできることレジリエンスにも大きく関わってくる。

③教師や保護者、地域、関係機関等（子どもたち以外）の視点から

- ・教科等横断的な減災教育について、家庭科の初任教諭に取組を打診したところ、たいへん前向きであったので、取組を進めた。この教諭が取り組みたいことを大切に、普段の取組や自立に向けての学習が災害時でも役に立つという方向性で、負担感が少なくなるように配慮して取組を行った。管理栄養士の今泉マユ子氏の出前授業でいただいた知見が大変役に立った。とても簡単に調理できることから、災害に備えた調理が自立に向けた障害のある子どもの調理と親和性がかなり高いことがわかった。この家庭科教諭のみならず一緒に授業に参加した教諭の多くにも大きな刺激となり、ここでの学びを活用して他のレシピを生み出し、他の授業で活用することにつながった。五大栄養素を中心にバランスの良い献立づくりをする学習の延長線に、炊き出しの献立を考えたことで負担感なく減災教育にも取り組めることがわかり、若手教員が自信をつけ、本校教員の専門性向上に大きく寄与した。
- ・はるかひまわりの種を配布することとPTAのベルマーク集めをするというコミュニティ・スクールの活動をとおして、地域と繋がる意義を教師が理解し始めた。学校は「地域の中の学校」であるというイメージが持てた。今後、学びや防災においても、地域連携の大切さやメリットを感じてもらえるよう取組を進展させたい。
- ・PTA加入問題から兵庫県内においても、多くの学校がPTAの運営に支障をきたし始めている。本校は3年前に解散の危機を迎えたが、PTAのあり方を見直し、事業内容等見直すことで活性化に成功した。本校の減災教育を切り口に保護者の減災への関心が高まり、保護者の中に防災士資格に挑戦される方が複数名現れた。このような土壌ができたのち、コロナ禍になり活動が停滞してしまった。しかし、コロナ禍だからできる事業に組み直しをすることで活動に繋がりができ、再び活動が活性化し始めた。特に防災体験プログラムにおいては、保護者ボランティアを募って、事業運営の中心となっていた。このことで学校と保護者が協働して、一つの学校行事を実施できたことは保護者にとっても、学校にとっても大きな自信につながった。一体感が生まれたと考えている。保護者の中には自分自身の学びにもなったと前向きな声が出てきた。また、令和3年の防災をめぐる法改正により、災害時要援護者の避難行動や避難所運営について課題意識を持つことができた。このことにより、在住する市町に改善を要求する陳情をし、現状を変えようとする活動に至った。ある市からは教育委員会と協議し、避難所となる学校の福祉避難スペースの改善について検討を進めるとの回答を頂いた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校の学校教育目標は「個々の実態や特性等に応じた指導の充実を図り、社会の一員としてたくましく生きる力を育成して、生命と人権を大切にしたいところ豊かな人づくりをめざす」である。このことを踏まえ、グランドデザイン（※別紙参照）を設定している。この目標を実現するために目指す教職員像として「専門性と資質の向上（人材育成）」、目指す学校像として「安心・安全な学校づくり」「地域に開かれ、保護者とともに歩む学校」、目指す児童生徒像として、学部ごとの発達段階に応じた目標が設定されている。さらに、本年度コミュニティ・スクールというミッションが県教育委員会より降りてきていた。本校の取組はこれらを全て結びつけて行ってきた。

「専門性と資質の向上（人材育成）」においては若手教諭の育成に力を注いだ。子どもたちが一日を過ごすほとんどが授業の時間で、授業改善を図ることは教師の責務である。私は主幹教諭の立場から、初任者の家庭科教諭に協力することで、力をつけてもらいたいと考えた。授業改善に合わせて、教科等横断的に減災教育を推進することで負担感が少なく、年間を通じて無理なく減災教育に取り組めるメリットを感じてもらった。この教諭は、減災教育だけでなく、情報教育など〇〇教育と名のつく他の課題でも同じようにでき、その汎用性について、理解された。この取組を進めるにあたって、思いがけず本年度は著名かつ専門性の高い専門家の協力を得ることができた。専門家の知見に触れたことで、取組の起爆剤となった。教師にも「わかった」「できた」と感じてもらうことで、取組に広がりや生まれることが分かった。減災教育だけでなく、〇〇教育と言われる様々な取り組みにおいて、専門性の高い教員が異動することで、これまで力が入ってきた取組が終息に向かってしまうということがある。それを防ぐには、一人の大きな力ではなく、教員一人ひとりの小さな力で、学校という組織全体で取組が支えられるようにすることで、持続可能で長続きするものになると感じた。今回は初任者に取り組んでもらうことで自信をつけてもらうことができた。語弊がないように付け加えると、初任者だからお願いしたのではなく、専門性向上に強い意欲と熱意を示されたからお願いしたことを申し添えておきたい。

「地域に開かれ、保護者とともに歩む学校」においてはコミュニティ・スクールのミッションと減災教育をつなげて取組

んだ。今回の減災プログラムにも参加されている埼玉県立日高特別支援学校の齋藤朝子教諭とは以前からつながりを持っており、「はるかのひまわり」を分けていただいた。また、日高特別支援学校の取組も参考にさせていただいた。本校ではPTAのベルマーク集めとタイアップさせた。地域と双方向性を持たせるために、種を配布する袋にベルマークを入れてもらい、回収するという活動にした。学校の立地する竹田区の区長様の理解を得ることができ、竹田区に全戸配布するとともに、町内の事業所等に回収箱と追加の種を設置していただいた。既に協力の輪が広がりつつあり、ベルマークが集まり始めた。また、朝来市の民生委員が本校に見学に来られ、趣旨を説明したところ、大いに賛同してもらえ、この活動に協力をしてくれることとなった。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・教科等横断的な減災教育では一つのモデルをつくることができた。次年度の課題としては、防災教育推進委員会として、この事例を取り上げ、学校全体で他教科等に広げることである。これまで学校行事など別に時間をとって行ってきた減災教育を授業等で日常的に展開していくようにしたい。また、他の情報教育など〇〇教育と呼ばれる教育に応用したり、教科等合わせた指導と呼ばれる生活単元学習の見直し等にも活用してもらいたい。
- ・本年度も、新型コロナウイルス感染症のため大規模な避難訓練は実施できなかった。本校は鳥取中部地震を教訓に放送がなくても避難できるよう震度1でも避難するとしている。当地ではめったに地震が起こらないのと子どもたちにもわかりやすいからである。しかし、そもそも震度5未満の小さな揺れでも避難させる必要があるのかという議論もしていきたい。揺れに対して退避行動をしたあとにすべきは、子どもたちを落ち着かせたり、心のケアをすることではないかと考えを新たにしているところである。
- ・コミュニティ・スクールの取組は本年度が初年度であり、今年はいよいよ地域とのつながりが再度持つことができた程度である。次年度はこれを足がかりに、地域での清掃ボランティア活動や協働で農業をする、販売学習を行うなどと言った地域に地域に開かれた学校づくりに邁進したい。本校と交流及び共同学習を行っている県立生野高等学校においては観光について研究している。また、本校の前には天空の城で名高い竹田城跡がある。生野高等学校や朝来市、竹田区住民と協働でこれを活用した観光にも挑戦できると学びや繋がりが深まる。大きな夢ではあるが、これに協働して取り組むことで障害理解や有事の協力体制の構築にも繋がると考える。

学校名	古賀市立花見小学校
担当教員名	萩尾 大輔

活動のテーマ	海岸低地校における地震・津波・風水害からの防災・減災教育
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="checkbox"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（全学年 588人）（複数可）
活動に携わった教員数	47人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	10人 【保護者・地域住民・その他（PTCA）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦2021年9月24日～ 西暦2022年3月11日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（感染症拡大等も含めた災害体験に基づく心的トラウマや社会・生活ストレスからの防災拠点・心の拠点として憩いの場（学校施設）の整備と開放）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

○学校が「防災の知と意識の拠点」となることを目指す。※今年度

小学校の生活科・社会科における防災教育を展開しつつ、PTCAの活動と連動させ、地域と学校の双方向で防災意識をもつ活動の基盤をつくる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【学校】

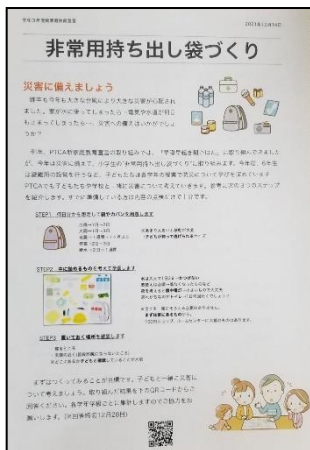
○総合的な学習の時間等における防災教育（学年系統）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
地域の「こと」（仮単元名）	「5年生からもらった地図で、おうちの人と防災の話をしよう」	「校区たんけんて、危険なところを見つけよう」	「白地図に子ども10番の家を書き込もう」	「おすすめ防災グッズリストをつくろう」	「花見っ子防災マップ（ハザードマップ）をプレゼントしよう」	「災害に対する国の役割・人々の役割を考えよう」
時間数	2	2	2	2	4	6
教育課程	生活科	生活科	総合的な学習の時間・社会科（横断）	総合的な学習の時間・社会科（横断）	総合的な学習の時間・社会科（横断）	総合的な学習の時間・社会科（横断）

【PTCA（地域）】

○非常用持ち出し袋づくり

PTCA本会は、11月7日に防災士を招聘して研修し、災害時に困窮するもの・平時に必要な構え、その効果について学んだ。その後、取り組みを運営委員会に諮り、「非常持ち出し袋をつくろう」という取組とともに、児童一人ひとりの災害時用トイレを配付した。（右は全家庭に配布したPTCA作成のチラシ）



○憩いの場の整備・解放

地域住民、中学校、高等学校のボランティア、企業等の協力を得て、地域の防災の拠点をめざす共に、憩いの場「花見っ子ガーデン30」を整備した。造成、植樹、植栽のほとんどを人力で行い、11月13日に完成した。（右は完成時の写真）



3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

防災学習シートの中の「防災教育マトリックス」や「防災学習シート」は、大変役に立った。本校は系統立てた防災学習の初年度なので、これからの広がりや浸透に向けてさらに検討をしていく必要があった。市教委の役割や目標論、単元計画、学校・SDGsマトリックスなどは今後活用していきたい。理論と行動の整理に役だった。

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本年度から、各学年の生活科・社会科と総合的な学習の時間等で、防災学習に取り組んだ。クラブ活動では防災クッキングを行ったり、6年生は福岡県の防災企画課から講師を招聘して、避難所設置と平時の備えについて学ぶなどして教育活動の幅が広がった。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

例えば、3年生では、社会科と総合的な学習の時間を横断し、地域の安全を守る働きについて理解し、思考・判断・表現した。体験的に学ぶことにより防災知識を身につけるとともに、理解力や発信力が高まったと考える。

③ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

防災意識をもつという視点では、教師は実践や研修を通して、少しずつ変容が見られた。しかしながらPTCA一部の関係者にとどまっているのが現状である。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

教育活動とPTCA活動（地域活動）を連動した点であると考え。教育を教育課程内に閉じずに地域や社会に開いていくことが大切であると考え。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

理論と行動の整理をして、分掌を立ち上げ、組織的・体系的に計画したい。コロナ渦同様、あらゆる災害に備え、賢明で自律的な行動が取れる市民を育てる教育の一端を担いたい。次年度は、防災意識の向上を図るとともに、「防災の知と意識の拠点からの発信」をテーマに地域と子どもたちが融合したワークショップの開催や著名な防災士を招聘し講演会を開くなど、人々が集い学び合う実践を行っていきたい。

学校名	大牟田市立倉永小学校
担当教員名	川崎由美子

活動のテーマ	災害に強いまちづくりを目指して～地域と連携した防災教育の充実～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間、社会科）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="radio"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（5年生45人）（複数可）
活動に携わった教員数	13人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	0人 新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置のため実施できず ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	2021年5月1日 ～ 西暦 2022年3月24日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

○自然災害の現状、原因及び被災等について理解を深め、現在及び将来に直面する災害に対して、自らの安全を確保するための的確な思考・判断に基づく適正な意志決定や行動ができるようにする。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 1 「災害に強いまちづくり」パート1 5年：総合的な学習の時間（20時間）・・・1学期実践
 - ①自然災害の現状、原因及び被災について調べ、課題を見つける。（4時間）
 - ②大牟田市防災危機管理室の方に来て頂き、現在の自然災害の状況や倉永校区で起こりえる災害や防災について教えてもらう。校区めぐりを行う。（6時間）
 - ③福岡市防災センターに行き、地震等の体験をする。（総合的な学習の時間3時間、社会科3時間）
 - ④学習したことを生かして、校区の安全アップをつくり、全校児童や保護者・地域へ広げる。（7時間）
- 2 「災害に強いまちづくり」パート2 5年：総合的な学習の時間（15時間）・・・3学期実践
 - ①日常的な備えをするのは、どんなことをしたらよいか考える。（2時間）
 - ②非常用持ち出し袋の中身について考え、本物の非常用持ち出し袋の中身を確認する。その後、なぜそのような道具が必要なのか考える。（2時間）
 - ③福岡県防災出前授業に来て頂き、防災について学ぶ。（3時間）
 - ④防災危機管理室の方に来て頂き、全校児童（保護者・地域）で避難所設営を行う。（4時間）
 - ⑤現在及び将来に直面する災害に対して、自ら安全を確保するための的確な行動の重要性や日常的な備えについてまとめる。（4時間）

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

カリキュラムの組み方を教わり、カリキュラムの見直しを図った。また、3つの思い込み（正常化バイアス、同調性バイアス、愛他行動）を念頭に置いた指導内容を組み、自助、共助、公助に加え、N助についても指導することとした。防災グッズを購入し、実物を手に取って見ることで、低学年の子どもたちも分かりやすく活動する意欲が高まった。

4) 実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の観点から

- ・5年生中心のカリキュラムから全学年へ少し上げたカリキュラムをつくることができた。
- ・知識面だけでなく、体験活動を仕組むことで地域社会への参画意識が高まった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

- ・災害が起こったときにどのような行動をとればよいか自助だけでなく、共助についても考えることができるようになった。
- ・市防災危機管理室や消防署等の話を聞いたことで、自分の周りだけでなく地域や市に視点を広げ、住みよいまちづくりを進めるには今自分たちに何が出来ると考えることができるようになった。

・学校だけでなく、専門家等との関わりで学習したことで、コミュニケーション力や他者と協力する態度、進んで参加する態度等が身についたと考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・各学年に減災・防災カリキュラムを組み込んだことで減災教育についての価値や意義を理解し、実践への意欲が高まった。
- ・児童から学習内容を聞き、防災について家族で話し合ったり、非常用持ち出し袋を考えたりする保護者がいた。
- ・まだ一緒に活動ができていないが、地域のまちづくり協議会と避難所設営を一緒にすることを提案すると、ぜひ一緒にしたいというご意見をいただいた。学校と地域と保護者と一緒に防災について考えていきたいとの回答をいただいた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・防災教育年間指導計画を立て、教科横断的にカリキュラムを作成することができた。
- ・学校・地域・保護者とともに一緒に防災について考えることに少し前進することができた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・いかに地域と一体となって防災教育を進めていくか、今後も連携を推進していく必要がある。
- ・学年の発達段階に応じて、防災学習をどのように進めるか教育指導計画に組み込み、年間計画等を再度見直す必要がある。
- ・新型コロナウイルス感染症防止のため、活動が制限されることが多かったが、地域とともに防災を進めていくことに共通理解が図られ、次年度へ引き継ぎ事項となったことは大きな前進である。
- ・新型コロナウイルス感染症防止を前提に、どのようにしたら活動ができるか、活動できる方向で防災教育計画を立て実践する。

7) その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

（写真・資料の元データは、1月末に提出した実践共有資料でご提供いただいたデータと同じであれば再提出の必要はありません。）



市防災危機管理室の方と新聞紙給水実験（トイレ）の様子



避難所での簡易トイレ組み立て中



災害時の事前・事中・事後についての話し合い



防災センターで消火器訓練

学校名	福岡県大牟田市立宅峰中学校
担当教員名	教頭 原 正和

活動のテーマ	家庭・地域とつながる防災・減災教育
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間、国語科、理科、美術科、技術・家庭科〔家庭分野〕・保健体育科）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="radio"/> 地域連携 <input type="radio"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="radio"/> 専門家の活用 <input type="radio"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="radio"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="radio"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 第1学年 168人・第2学年 158人・第3学年 184名）（複数可）
活動に携わった教員数	<u>14</u> 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	<u>32</u> 人 【保護者・地域住民・ <u>その他</u> （市防災危機管理室・消防本部他）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 <u>2021</u> 年 <u>6</u> 月 <u>1</u> 日 ～ 西暦 <u>2022</u> 年 <u>2</u> 月 <u>28</u> 日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="radio"/> 地震 <input type="radio"/> 津波 <input type="radio"/> 台風 <input type="radio"/> 洪水 <input type="radio"/> 河川氾濫 <input type="radio"/> 土砂 <input type="radio"/> その他（ <input type="checkbox"/> ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

地球温暖化等の影響により、令和2年7月の九州豪雨のような災害が発生する可能性が高まることが予想されるため、災害に対して「自分の身を守る自助力」や「地域で連携する共助力」等を高めておく必要がある。

そこで、様々な災害を自分のこととして捉え、以下の資質能力を身に付けることができるようにする。

- 身近に起きる災害について、防災・減災の観点から主体的に学び進める生徒
- 災害発生前に必要な準備や行動について考え、周囲の人と議論する生徒
- 災害発生時に適切かつ迅速に行動することができる生徒

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

本年度は、3年間を見通した「防災減災教育」プログラム（各学年のカリキュラム）を右図のように計画・作成し、今年度より第1学年を中心に実践することとした。

そのため、第1学年以外については計画（案）のうち、第2学年では家庭科と連携して「⑤防災食（非常食）を作る」、第3学年では「①命の大切さを知ろう～普通救命救急講習～」についての実践を行った。

第1学年	第2学年（案）	第3学年（案）
①避難経路の確認と災害情報の収集方法 【2時間】	①緊急地震速報、気象警報・注意報の意味 【1時間】	①命の大切さを知ろう～普通救命救急講習～ 【4時間】
②避難所の備蓄物質と非常用持ち出し袋 【2時間】	②どう通報する？119番・110番 【1時間】	②災害時の心理状態を知る 【1時間】
③消防署と消防団の活動と簡易担架等の作成 【2時間】	③家族との連絡のとり方～災害伝言ダイヤル・災害用伝言板～ 【1時間】	③初期消火を学ぼう～目指そう、自衛消防隊～ 【3時間】
④避難所運営図上訓練 【2時間】	④こんな時、どうする？自然災害時の図上演習 【2時間】	④ボランティアについて学ぼう 【2時間】
⑤避難所運営実動訓練 【4時間】	⑤防災食（非常食）をつくる（住・食生活との関連から）【家庭・2時間】	⑤防災に関する絵本の読み聞かせ（保育実習との関連から）【家庭・2時間】
⑥地震・津波のしくみ 【理科・1時間】	⑥人と防災未来センター訪問（防災セミナー・講話）【修学旅行・2時間】	

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9月の研修会では、防災減災教育を継続的・体系的に推進していくためのカリキュラムの重要性、専門家や関係機関と連携していくことの意義・重要性を改めて実感することができた。そこで、大牟田市防災危機管理室と連携を図りながらカリキュラム作成を進めるとともに、11月には本プログラムのプログラム・コーディネーターである東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター主幹研究員及川幸彦先生や特任研究員高倉美帆先生の指導助言を仰ぎながら、3年間を通したカリキュラム作成を進めていくとともに、特に今年度は1年生の学習内容を中心に具体的な実践を行うことができた。

これにより、昨年度までは全校一斉の防災総合訓練（避難訓練・初期消火訓練）など決められた避難行動を理解する学習が中心であったが、今年度は生徒だけでなく教師自身も防災・減災に対する知識を習得するとともに、生徒一人ひとりが防災・減災の視点から学校や地域の実態を調べたり、命を守るために自ら考え判断して行動したりすることができる学習へと転換を図ることができた。助成金については、前述した学習活動を展開するにあたり必要となる経費（調査・表現活動、体験活動に伴う備品や消耗品等など）として、有効活用することができた。

4) 実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

本校の「防災・減災教育プログラム」を具体化するに当たって、「自然災害に対する心の持ち方と災害時に備えて適切に判断し行動する力などを身につけよう。」という明確な目的のもと、「学習のステップ」として「自助」「共助」「公助」「N助」と、「学習のサイクル」として「知識・備え」「判断・行動」「評価・発信」の二つの側面から、各学年の各教科・領域と系統性を持たせた具体的かつ体系的な学習活動を位置付けることができた。これにより、生徒が課題意識や目的意識を持って調べたり表現したりして主体的に学ぶカリキュラムへと改善することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本校の生徒には、令和2年7月豪雨時には帰宅困難となり学校で一夜を過ごした者や浸水等により被災した者もいる。そのため、防災・減災学習は現実的かつ切実感のある学習課題であることから、生徒自身も課題意識を持って学習に取り組むことができた。また、防災・減災の視点から身近な場所や地域（施設や通学路など）の特徴を捉えることで、災害発生時にどのような行動を取ればよいかを考えることができるようになった。具体的には、「屋外で地震が発生した場合には周りに建物等がない広い場所に避難すること」「大雨に遭遇した場合には高い場所に避難すること」という災害発生時における基本的な行動原則や「協力や助け合い」、「高齢者や障がい者等への支援」の必要性について理解することができた。

これらのことから、「未来像を予測して考える力」、「多面的・総合的に考える力」、「コミュニケーションを行う力」、「他者と協力する態度」、「進んで参加する態度」など防災・減災教育で求められる能力・態度等が身に付いたと考える。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教師は、生徒の学ぶ姿（学習に向かう様態や学習プリント等の成果物）から学習活動が充実したという手応えを感じている。また、関係機関（大牟田市防災危機管理室、大牟田市消防本部、大牟田市消防団等）の支援・協力を得ながら学習プログラムを作成したことで、防災・減災教育の意義・価値に対する教師一人ひとりの理解度も高まり、次年度以降も本学習プログラム実施に対する意欲も向上している。

保護者や地域住民は、学校だよりや学年だより、新聞報道等を通して、本校が取り組む「防災・減災教育」を知るとともに、次年度は地域コミュニティ（小学校区まちづくり協議会等）と連携した取組についても計画が進み始めている。大牟田市防災危機管理室も本校の実践を通して、家庭（保護者）・地域とつながる「防災・減災教育」の具体的実践をモデルケースとして、全市的に広げていきたいという意向を持っている。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

避難所運営訓練（図上訓練）では、宅峰中学校の図面（校舎、体育館）を使い、様々な事情を持った避難者（高齢者や障がい者等）をどのように避難所（宅峰中）に受入れるか。その際に、どのような配慮が必要なのかについて生徒自身に考えさせた。その手だてとして、避難者の状態（高齢者や障がい者等）を記載した紙で班に付与し、宅峰中学校の図面上に受け入れ先を記載させた。また、避難所運営訓練（実働訓練）では、災害発生時の避難所開設直後を想定し、実際に避難者の受入から避難所運営について考えさせるために、生徒を避難所運営役と避難者役の2班に分け、2校時毎に交替させながら、運営役は避難者に寄り添った受入の体制・運営する立場から、避難者役は高齢者や発熱者等になり避難所へ避難するという立場から非常時の対応方法について学習する予定だったが、新型コロナウイルス感染症が急激に拡大したことから、実施時期を来年度5月に延期した。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

本年度の実践は、起こり得る災害を想定し、中学生として日頃どう備え、災害発生時にどう行動するか。そして災害発生時に中学生だけで避難所をどのように運営していくのかという具体的なミッションを通して、生徒自らが考え判断し、行動することができる実践となった。

次年度以降は、このカリキュラムを単に引き継ぐのではなく、実践内容を整理し系統性を持たせるとともに、本校の実践を保護者や地域住民に幅広く発信したり、模擬避難訓練等へ参加できる場を設けたりすることで、「防災・減災」の果たす役割・必要性を理解してもらうだけでなく、学校・保護者・地域住民が一体となった持続可能な「防災・減災」の取組にしていく必要があると考える。

7) その他 (※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ (JPEG) もご提供ください。

(写真・資料の元データは、1月末に提出した実践共有資料でご提供いただいたデータと同じであれば再提出の必要はありません。)



本校教職員と市防災危機管理室との事前合同研修



市防災危機管理室職員による防災情報収集の講義



避難所運営訓練 (図上訓練)



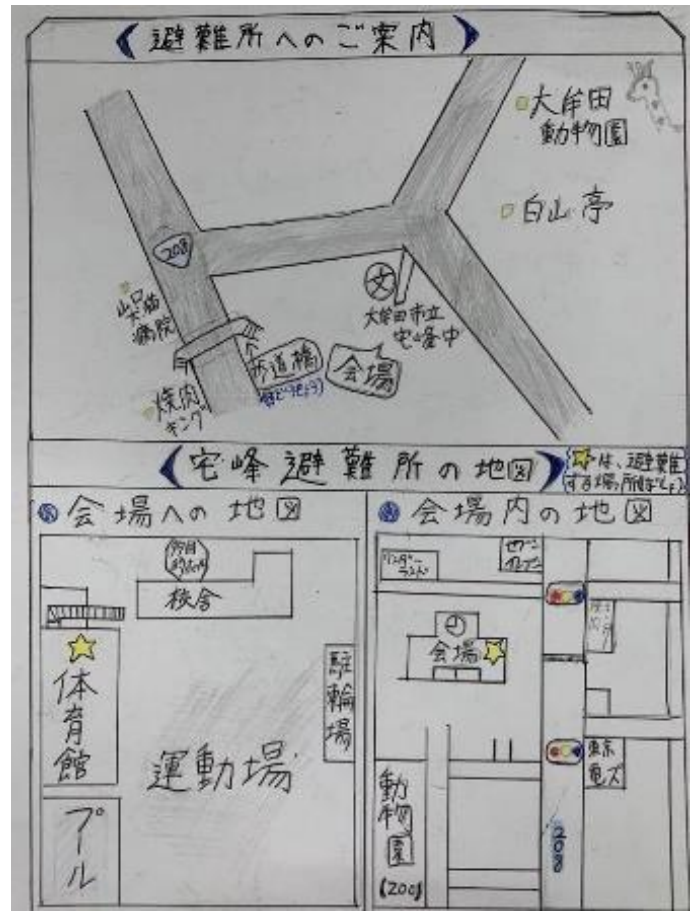
避難所の備蓄物資の確認及び組立



消防署員による応急手当 (固定・止血法) の指導



避難所運営実動訓練にむけたリーフレット作成



避難所実動避難訓練（予定）に向けて作成されたリーフレットの一部分

23 地域 2022年(令和4年)1月13日(木) 毎日新聞

避難所運営学ぶ

大牟田市立宅峰中1年生170人

大雨想定 優先順位など意見交換

大牟田市立宅峰中（幸川和秀校長）の1年生約170人が12日、災害時に避難者が来校した際、案内役を担うための図上避難所運営訓練をした。

登校している平日に学校のレイアウト図を広げ、避難者をどの教室に案内するか考える生徒の姿がみられた。

大雨となり、市が同校（幸川和秀校長）の1年生約170人が12日、災害時に避難者が来校した際、案内役を担うための図上避難所運営訓練をした。

児童は健康な人は体育館へ、足腰の弱い高齢者はエレベーター近くの教室へ、ペットを連れて来た人は別室へとそれぞれの事情に応じた避難場所を定め、図上に記入していった。

青地耕太郎さん(13)は「避難者の状態や要望を聞き、優先順位をつけて判断したい」と話した。市の担当者は「大きな災害時はマンパワーが足りなくなる。安全を確保してもらった上で、中高生も補助、手伝いをしてほしい」と話している。

講師役の市防災危機管理室の職員は「避難者は足腰が悪い、耳が遠い、持病がある、とそれぞれ事情を抱えている」と助言した。生徒は健康な人は体育館へ、足腰の弱い高齢者はエレベーター近くの教室へ、ペットを連れて来た人は別室へとそれぞれの事情に応じた避難場所を定め、図上に記入していった。

【降旗英峰】

「はがき随筆」ももの効果がは27年前。常置りの年月を19年5回頂いた後、泣く泣く新潟へ3年前に心を天国へ旅立ち、そんな私に毎

〒830-0018 久留米支局 久留米市通町8-6 太陽生命ビル2階
電話0942-34-2968 FAX38-0080 kurume@mainichi.co.jp
【大牟田通信部】 毎日新聞の電話 0944-85-0135 マイクロコピーは FAX 0944-85-0136 093-521-0668

避難所運営図上訓練の様子を伝える記事（毎日新聞 福岡・筑後版 令和4（2022）年1月13日付）

学校名	三島村立三島片泊学園
担当教員名	大岩根 誉

活動のテーマ	離島における防災教育（暴風・避難・土砂災害・波浪）
主な教科領域等	教科領域（社会・理科・生活・総合的な学習の時間・道徳・学級活動）
アプローチ	地域連携 避難訓練・避難所運営 専門科の活用 体験学習 学校間・地域間交流 教科連携 地域発信 カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	義務教育学校 前期課程 1～6 後期課程 7～9 学年 <u>22</u> 人
活動に携わった教員数	<u>13</u> 人
地域住民・保護者等の人数	<u>40</u> 人 【保護者（14）・地域住民（22）・その他（地区の工事関係企業等（4））】
実践期間	2021年4月16日～2022年3月5日
想定した災害	台風・地震・津波・土砂・その他【港での強風並びに高波による水難事故の防止】

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

鹿児島県本土の南の洋上に小さな三つの島が並んでいる。本校は、その一つである「黒島」の西側の海近くに位置し、海の恩恵を受けながら生活している。鹿児島県は台風の通り道となることが多く、台風による波浪の影響で物資を運ぶ村営船が数日続けて欠航することも多い。また、小さな島のため、大型台風が通過すると台風の進路によっては風を遮るものがなく被害が大きくなることもある。6年前には、家屋を全壊・半壊させるような大きな台風も通過した。当時、被災された方々から、家の中で身の危険を感じ暗闇の中を避難したことや、壁板の損壊で風が入るとあっという間に屋根まで飛ばされたという被害状況を聞いている。昨年度は、当時より大きな規模の台風通過（台風10号：最低気圧910hPa）が予測されたため、初めて児童生徒・保護者・職員の島外避難が実行された。島内には地区役員や消防団関係者、管理職を含めた一部の学校職員が残り、台風通過後の復旧作業にあたった。幸い上陸直前に風が弱まったため被害は予想より少なかった。（片泊地区の役場出張所では、最大瞬間風速56mを記録した後、風速計が壊れていた。）さらに、同じ鹿児島郡の十島村では、令和3年12月9日に震度5強の地震が発生し、島外避難を行っている。また、卒業後は親元を離れ「島立ち」をしていく児童生徒に、桜島をはじめ霧島、硫黄島、口永良部島、諏訪瀬島など火山噴火に対する防災知識及び火山対策や、南海トラフ地震の知識及び地震対策も身に付けていく必要がある。このように離島では、脅威となる台風・地震・火山などの自然災害と、併せて海に対する事故防止教育は最重要事項であり、島民として宿泊を伴う島外避難も想定しながら、地区と連携し防災・減災意識を高めたい。

2) 実践内容・スケジュール・実践の流れ ※【資料1】スケジュール【資料2】実践内容・実践の流れ

本校では、防火防災係・安全指導係を中心に組織した安全指導部が、防災・減災の活動を運営している。職員は主に職員研修や職員活動で、児童生徒は主に教科・総合的な学習の時間・学校行事で取り組んでいる。また、校区内の安全・避難・生活関係については地区・学校推進委員会で情報共有や協力依頼をしている。

- ア 児童生徒の学習活動（教科、学校行事、総合的な学習の時間）
- イ 三島片泊学園安全指導部の活動（年間教育計画、協議、施設・校区の安全点検）
- ウ PTA活動（行事・安全活動への協力）
- エ 地区（地区・学校推進委員会、三島村役場の連絡・要請）
- オ 第8回アクサユネスコ減災教育プログラム関連（協議・計画・準備・活動）

3) 9月の研修会を受けての自校の活動の変更・改善点と、助成金・研修受講前までと今年度の実践で変わった点

※【資料3】文化祭（後期課程生）創作劇「耳をすませば」【資料4】台風減災対策「飛散防止フィルム貼り活動」

ア 9月研修会の学びの中から自校の実践に生かしたこと

【活動名】文化祭（後期課程生）創作劇「耳をすませば」

9月の教員研修を受けて、改めて東日本大震災から学ぶべき事が多くあることに気付いた。そこで、11月の文化祭では、後期課程の生徒が中心となり、前期課程と地区の方々に、自然災害の脅威と、共助・自助・防災減災の意識を高めてもらおうと、東日本大震災を教訓として創作した劇に取り組んだ。

イ 助成金の活用で可能になったこと

【活動名】 台風の減災対策 「窓ガラス飛散防止フィルム貼り活動」

昨年度、大型台風通過前に島民の島外避難が決定すると、慌ただしい中、校舎中の全ての窓ガラスに養生テープを貼り強風対策をした。台風通過後、養生テープを取り除くと校舎中の窓ガラスに粘着部分の跡が残ったので、全ての窓ガラスを掃除しなければならなくなった。そこで、助成金を使い、窓ガラスに飛散防止フィルムを貼っておくことで、台風対策の準備と片付けの時間を少しでも減らせるようにした。

4) 実践の成果

ア 減災（防災）教育・プログラムの改善の視点から

「防災教室」を通して、次のような点が成果としてあった。

- ・遠隔システム活用により、船便・宿泊日程を気にすることなく県の防災研修センターと調整ができた。
- ・4校合同で学習を展開することで、生徒間で意見や感想の交流をすることができた。
- ・専門の方の指導の下、防災グッズ（ビニル袋雨合羽）製作や備えておきたい道具のクイズなどの活動を通して、備えの大切さや防災（減災）意識をもつことの大切さを学べた。
- ・県の防災研修センターの専門の方に質問することで、学びを深めることができた。

【質問の例】災害用伝言ダイヤル171の体験ができる日が少ないのはなぜですか。

【回答】日本公衆電話会に尋ねてみたところ、毎月1日と15日が電話の交換期となっていて、体験利用はその日を利用させてもらっている。もちろん突発的な事態（災害時）はつながるようにしている。

3) 9月の研修会を受けての自校の活動の変更・改善点と、助成金・研修受講前までと今年度の実践で変わった点

※【資料3】文化祭（後期課程生）創作劇「耳をすませば」【資料4】台風減災対策「飛散防止フィルム貼り活動」

ア 9月研修会の学びの中から自校の実践に生かしたこと

【活動名】 文化祭（後期課程生） 創作劇「耳をすませば」

9月の教員研修を受けて、改めて東日本大震災から学ぶべき事が多くあることに気付いた。そこで、11月の文化祭では、後期課程の生徒が中心となり、前期課程と地区の方々に、自然災害の脅威と、共助・自助・防災減災の意識を高めてもらおうと、東日本大震災を教訓として創作した劇に取り組んだ。

イ 助成金の活用で可能になったこと

【活動名】 台風の減災対策 「窓ガラス飛散防止フィルム貼り活動」

昨年度、大型台風通過前に島民の島外避難が決定すると、慌ただしい中、校舎中の全ての窓ガラスに養生テープを貼り強風対策をした。台風通過後、養生テープを取り除くと校舎中の窓ガラスに粘着部分の跡が残ったので、全ての窓ガラスを掃除しなければならなくなった。そこで、助成金を使い、窓ガラスに飛散防止フィルムを貼っておくことで、台風対策の準備と片付けの時間を少しでも減らせるようにした。

4) 実践の成果

ア 減災（防災）教育・プログラムの改善の視点から

「防災教室」を通して、次のような点が成果としてあった。

- ・遠隔システム活用により、船便・宿泊日程を気にすることなく県の防災研修センターと調整ができた。
- ・4校合同で学習を展開することで、生徒間で意見や感想の交流をすることができた。
- ・専門の方の指導の下、防災グッズ（ビニル袋雨合羽）製作や備えておきたい道具のクイズなどの活動を通して、備えの大切さや防災（減災）意識をもつことの大切さを学べた。
- ・県の防災研修センターの専門の方に質問することで、学びを深めることができた。

【質問の例】災害用伝言ダイヤル171の体験ができる日が少ないのはなぜですか。

【回答】日本公衆電話会に尋ねてみたところ、毎月1日と15日が電話の交換期となっていて、体験利用はその日を利用させてもらっている。もちろん突発的な事態（災害時）はつながるようにしている。

イ 児童生徒にとってどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身に付けたか

(ア) 「交流学习 in 硫黄島」「交流学习 in 黒島」を通して、次のような成果があった。

- ・令和3年度は、三島村内の4学園生徒が互いに各島へ移動し宿泊を伴った交流学习を行った。三島片泊学園の後期課程生徒は「交流学习 in 硫黄島」で、硫黄島の生徒から「硫黄岳の噴煙の様子や硫黄島の歴史」を学び、次に「交流学习 in 黒島」で来島した4校の生徒に「黒島流れ」について発表したことで、互いの自然環境や災害について考え、その上で自然と共生していくことの大切さを学ぶことができた。

(イ) 「文化祭 後期課程 創作劇」を通して、次のような成果があった。

- ・生徒たちは、地区民に防災（減災）の大切さを伝えるねらいをもち、一人一人が役を精一杯演じることができた。また、発表しながら、災害によって受け入れがたい事態が発生することも感じることもできた。地区民から「防災の意識が高まった」「命の大切さを実感した」などの感想をいただき成果を実感することができた。
- ・東日本大震災を振り返ることによって、地震と津波について得た自助（訓練の大切さ、判断の大切さ、備えの大切さなど）について認識し、共助（地区のために自分たちにできないかと考えることなど）の気持ちをもちできることを積極的にしようとする態度を養うことができた。

ウ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

(ア) 「地区・学校推進委員会」を通して、次のような成果があった。

- ・港などの海難事故防止のため、普段から声をかけ合うようになった。また、片泊地区から、港に救護用の浮き輪を設置していただいた。

(イ) 「三島片泊学園安全指導部の活動」を通して、次のような成果があった。

- ・通学路の安全点検を行い、台風で壊れていたカーブミラーの修繕依頼をしたところ、三島村役場により修繕をしていただいた。

(ウ) 「地区の避難所となる学校集会室の床改修工事」を通して、次のような成果があった。

- ・昨年度避難所として使用した際は、風が吹き込んで心配しながら夜を明かしたが、補強もできたので避難所として安心して活用することができるようになった。

(エ) 「校舎窓ガラスの飛散防止フィルム貼り活動」を通して、次のような成果があった。

- ・窓ガラスに貼る飛散防止フィルムの準備（助成金の予算範囲内）では、全ての窓ガラス分の準備はできなかった。だが、黒島で工事を請け負っている建設会社に材料の手配や施工の仕方を教えてもらいPTA会員の協力を得て施工するなど、地域内のつながりを意識した活動ができた。今後の台風対策として、準備時間を減らすことができそうである。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

【成果を感じた出来事】を特筆すべき点として1件紹介する。

- ・令和3年10月6日 児童生徒は、全員が学校の集会室で放課後子どもプランの活動「ジャンベ教室」を行っていた。17:13 鹿児島東沖地震が発生（震源地：大隅半島東方 M5.5 震源の深さ：約40km）。職員室では、職員の携帯電話から一斉に警報アラームと「大きな地震に備えてください。」の言葉が響いた。全員が活動や作業を即座に止め、速やかに校庭へ避難することができた。しばらく様子をうかがっていたが、片泊地区は全く揺れを感じなかった。しかし、年間計画や準備した活動ではない中で、速やかに全員が避難したことは、安全指導部が中心となり年間を通して行ってきた様々な学習活動の大きな成果であると実感している。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

【成果を感じた出来事】を特筆すべき点として1件紹介する。

- ・令和3年10月6日 児童生徒は、全員が学校の集会室で放課後子どもプランの活動「ジャンベ教室」を行っていた。17:13 鹿児島東沖地震が発生（震源地：大隅半島東方 M5.5 震源の深さ：約40km）。職員室では、職員の携帯電話から一斉に警報アラームと「大きな地震に備えてください。」の言葉が響いた。全員が活動や作業を即座に止め、速やかに校庭へ避難することができた。しばらく様子をうかがっていたが、片泊地区は全く揺れを感じなかった。しかし、年間計画や準備した活動ではない中で、速やかに全員が避難したことは、安全指導部が中心となり年間を通して行ってきた様々な学習活動の大きな成果であると実感している。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

(ア) 【実践から得られた教訓や課題】

- ・学びは身を守る行動に移されて成果となると言える。今回、地震の警報があり全員で行動できたことは大きな成果であった。今後も繰り返し行っている訓練が形骸化しないよう、反省点を見つけながら一つ一つ丁寧に取り組んでいく。

(イ) 【次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望】

- ・いただいた助成金で台風対策として窓の飛散防止フィルムを貼る活動は、今後の台風前準備や片付けの作業を効率よくさせるよい動きの一つだった。今後も、いざという時の備えや想定外の事態など、安全に気を付けて生活できるよう学習や活動を計画していく。また、島民、村内学園、関係の専門機関とも連携を図り、常に危機意識をもって防災（減災）教育を推進し豊かな自然との共存を目指したい。

7) その他 補足資料

- 【資料1】 2)の年間のスケジュール (令和3年度の三島片泊学園年間スケジュール)
 【資料2】 2)の実践の内容・実践の流れ (【資料1】の中の太字で紹介している活動)
 【資料3】 文化祭(後期課程生)創作劇「耳をすませば」 (9月研修後に計画した取組実践事例)
 【資料4】 台風減災対策「飛散防止フィルム貼り活動」 (助成金を活用した取組実践事例)




【資料1】 2)の年間のスケジュール

	【活動名】	【活動内容】	【備考】	【活動者】				
				児童生徒	安全指導部	PTA	地区	
	児童生徒の学習活動・行事 職員・地区・村の減災活動	地震・津波・台風・土砂水害・海・火山噴火などの自然災害について	※ A~Fの活動は【資料2】で、HIは(3)で紹介	※				
4/15	第1回地区・学校推進委員会	「枕崎少年の船(5/16)」活動への協力依頼			○	○	○	
4/16	地震・津波避難訓練	奄美近海で地震(震度6)及び津波発生を想定	全児童生徒参加	A	○	○		
4/23	三島片泊学園安全部会	校内安全点検、アクサユネスコ減災教育プログラム申込みについて	申請書・予算概要郵送(5/18)		○			
5/30 ~6/1	交流学习 in 硫黄島	硫黄島へ行き、硫黄岳の噴煙の様子を観察し、噴火活動について知る		B	○			
6/15 ~16	交流学习 in 黒島	三島各島から黒島に集合。三島片泊学園から、海難事故「黒島流れ」を発表	後期課程生(7・8・9年)	C	○			
6/17	第2回地区・学校推進委員会	地区へ水難事故防止運動強調期間及び夏季休業中の港での声かけを依頼	港に「救命用浮き輪」設置を希望	D		○		○
7/3	三島片泊学園安全部会	校区安全点検片泊校区通学路安全点検資料作成	カープミラー修繕	E		○		
7/14	着衣水泳	片泊港などでの転落事故時の対処法	第2~9学年		○			
7/15	三島村内4校遠隔合同学習「防災教室」	大雨土砂災害の備えについて遠隔学習を実施(講師:鹿児島県防災研修センター職員)	前期課程 後期課程	F	○			
7/17	アクサユネスコ減災教育プログラム助成決定通知が届く							
7/20 ~25	台風6号 最低気圧:950hPa	台風の影響で村営船欠航						
7/21 8/13	集会室床改修工事	地区避難所ともなる学園集会室の床板の改修工事を職員も手伝った		G		○	○	○
8/4	台風9号 最低気圧:985hPa	8月10日全職員出張に向け8/8以降の欠航に備え、8/5・6も学校閉庁日に						
8/30	三島片泊学園安全部会 (職員研修)校区内安全点検	職員は3班に分かれ校区内の危険箇所確認 危険箇所報告会により共通理解	全職員			○		
9/8	ショート避難訓練(地震)	事前予告「週内に行く」ありで避難訓練を実施	清掃時間	A	○	○		
9/10	台風14号 最低気圧:905hPa	臨時職員会議を開き、臨時休校時の連絡など台風対策について話し合った						
9/14	アクサユネスコ減災教育プログラム教員研修会リハーサル		Zoom接続			○		
9/20 ~21	アクサユネスコ減災教育プログラムオンライン教員研修会(2日間)		職員2名参加			○		
9/27	アクサユネスコ減災教育プログラム教員研修会報告書作成					○		
9/27 ~29	台風16号 最低気圧:920hPa	台風の影響で村営船欠航						
10/5	三島片泊学園安全部	教員研修会後の減災活動について部会で協議	創作劇の係分担	H		○		
10/6	17:13 鹿児島東沖地震 震源地:大隅半島東方M5.5 震源の深さ:約40km	職員の緊急地震警報(アラーム)が鳴り、児童生徒と職員は速やかに校庭へ避難	放課後子どもプラン「ジャンベ教室」活動中	A	○	○		
11/6	文化祭(後期課程生) 創作劇「耳をすませば」	東日本大震災の被災地のその後についての創作劇を発表し、地震及び津波に対する学校・地区民の危機意識を高めた ※保護者を含めた地区民の95%(29名)が参加	9月の教員研修会参加後の取組	H	○	○	○	○

11/20	アクサユネスコ減災教育飛散防止フィルム計画に向け購入相談	地区業者協力	I		○		
12/7	アクサユネスコ減災教育ガラスフィルム60m分届く		I		○		
12/9	アクサユネスコ減災教育会計報告作成		→郵送	I		○	
12/9	11:05頃 十島村悪石島地震 震源地：トカラ列島近海 M6.1 震源の深さ：約14km	ニュースを確認し、本校の避難の仕方や食料（給食物資）、災害用備蓄物について確認を行った				○	
1/27	アクサユネスコ減災教育飛散防止フィルム貼り		9月の教員研修会参加後の取組	I	○	○	○
2/	ショート避難訓練（地震）	事前予告なしで避難訓練を実施		A	○	○	
2/25 ～27	アクサユネスコ減災教育活動報告会・減災教育フォーラム		気仙沼市			○	
3/7	三島片泊学園安全部	活動報告会・減災教育フォーラムの報告と次年度の防災・減災教育について				○	

【資料2】 実践の内容・実践の流れ

	活動名	活動と防災・減災教育のつながり	活動の実際
A	避難訓練	学校行事として 地震・津波避難訓練 を4月に行っている。地震は、震度6を想定している。「無言・整然・敏速」を守り避難する行動力と常に生命及び身体の安全を考え行動する態度を養い習慣化を図る。 清掃の時間に ショート避難訓練 （2学期は一部予告あり、3学期は予告無し）を実施している。	 放送の指示に従い行動する児童
B	三島村内後期課程交流学習 in 硫黄島	三島片泊学園の後期課程生は「in 硫黄島」で硫黄島に行き三島硫黄島学園と交流した。硫黄岳の噴煙の様子を観察しながら「硫黄島の自然と歴史」についての生徒の説明を聞き、理科の学習で硫黄島の硫黄を使った線香花火やクレヨン作りを体験しながら火山噴火についての学びを深めた。	 「硫黄岳」説明を聞き、火山噴火災害について考える生徒
C	三島村内後期課程交流学習 in 黒島（後期課程生）	交流学習「in 黒島」では、4学園の生徒が黒島に集合した。生徒が紹介した「 黒島流れ 」は、明治28年枕崎のカツオ漁船が低気圧の影響を受け遭難した出来事。当時、黒島の地区民が献身的な介抱をしたことから、枕崎市と黒島の交流が始まり、現在まで受け継がれている。交流の一つとして、毎年、5月に「 枕崎少年の船 」で枕崎市の子もたちが来島し交流している。活動を続けることで海の危険性を忘れず、枕崎市との交流を深め合うことができている。	 村内の後期課程生に紙芝居「黒島流れ」をパワーポイントで紹介し海の事故について説明する生徒
D	地区・学校推進委員会	年6回、学校と地区の代表者が集まり、地区の運営について協議している。学校からは、学校の様子を伝えたり、学校行事や児童生徒の安全に関する事等の協力依頼をしている。 ※ 委員は、学校代表者（校長、教頭、教務、PTA係）と、地区代表者（地区長、役場出張所所長、村議会議員、消防分団長、PTA会長、地区の役員、診療所等）20名で構成されている。	 港で児童生徒安全のための声かけや、港に救命用浮き輪の設置相談をしている様子

E	三島片泊学園安全部	<p>安全指導係・防火防災係を中心に、校内・校区内の危機管理、安全確認、防災計画を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ 校内点検 (毎月) ※ 危機管理マニュアル・校区の安全マップ作成 ※ 合同遠隔学習「防災教室」の調整と実施 ※ アクサユネスコ減災教育プログラムの参加 等 	 <p>通学路点検で確認した6年前の台風通過で損壊した家屋</p>
F	三島村内4校遠隔合同学習「防災教室」	<p>離島では、船便・宿泊の関係で講師を招聘するのは難しいため、遠隔システムを使った。鹿児島県防災研修センターと、三島村内の4校をつなぎ合同で学習した。4学園とも昨年度の島外避難を経験したことを想起し、自助「避難時の適切な行動」や共助を考え合う活動を通して、他者を尊重する意識を高めた。</p>	 <p>講師へお礼の言葉を伝える児童</p>
G	集会室床改修工事	<p>昨年度の台風10号通過時は、全ての窓を板でふさぎ避難所として使用した。今年度は地区避難所ともなる学園集会室の床板の改修工事を行った。工期は、夏季休業に入ってから、保存会の盆踊り準備がある盆前までとなり、解体など職員も作業を手伝った。</p>	

【資料3】9月の研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

<p>文化祭 (後期課程生) 創作劇「耳をすませば」</p> <p>9月の教員研修会で、東日本大震災の状況を学び、安全部会が開かれた。そこで、自然災害に対する危機意識と自助・共助の大切さを地区民と一緒に考えることが大切であると再確認した。文化祭では、熱演した生徒たちの劇を鑑賞した方々から共感を得ることができた。</p>	
---	--

【資料4】助成金・研修受講前までと今年度の実践で変わった点

<p>台風減災対策「飛散防止フィルム貼り活動」</p> <p>昨年度は、集会室の全ての窓を板で覆う作業をPTAと職員で行った。今年度は、校舎の窓に助成金を使って飛散防止フィルムを貼る作業をお手伝いいただいた。また、フィルムの種類や購入方法については、島でお世話になっている米盛建設の方々に相談させてもらうなど、地区の協力ももらい減災対策を行えた。</p>	
--	--

学校名	竹富町立古見小学校
担当教員名	我如古 優子

活動のテーマ	地域とともに考える古見地域の防災・減災活動
主な教科領域等	教科領域（ 特別活動・生活科・結め海科（海洋教育） ）
アプローチ	※該当するものに○をつけてください（複数可） <input type="checkbox"/> 地域連携 <input type="checkbox"/> 避難訓練・避難所運営 <input type="checkbox"/> 専門家の活用 <input type="checkbox"/> 体験学習 <input type="checkbox"/> 学校間・地域間交流 <input type="checkbox"/> 教科連携 <input type="checkbox"/> 地域発信 <input type="checkbox"/> カリキュラム開発
活動に参加した児童生徒数	（ 全学年 7 人）（複数可）
活動に携わった教員数	8 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	10 人 【保護者 3 人・地域住民 9 人・その他（ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2021年 4月 1日 ～ 西暦 2022年 3月 18日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください（複数可）。 <input type="checkbox"/> 地震 <input type="checkbox"/> 津波 <input type="checkbox"/> 台風 <input type="checkbox"/> 洪水 <input type="checkbox"/> 河川氾濫 <input type="checkbox"/> 土砂 <input type="checkbox"/> その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

古見地区の緊急避難場所として、2019年本校の屋上に避難場所が設置された。そこで、地震津波などの災害が生じた場合には学校が避難場所になり、地域住民と一緒に避難所の運営を行っていく必要がある。そのため、教職員をはじめ、児童・保護者・地域住民と一緒に防災・減災についての知識や技術を習得する。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 10月：地震津波避難訓練について 公民館役員及び消防団との打ち合わせ
- 10月：助成金を活用しての防災グッズ購入に向けての打ち合わせ（学校）
- 10月：事前指導
 - 全体：保護者による読み聞かせ 紙芝居「地震だ！いなむらの火をけすな」
 - 2・3年：地震の時は「ダンゴムシのポーズ」をとろう
 - 4・5年：地震の時の、学校内の危険を予測しよう
- 11月：沖縄県広域地震・津波避難訓練に参加
 - 避難訓練当日に地域の防災無線にて地震・津波避難訓練参加呼びかけ（公民館）
 - <避難訓練当日の流れ>
 - ・地震・津波避難訓練実施
 - ・ワークショップ（屋上避難場所にて簡易テントの設置・災害時に使えるチラシでお皿づくり）
 - ・消防団の講話
 - ・給食時…ワークショップで各自作ったチラシのお皿を使って給食を食べてみよう
- 11月：避難訓練に参加していただいた地域の方にアンケート実施
- 12月：地震・津波避難訓練後の成果・課題の情報共有（学校）
- 12月：避難訓練を実施して町役場への要請資料作成（学校・公民館役員）
- 12月：近隣校の屋上避難場所の視察
 - 1月：次年度に向けての計画について、公民館役員との打ち合わせ

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ・9月の研修会で頂いた「防災学習シート」を参考に、各学年の発達段階に応じた事前指導を行うことができた。
- ・例年、避難訓練の中で消防団からの講話をして終了だったが、今年度は訓練後に講話とワークショップを実施した。その中で、助成金で購入した防災グッズの使い方（簡易テントの設置練習を児童・地域に分かれ行った）や、防災グッズを紹介することができた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の観点から

- ・助成金を活用して防災グッズを揃えたことで、学校職員・児童・保護者・地域 からもいざという時の準備の重要性や防災についての声が上がリ意識向上が見られた。
- ・打ち合わせ時から地域と一緒に取り組むことで、地域を巻き込み、地域とともに防災に取り組んでいくことの重要性を学校・地域で共有することができ、次年度へつなげる基礎ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

- ・事前指導の中で、実際に学校内外での危険を予測することで、自分事として捉えることができていた。また、休日の時など学校外での災害発生時の行動を考えることで、いっどこで災害に遭遇するかわからないので、日ごろから「自分の命は自分で守る」ための行動力を身につけることができた。
- ・ワークショップの中で、児童だけで「簡易テント」を設置することを体験した際、みんなの行動がバラバラで中々テント設置ができなかった。その体験の中から「みんなで力を合わせる」「リーダーシップ」の大切さに気付いていた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の観点から

- ・避難訓練の重要さは理解しているが小さな地域ということもあって、学校任せな部分があったが、自分たちの地域・住民を守るために、学校と連携し災害時の訓練や避難所設営などに取り組んでいくことを再確認できた。
- ・避難訓練だけではなく、今回のようなワークショップなどを通して「炊き出し」「非常食について」「夜間訓練」などをしてみたいという積極的な意見が出て、防災意識の向上が見られた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・避難訓練だけで終了ではなく、学校・地域住民が集まる機会に「ワークショップ」を取り入れることで、自分事として捉える機会になった。
- ・地域(公民館役員・消防団)も一緒に打ち合わせを重ねることで、地域を巻き込んだ避難訓練の実施ができた。また改善点がみえ、町役場への要請へとつなげることができた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ・年間を通して防災教育に取り組むためにカリキュラムの作成と継続できる内容設定。
- ・地域と連携して防災教育に取り組むために、公民館の年間計画に避難訓練や防災活動を組み込んでもらう。
- ・防災グッズや非常持ち出しバック(非常食)購入資金の予算化。
- ・避難場所の整備について公民館と連携して要請活動。

7) その他(※特にあれば記述)

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ(JPEG)もご提供ください。

(写真・資料の元データは、1月末に提出した実践共有資料でご提供いただいたデータと同じであれば再提出の必要はありません。)



事前指導：全体 保護者による読み聞かせ



紙芝居「地震だ！いなむらの火をけすな」



事前指導 2・3年
「地震の時はダンゴムシのポーズになろう」



事前指導 4・5年
・助成金で購入した防災ヘルメットの調整



事前指導 4・5年 「地震の時の、学校内の危険を予測しよう」



避難訓練の様子



消防団協力のもと地域の避難の様子



消防団の協力を得て高齢者の避難 誘導の実施



学校屋上避難場での全体会の様子



ワークショップ
児童のみで簡易テントの設置に取り組む



ワークショップ
チラシで作るお皿づくり



助成金で購入した防災グッズ（簡易トイレ）体験



給食時間 自作のチラシのお皿で食べる様子

島に津波襲来を想定

古見小で避難訓練



西表島の古見小学校
(赤嶺智郎校長)でこ
のほど、県広域地震・
津波避難訓練を、古見
公民館(永露芳子公民

館長)、古見消防団(石原和義団長)と協力の
下、地域住民とともに
実施した。午前10時に、
町の地震緊急放送があ
り、児童は机の下に潜
り、その後運動場へ集
合し学校屋上の津波避
難場所へ避難した。
地域住民は防災バッ
グなどを持って屋上へ
避難し、消防団はお年
寄りの家庭をまわり、
屋上まで誘導して訓練
は行われた。
児童、住民が避難終
了後、屋上で4年の山
内まりさんの司会で全
体集会が行われた。会
では町から公民館に支

古見小学校で避難訓練
が行われた(提供写真)

給された簡易テントや
今年度古見小学校がア
クサユネスコ減災教育
プログラムから助成を
受けて購入した簡易テ
ントや防災グッズを住
民と子供たちが組み立
てたり、防災グッズの
紹介を行ったりした。
我如古優子防災担当

教諭より、チラシで作
る食器作りのワーク
シヨップもあり、子供
たちは実際に給食で食
器として利用した。
石原消防団長は「八
重山でも昔、明和の大
津波があり、前良川と
後良川にも津波が押し
寄せ、学校の裏あたり
に水が来たという事
です。大きな地震の際
は、命を守るために高
い場所へ急いで避難し
ましょう」と話した。

今村陽月さん(4年)
は「避難は素早くでき
ましたが、その後子供
だけでテントを立てる
のは苦労して時間がか
かったのでチームワー
クを良くしてスムーズ
にできるようにしたい
」と感想を述べた。